方正友好交流の会　会報第５号

星火方正

～燎原の火は方正（ほうまさ）から～

参拝後、しばし公墓の前にたたずむ南野知恵子、伊藤忠彦両議員

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、インターナショナルな友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第５号）　～燎原の火は方正から～

目　次

黒龍江省ハルピン・方正を訪ねて	南野　知恵子	１
初めて訪れた方正県	伊藤　忠彦	３
故郷チチハルより、まず方正へ ―南野知恵子、伊藤忠彦両議員の方正日本人公墓レポート―	大類　善啓	５
注目され始めた日本人公墓の存在 ―マスメディアで相次いで紹介された方正公墓―	編集部	９
朝日新聞、東京新聞、「日本と中国」で紹介された記事		１２
「方正日本人公墓」が語るもの	凌　星光	１９
中国人の寛大さと慈愛心	金丸　千尋	２３
遠く万里離るとも いよいよ深し中日の情	石　金楷	２５
長野県開拓自興会結成６０周年記念訪中記	永原　今朝男	２７
・・・草の根の友好運動・・・	伊藤　州一	２９
残像　方正訪問記	樗沢　仁	３２
シャボン玉と般若心経	伊原　忠	３４
731 部隊記念館で忘れたもの	津久井　洋	３５
「交流と歴史検証の旅」に参加して	栗林　稔	３６
今年も会いに来ましたヨ	奥村　正雄	３７
方正日本人公墓　鎮魂歌	福久　かずえ	３９
「方正」はわが心の座標軸	藤井　正義	４１
中国の思い出の旅　我が半生記	石原　政子	４３
活躍する残留孤児・婦人の２世３世たち	朝日、東京新聞	５６
≪短編小説≫　赤々と燃える楓の葉	井上　征男	５９
日本に残留し定住したある日本人 ～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第２回	大類　善啓	６５
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの	編集部	７２
報告　書籍案内　編集後記		７３

黒龍江省ハルピン・方正を訪ねて

南野 知恵子
（のおの ちえこ）

日・中双方は、国交正常化35周年に合わせて、日本からの直行便を有する中国の19の都市に、総計２万人規模の訪問団を派遣するなどの計画を共に実施する事が話し合われ、双方合わせると３万人にも達するのではないかと予想される程、日中国交正常化35周年記念観光交流事業が活発に行われております。

交流計画の一つとして黒龍江省のハルピンに、団長として訪問する機会をいただいたのは、自由民主党・二階俊博総務会長からで、当時私は総務会副会長で、日中友好等の話をしている時でした。私は、ハルピンより更に北方に位置するチチハルで生を受けており、またハルピンは、大戦時疎開した所でもあり、里帰りの様な気にもなり、二階先生の命を感謝の心でお受け致しました。今回ハルピンの記念訪中団は300人にもなる大きな団体でありました。

念願の方正公墓を参拝

私は、9月28日（金）朝7時48分東京発の新幹線で新潟駅、新潟空港より南方航空にてハルピン空港に13時40分（時差1時間）到着しホテルに伺う途中、私達家族が団体でチチハルからハルピンに疎開した時の宿「大星ホテル」と思える建物にも出合えて感激でした。ホテルに到着し、ハルピン残留邦人お二人と面談させていただきました。男性の方は、都市で養父母に育てられ、十分な教育を受けさせていただいた。女性の方は農家で養父母に温かく育てられ、次女のお婿さんと面会に来られお孫さん達とも幸せに暮しておられます。お二人とも、生命を助け、養って下さった養父母への深い愛情に対し、何度も感謝の言葉を語って下さいました。私は子どもの頃の当時の様子を思い出したり想像したり、私も同じ立場になる事もあり得たかも知れないと思うと、「運命」「両親への感謝」等、色々な出来事が走馬灯の様に想い出され、同時に二人の当時を想像すると、胸があつくなりました。育ての親への恩をしっかり受け止め、感謝の心で、幸せな人生を歩いて欲しいと念願しております。今年11月には、お二人とも来日される事を確認し、再会を約束しました。

衆議院の伊藤忠彦先生も北京からハルピンに到着され合流しました。

２日目は朝7時半ホテル発、車で３時間弱走り、方正県にある「方正地区日本人公墓」を訪ねました。私が法務大臣の時、野沢元法務大臣と共に大類善啓さんがお訪ね下さった時、初めて公墓のことを知り、話題となった「方正の公墓」の事は忘れられませんでしたので、この機にぜひ訪問したいと思い立ち、私の思いは叶いました。

方正県に到着するとまず、方正県政府の方々を表敬訪問し懇談、その後、革命烈士記念碑、方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓、中国養父母の墓、記念館の順に、花束を供え、感謝の誠を捧げ、冥福を心よりお祈り致しました。民族の違う孤児、身寄りの無い子を、我が子の様に育てて下さった、養父母達の無償の愛に心の底から敬意をもって、最敬礼すると共に目頭があつくなってしまいました。お聞きするところによれば、政権を担う与党の現職議員として方正日本人公墓を参拝するのは初めてとのことでした。

促進させたい観光交流

ホテルに帰り、人民政府要人と我々一行の会見、この会見は翌日の「黒龍江日報」に取り上げられました。先方は黒龍江省人民代表大会常務委員会沈根栄副主任、中国黒龍江省旅游局の薄喜如局長他10名位で我々は、私と伊藤議員、花角顧問、木村、石山副団長、馬場、小久保、祖一事務局の一行でした。会見後、団員300人の待つ大会場へ移り、いよいよ、「日中国交35周年記念交流の夕べ」が開催されました。沈氏、薄氏の中国側の挨拶に次ぎ、日本側は団長の私と伊藤議員、顧問、次いで双方よりの乾杯で、アトラクションも始まり人々の交流もにぎやかになりまし

た。宴も終盤に近づくと、楽団は中国で最も歌われている遠藤実先生の「北国の春」と「四季の歌」を２度も演奏して下さいました。私は沈氏、薄氏、伊藤先生と我々の団の仲間も誘って壇上に上がり、共に大声で合唱しました。交流会は、和気あいあいと和やかな余韻に包まれ素晴らしい交流を作り幕となりました。

今日のご縁を大切にまたいつかお会い出来る事を楽しみにし、日中友好を更に深めて行きたいと思います。そして次はチチハルへの夢が叶うよう!!

色々な人々との出会い、出来事を胸一杯に詰めて、30日は朝８時ホテルを出発し、帰路につきました。国土交通省、全国旅行業協会、日本旅行業協会の方々、方正友好交流の会・大類善啓事務局長、朝日新聞・古谷浩一瀋陽支局長様たち、通訳の方々への感謝の気持は、この旅の想い出と共に忘れられないと思います。ありがとうございました。

（参議院議員）

方正テレビ局の取材に応える南野知恵子さん

南野、伊藤両議員が参拝に訪れた革命烈士紀念碑

初めて訪れた方正県

伊藤 忠彦

９月２７日突然、二階俊博先生から、北京に行き、その後黒龍江省のハルピンに行って日中国交正常化３５周年の会合に出てきてくれと言われた。３５周年を記念したレセプションに日本国を代表して出席すると共に、温家宝総理との会見を人民大会堂でさせていただく事となったのである。事の重大さに驚いてしまった。

思えば、１０年前の２５周年の時、石川好先生団長のもと任景国さんと一緒に新潟空港から錦鯉をたくさん飛行機に乗せて四川省成都と北京へ（釣魚台国賓館）へ行ったのが、私自身の初めての訪中であった。あれから１０年、３５周年では一人の国会議員として訪中し、温家宝総理にお目に機会を得るに至った。二階先生のお陰でこの３５周年の一番大切な時にこうして訪中させていただいたこと、また今日まで私自身を支えて下さっている皆様には深く感謝を申し上げなければならない。

日本語の流暢な女性との出会い

ハルピン空港からホテルまでのバスの中で、２０代の女性で日本語のとても流暢な人といろいろな話をした。まず驚いたのは、ここハルピン市にあるほぼ全ての大学に日本語学科があり、多くの黒龍江省の若者が日本語を学んでいるということだ。この地は日中戦争当時の７３１部隊の毒ガスをはじめとする化学兵器の問題や、遺棄兵器問題など厳しい記憶が多い中で、今の若者が日本語を多く学んでいるという事に本当に驚いた。しかも彼女の口から「戦争は政府の判断。日本人一人ひとりもその被害者だ」という言葉を聞いた。最初は我が耳を疑うほどに驚いた。私の半分くらいの年の若い人が、このような理解をしているのだということに、私は救われたような気分だった。

ハルピンで参議院議員の南野知恵子先生と一緒になった。９月２９日は、朝６時起床。７時３０分出発で３時間をかけて２００ｋｍ離れた方正県へ向かった。方正県には、方正県人民政府、黒龍江省人民政府と中国人民政府の決断でつくられた日本人公墓と、日本の残留孤児を育ててくれた養父母の皆さんの公墓があるとの事で、私と南野先生は、現職の与党自民党の国会議員として初めて墓参に伺うこととなったのである。とにかく２時間半以上トウモロコシ畑に続くトウモロコシ畑。その後少々田んぼがあったが、それを行くと方正県に着いた。着いてまず方正県の副県長さんと会見した。この方正県に行くと、街にオレンジ色の３輪タイプの韓国現代自動車の小型軽自動車がタクシーとしてあちこち走っていた。珍しいなぁ～と思って見ていた。それから、こんな遠い所にすら日本語学校があるのに驚いたと同時に、副県長さんの通訳もうまい日本語を使っていたことには本当に驚いた。

方正公墓と養父母公墓に参拝

会見の後、まず向かったのは革命烈士記念碑だ。我々は献花をした。ここには、この方正地区出身で、抗日戦争、中国共産党による解放戦争、更には社会主義建国で、犠牲になった人のうち、２８名の英雄が祀られているのだとの事。我々は少々複雑な気持ちであったが、この記念碑と日本人公墓の両方建てる気持ちとは何か、ということも考えなければならないと思った。

この後に日中友好園林という場所に行った。日本側から山梨県の当時の天野建知事、長野県の吉村元知事などが協力して建立された平和友好の碑や、方正地区、麻山地区の日本人公墓と中国養父母公墓（これは、神奈川県在住の遠藤さんという方が、方正県で中国養父母に育てられて帰国後、建立された）に献花をさせていただいた。南野先生はお参りをされたあと一人たたずみ御自身の長い歴史の中の思いがあふれられたのか涙を流されていたのがとても印象的でした。

地元テレビ局の方のインタビューがあった。私は今回はからずもこの黒龍江省の旅に参加させてもらったが、本当に、当時困っていた日本人の子供を、敵国の子供ではなく人間の子

供として育ててくれた気持ちや、集団自決した者を含めた我々同胞の苦しかった人たちの遺体を弔ってくれた方々が、ここに居られたという歴史を目の当たりにした事について触れた。

また、ここ黒龍江省にはどの大学にも日本語を学びたいと思う学生があふれている今の状況をよく知る事ができたのは、何よりも私自身の収穫だったこと。多数の日本人戦争犠牲者を助けてくれたここに、今度は平和の産業である観光を通じ、多くの日本人が訪問できる様にしたいと思っている、と答えた。

墓参を終えて再び副県長さんを迎えて昼食会を行い、３時間をかけてハルピンへ戻った。この黒龍江省は人口３５００万人（中国全土で１４億人３０省ある）日本の国土の１．２倍くらいの広さだ。ハルピン市は９００万人の人口、ちなみに方正県は２３万人の都市だった。素晴らしい墓参だった。

藤原長作さんの偉業

それから一人の日本人の事を教えてもらった。この寒冷の地に、岩手県の農夫・藤原長作さんが稲作を伝えたということである。当時苦労に苦労を重ねて、遂に「東北地域（中国）稲作の父」と言われるほど藤原さんは評価された。日中国交正常化する以前からの努力だったと言われている。こうした名も知られない多くの先人の皆さんの努力の上に、今日の３５周年があることを忘れず、これからの友好に努めてゆきたいと思っている。

ハルピンに戻り、省政府の方々と意見交換をした。現職国会議員として南野先生と私自身が方正県に伺ったことが、省政府としても大きな事だったのだと思う。友好的な雰囲気で会見が終わり、３００名の日本からのお客様との記念パーティーとなった。私もここで挨拶に立つこととなったので「まず、私はまさに日中国交正常化がなされた日、すなわち９月２９日に、ここ黒龍江省ハルピン市で多くの皆様とお祝いの会に出席ができたことを素直にうれしく感謝申し上げたい」と申し上げた。そして「方正県に私も南野先生と訪問して、中国の皆様の心に触れる機会を得た」ことに感謝申し上げた。そして最後に、最初に私が車で２０代の女性通訳から言葉を皆様に披露した。「ここ黒龍江省は、気候は寒いが人間は暖かいのです。日本の方との交流を楽しみにしている」と言ってくれたことを皆様に申し上げた。

本当に今日は大人の中国に大人の相手をしていただいた様だ。日本のマスコミは、残留孤児のこうした公墓の事をどのくらい知っているだろうか。例えばハルピン市内の大学にはどの大学にも日本語学校があることをどのくらい調べているだろうか。ハルピン市から２００ｋｍも離れている方正県ですら日本語学校があることを、マスコミは知っているだろうか。過去の日本政府の罪と日本人に対する感情の整理が、中国の若い人にまでつきつつあることを、マスコミの人たちはどのくらい知っているのだろうか。多くの中国側の幹部の人たちが大きく時代を転換しようとしている現状を理解しているだろうか、と思った。

私は今回日中友好３５周年の今年最後の訪中となるであろうこの旅先の黒龍江省ハルピン市に来て、日中間の大きな時代の転換期に立っていることを体で感じている。つまり両国共に未来思考で前に向かおうとしている時だ。しかし、決して過去の事を軽んずるのではなく、大きな教訓として胸の中に入れておくべきだ。中国側もただ被害者だと言っているのではない。戦後の混乱の中で“怒り”や“恨み”の満ちていた時に、それでも人間として日本人にくれた笑顔もあったという事を忘れてはならないのではないだろうか。

私は少しでもそれが解ったのなら、あとは行動するだけだと思っている。日本の外交の中でも最も大切な日中関係について、全力をあげて両国がさらに近い国家となれる様に次の４５周年に向けて努力をしたいと思った。沈黒龍江省全人代常務委員さんも「自分は７０歳だ。４３歳の君に期待をする」と言われた。唐家璇先生から、「難しい問題を解決する所に成長がある」と言われた言葉も忘れられない。

最後にチチハル生まれで、ハルピンに疎開された南野先生のお供をすることができたことに改めて深く感謝申し上げたい。

（衆議院議員）

故郷チチハルより、まず方正へ

―南野知恵子、伊藤忠彦両議員の方正日本人公墓参拝レポート―

大類 善啓

「ぜひ方正公墓に参拝したい」

南野知恵子参議院議員に初めてお目にかかったのは、２年前の７月、法務大臣に就いておられた時である。前任の法務大臣であった野沢太三さんが（社）日中科学技術文化センターの会長に就任され、その挨拶のため大臣室を訪れた際、私も同道したのだ。

野沢会長と南野大臣が、一通りお話を終えたころを見計らって、会報の「星火方正」を取り出し、日本人公墓のことをお話したところ、チチハル生まれの南野さんは、たいへん驚き、親しくしておられる密教の僧侶による供養ができないかというお話をされた。それから二週間も経たないうちに、密教の老師とともに事務所にお見えになった。

老師の名は、池口恵観氏である。かつて密教の某僧侶が、ハルピンで護摩供養をするということで、ある男が日本でお金を集めるという詐欺のような話があったことを私は聞いていた。その話は改革開放政策が始まったばかりのことである。中国政府が護摩供養など許可するような時代ではない。私自身、日本密教の祖である空海については、いたく関心をもっている。真言密教のマントラなどには大変引きつけられている方である。しかし、その種の醜聞を聞いていたので、正直いって積極的にぜひ護摩供養をしてもらいたい、という気持ちはまるでなかった。

しかし、池口氏と話をすると、中国の密教関係者と交流があり、滅びつつある中国の密教復活に向けていろいろ活動をされているという。仮に方正で供養するといっても、中国の僧侶と合同で行うつもりである、と言われた。それはいい、それなら両国民も安心できるだろうと思った。そんなことを今思い出す。

それから２年も過ぎたこの９月初め、南野さんからの電話である。日中国交正常化35周年記念の行事として、ハルピンに 300 人の日本人が集まり、交流記念パーティーが開かれる。その交流団の団長として急遽、ハルピンへ行くことになった。ついてはぜひ、方正に参拝したいというのだ。

交流パーティーは、９月 29 日の夜開かれる。28 日にハルピン入りし、９月 30 日の朝にはハルピンを発って帰国するというたいへん忙しく短い日程である。

ハルピンから方正まで車で３時間はかかる。往復６時間、参拝などの時間を入れると、まる一日、方正訪問に費やすことになる。交流パーティーの日本側主催団体である（社）全国旅行業協会の方も、随行される国土交通省の花角英雄・観光事業課課長も、当然ながら、その点を心配された。しかし南野議員は、何度も私に、「１日かかっても方正に行きます」と断言されたのだ。

出発直前にお会いした際、かつてチチハルからハルピンに疎開した時、ハルピンの「大星ホテル」に日本人たちが集まった。そのホテル跡もぜひ訪ねたいとのことだった。またハルピンでは、中国に残留せざるを得なかった二人の方にもお会いしてお話をしたいということで、すでに厚生労働省を介して手配もされていた。

南野議員の方正行きが確定したので、すぐ方正県政府に連絡を取り、老朋友である陳福堂さんにも電話を入れた。陳さんは今、外事弁公室を退職しているが、数年前まで、県政府の外事弁公室に 30 数年勤務し、多くの残留婦人に慕われていた人である。

南野さんは、国共内戦や朝鮮戦争で亡くなった人、抗日戦争で斃れた人たちのお墓の前に立つ革命烈士紀念碑にも参拝したいといわれた。

今までに公墓を参拝された政治家は、我々が確認したところでは、加藤紘一さん、日本共産党の吉川春子さんだけである。加藤さんが参拝された時は、ちょうど議員を辞職されたときであった。（会報『星火方正』２号参照）

日本政府が公式にこの公墓の存在を認知し、中国政府と中国の人々に感謝の言葉を未だ述べていないという状況の中、現職の与党議員、それも元法務大臣である南野さんの参拝は極めて大きな意味があると我々は思った。

南野さんが参拝することを朝日新聞の加藤千洋編集委員にお伝えしたところ、瀋陽支局長の古谷浩一さんに伝えましょうと言われた。その翌日、古谷さんから、方正にぜひご一緒したいという電話が入った。古谷さんとはハルピン空港で落ち合うことにした。（この時取材された内容は本誌 12 頁に掲載した記事に結実した）

花角課長からは出発前夜、今北京にいる伊藤忠彦衆議院議員（自民党）がハルピンに向かい、方正を訪れることになると電話が入った。

懐かしい老朋友（旧友）たち

9 月 28 日（金）の午後２時前、ハルピン空港に着いた。南野さん一行は黒竜江省旅遊局の方々が出迎え、そのままハルピンのホテルにひとまず直行された。朝日の古谷さんと私は、車の手配をしていただいた黒竜江省政府外事弁公室の徐速さんと別れ、そのまま空港から方正に車で向かった。

私が初めて方正を訪れたのは 1993 年の７月である。それからずっと方正の会に関わっているが、14 年ぶりの方正訪問である。当時、高速道路はなかったが、今は立派な高速道路が開通している。古谷さんとは初対面だったが、積もる話がいっぱい、という感じで方正の会の軌跡などをお話しながら、ときたま思い出すかのように車窓から外を見る。広大な大地にとうもろこし畑が広がる。車は時速 120 キロのスピードだが、それほど速いという感じはしない。自分で運転しないこともあるが、まず東京では 100 キロを超えて走る車などに乗ったことはない。80 キロでも速いと感じる自分が、120 キロの速度でも速いとは感じないとはどういうことなのだろう。たぶん、遮る物が無い広々とした大地を、ほとんど我々の車だけが走る。それが思った以上にスピードを感じさせないのではないか。

14 年前は時速 80 キロで来た。３時間はかかった。高速道路で走った今回、20 分ほど早く方正に着いた。

方正で一番いいといわれるホテル「鑫禧商務大酒店」に入る。ロビーには外事僑務弁公室副主任の李宝元氏が出迎えてくれた。

その晩は、旧友である陳副堂さん、彼のかつての上司で 93 年当時、県の財政担当の副県長を務め、方正県に始めて創立された方正日本語学校の校長先生（現在は名誉塾長）でもあり、我々が刊行した『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』に詩情あふれる随想を寄稿していただいた王鳳山さんも加わって食事を共にした。

陳福堂さんは立派な日本語を話すが、通訳として趙会君さんという若い女性も参加した。彼女は方正で生まれ方正で育った。お祖母さんが残留婦人、彼女は３世ということである。小学校４年の時、日本に行き、高校を卒業、その後北京や上海に留学し、２ヶ月前に方正に戻ってきた。たまたま県政府の外事弁公室から通訳のアルバイトとしてやってきたのだ。千葉には両親が住んでいる。彼女のこれからの方針はまだ決まっていない。今しばらくの間、方正の親戚に身を置き、様子を見ようと思っているという。

方正出身をはじめとする残留婦人の２世、３世で日本に定住し活躍している人も多い。我が方正友好交流の会の理事を務める遼寧省出身の２世である藤原知秋さんもその一人で、国家損害賠償訴訟など、中国帰国者が 15 の地裁で起こした裁判では通訳として大変な活躍ぶりである。趙会君さんも２世、３世で活躍する多様な人材群の一人といっていいだろう。

王鳳山さんに会うのも 14 年ぶりである。朝日の古谷さんも加わり、その晩は大いに盛り上がった。

方正にも建設ラッシュ！

翌２９日（土）朝、朝食の前にホテル周辺を散策。その後、陳福堂さん、古谷さんと朝食を共にし、南野さん一行が到着する前のひととき、陳さんの案内で方正の町を見て回った。

４年前に新しく建てられた６階建ての県政府は、立派なたたずまいを見せている。田舎の役場という雰囲気ではない。県政府前の広場も広々として堂々たるものだ。その周辺も建築ラッシュだ。職員たちが住む集合住宅や、ハルピン出身の華僑が建築した華僑向けの別荘群など、残留婦人たちの帰国に伴う日中の強い結びつきが、方正を豊かにし、このような別荘群の建設にも表れているといえるだろう。別荘群から見える建設現場は、「発展する方正」を象徴しているように見えた。

中央大街を歩く。１４前に方正に来た時は３泊もしたが、こんな都会的な雰囲気を味わった記憶はない。当時泊まったホテルは、旅館風で水洗トイレも完備していなかった。

今、中央大街をよく見れば、なかなか洒落た雰囲気なのである。「発展する中国」が、ここ方正にも確実に押し寄せていることを思わせる。方正のかつての田舎くささが払拭された感じなのだ。

その後、二つの自由市場を見た後ホテルに戻り、李宝元さんとともに 10 時 20 分、高速道路の方正の出入口で、南野さん一行のバスを待つ。７時半ハルピンを発ったバスは、やはり３時間ほど経って方正に着いた。

県政府前の広場で南野さんと再会、伊藤忠彦さんも元気にバスから降り立った。花角課長、全国旅行業協会副会長の木村茂男さんたちを含めた一行の８人、朝日の古谷さん、そして私、総計１０人は、県政府の３階の大きな会議室に入った。

方正県の党・常務委員であり、県政府の常務副県長である劉軍さんが応対してくれた。外事僑務弁公室の主任・王偉新さんの司会でまず、劉軍副県長から歓迎の挨拶を受けた。劉さんは、南野議員一行を熱烈に歓迎する言葉を述べた後、我々の会が 93 年から方正に対してさまざまな活動をしたことを紹介してくれた。答礼の挨拶を南野さんが行った。

南野さんは、昨日ハルピンで残留孤児だった 2 人に会ったこと。彼らがいかに養父母に感謝しているかを述べた。また方正日本人公墓を建立し、維持管理していただいていることなど、改めて方正県政府に今回の「感謝の旅」の思いを語った。

夕刻にはハルピンに戻らなければならない。劉軍副県長もそのことを考慮され、挨拶を交換した後、すぐにお土産を我々に下さった。方正名物のきくらげだという。日本側も用意したお土産を手渡す。方正友好交流の会からは、ささやかだが、感謝の意を込めて、公墓維持管理に対する支援の志を劉軍副県長にお渡しした。

方正公墓での涙

劉軍さんたちとは昼食を共にすることを約束して、一行は直ちに革命烈士紀念碑に向かった。県政府から 20 分ほどで着いた一行は、用意した花束を捧げ、紀念碑に頭を垂れた。革命烈士として葬られているのは 176 名、一番多いのは国共内戦の犠牲者だという。そして朝鮮戦争の犠牲者、少数だが抗日戦争の烈士もいる。南野さん一行は、日本人が眠る公墓に詣る前に、中国の尊い戦争犠牲者にまず頭を下げた。

いよいよ方正の日本人公墓である。そこからバスで５分ほど乗り、方正公墓に着いた。日中友好園林という看板が掲げられている。14 年前に訪れた時は、こういう看板もなかった。

長野県開拓自興会などが建てた「中日友好・往来記念」の碑のいわれを李宝元さんから説明を受けて、方正地区日本人公墓の前に立った。

南野さん伊藤さんの２人は、公墓に花束を捧げて深く一礼した。２人はしばし公墓を見つめた。南野さんの眼に涙が光る。我々一行もそれぞれの思いを込めて公墓に頭を下げた。

南野さん伊藤さんは続いて、隣に建つ麻山地区日本人公墓に深く黙礼された。ここには、

いわゆる麻山事件の犠牲者である婦女子４百数十名が眠っている。麻山事件とは、ソ連軍の進撃に遭い、凌辱に遭うなら死んだ方がいいと、鶏西市麻山地区で婦女子が集団自決した事件である。一般人であったにもかかわらず、「死して虜囚の恥かしめを受けるな」という忌まわしい戦陣訓の犠牲者たち、いわば日本の軍国主義の犠牲者たちである。この公墓も 1984 年、日中友好人士である金丸千尋さん（本誌 23 頁参照）たちの努力の後、中国政府がこの地に建立してくれたのである。

この両公墓の後方に、残留孤児だった遠藤勇さんが自力で建立した中国養父母公墓がある。ハルピンで敗戦を知った南野さんは、当時小学生４年だった。幸いにも無事、家族とともに帰国されたが、一つ間違えば、孤児になっていたかもしれなかった。そのことを痛いほど意識されている南野さんである。

地元のテレビ局が取材

記念館に入った。かつての忌まわしい戦争の傷跡を忘れることなく教訓としたい、というこの記念館は、来年の春には改装する。その準備のためか、やや雑然とした雰囲気だが、日本がかつて犯した過ちを記述する文章がある一方、方正の農家に住み込み、独自の稲作栽培技術指導を行い、黒竜江省を米作中国一に仕上げた藤原長作さんの業績が文章と写真でしっかりと展示されている。日本の開拓民たちのかつての姿を偲ぶ農具なども陳列されている。訪れた関係者からの寄贈品である日本人形やこけしなども展示されている。

記念館を出たところで、方正テレビ局の女性が、南野さんと伊藤さん、それに私を、別々にインタビューしたいという。テレビ局の人が同行しているということはわかっていたが、まさか私までがインタビューを受けるとは思わなかった。

南野さんは、チチハルで生まれたこと、養父母のこと、公墓のことをインタビュアーにお話され、方正への感謝の言葉を述べられた。伊藤さんは、養父母が孤児のために尽くしてくれたこと。方正県政府と方正の人々の暖かい心の深さを、方正に来て感じることができたと答えられた。

インタビュアーは私に対しては、今後の友好運動の展望を聞かれたので、方正の会としては、方正日本人公墓を通して、国を愛することも大切であるが、それ以上に国際的な友愛の精神が重要であることを日中の若者たちに知ってもらうように努めていきたいと話した。

方正テレビ局は、その夜そして翌朝も、南野さん一行の方正訪問を報道したという。後日、陳福堂さんを通じて確認した。

方正公墓の参拝を終えてバスに乗り、昼食の会場に向かい、１時間ほどだが、劉軍氏らと歓談した。２時過ぎ方正に別れを告げ、バスでハルピンへと帰路についた。南野さんはこの方正滞在中、何度も私に「２年前に大類さんと出会い、方正公墓の存在を教えてもらい、こうやって方正を訪問できました。本当にお世話になり、ありがとうございました」と言われた。その篤い気持ちは、本当にこちらが恐縮するほどであった。法務大臣室でお会いした時以来、気取りのない人柄はすぐにわかったが、こまやかなお人柄であることを改めて感じさせられた方正での一日だった。

夜７時過ぎからハルピンのシャングリラ・ホテルで始まった「日中交流の夕べ」の挨拶では、南野さんも伊藤さんも、方正への思いを人々に開陳された。

方正と日本との交流の、新しい頁の幕開けを予感させる南野知恵子、伊藤忠彦両議員の方正参拝の旅であった。

（本会・事務局長）

注目され始めた日本人公墓の存在

―マスメディアで相次いで紹介された方正公墓―

編集部

方正友好交流の会が再発足してから２年半ほど経つ。ここに来て会の活動の成果が表れてきたようである。参議院議員南野知恵子・元法務大臣の方正公墓参拝もその大きな出来事だが、新聞と放送メディアが相次いで方正公墓に光を当てた。すでにご承知の方も多いだろうが報告したい。

松田ちゑさんの声

まず、（社）日中友好協会の機関紙『日本と中国』（７月５日付）が、方正日本人公墓建立を嘆願した松田ちゑさんへのインタビュー記事を大きく掲載した。その中で松田さんは、「方正の政府で墓を掃除してくれているし申し分ないと思っているんです。でもそれは本当は日本人がやること。国のために満州まで行って亡くなった人たちなんだから。戦争のときは（日本人が）中国人をひどいめにあわせたのに、中国政府はそういうことを思わないで世話してくれる。日本の政府はおかまいなし、そこがおかしい。日本と中国にはこれからも仲良くしてもらいたい。（それには）中国政府に任せっ切りにしないで、なんとかしてほしい」と語っている。（本誌 13 頁に掲載記事参照）

参拝団の声が方正から伝わる

次は、ＮＨＫのラジオ番組である。これは、若い時から良好な日中関係を創るべく活動している有数の中国通、木村知義さんが主導的に企画された特集番組である。木村さんはここ数年毎年８月に、「日中関係はどうあるべきか」というメインテーマで極めて意義のあるラジオ番組を製作している。今年も「21 世紀の自画像」～変る世界！日中関係、新たなステージへの構想～という企画で、８月９日と 10 日の２夜に亘って、それぞれ２時間、計４時間に亘る長時間番組を送り出した。

第一夜は午後８時５分～９時 55 分、「国交正常化から戦略的互恵関係へ」、第二夜も同じ時間帯で「理解と信頼の未来をどう築くか」というタイトルで、２夜とも（財）日本総合研究所会長の寺島実郎さん、日中文化交流協会会長の辻井喬さんの出演、最終パートには王毅駐日大使へのインタビューが入っている。

この第２夜の９時台のパートに、方正からのリポートが入った。放送される２ヶ月ほど前に木村さんから「方正友好交流の会」の大類に、方正公墓を紹介したいので参拝する訪中団があれば紹介してほしいという依頼があった。時期的にちょうどタイミングが合ったのが長野県開拓自興会の人たち 28 人のグループである。

番組では、ハルピンから方正へ向かう車中での参拝者へのインタビュー、方正県政府の声、自興会の神田忠亥（ただい）さんと神田さん一家を知る鄭漢保さんとの再会の様子、松田ちゑさんの声などがリポートされた。神田さんは放送の中で「悲惨な戦争というものの犠牲を絶対後世に伝えていかなくてはいけないと、やっぱり反省をしなければねぇ、駄目なんですよ、まず。それは歴史的な経過があるから、事実ですから、反省と謝罪をまずはして、それから日中友好をせにゃいかん、これをですね、子々孫々まで伝えていく、そのことを私は考えて行きたいと思います」と語った。

戦争の傷跡から生まれた日中の絆――方正公墓

最後に「中国の人々によって造られた方正の日本人の墓は、戦争の傷跡から生まれた、日本と中国の絆です」という鈴木健一ディレクターの現地からの声で方正リポートは終わった。

事務局では、放送する前に、何人かに番組の案内をしたところ、放送後、例えばアジアでの駐在経験がある岩噌弘三さんからは、大要次のようなメールが来た。「テレビでなく、余り知られないラジオの放送では、全くもったいない立派な内容の番組をご連絡頂き誠にありがとうございます。もともと、日本の政治家は海外事情にうとい上に、最近の若い政治家は、敵を作ることばかりに熱心で、人種や思想を超えて、仲良く暮らしていこうとの理念がないのに腹立たしく思います。仕事で東南アジアに４年ほど暮らし、中国人の優秀さと大らかさをいろいろと経験し、大国の人のスケールの大きさや信義を重んじる態度を立派だと感じることもよくありました」という感想が送られてきた。

番組終了後、関係者に『方正県物語』や会報などの資料をお送りしたところ、詩人でもある辻井喬さ

んからは「このような純民間の人間的な交流こそ、両国の平和で友好的な関係にとって大切なことだと思います。私も機会を作ってお詣りさせていただきたいと思います。どうかご自愛下さり、運動が盛んになることをお祈りしています」という葉書が大類のもとに届いた。

映画キャメラが方正に入った

記録映画監督の羽田澄子さんの作品『終わりよければすべてよし』という、末期医療を迎えた人々を描いた記録映画が今年各地で上映され大きな反響を呼んだ。その羽田さんが、方正公墓を記録映画にしたいという考えを持たれ、会が企画した「中国・交流と歴史検証の旅」に参加された。その中国行きを前に、東京新聞が8月14日付夕刊社会面に『友好の原点「記録に」』という記事で、羽田さんの「思い」を大きく紹介した。この中で羽田さんは「全くの白紙状態ですが、撮れるものをメモのつもりで撮ってみるつもりです」と語っている。(本誌14頁参照)また「日本と中国」も方正訪問後、羽田さんをインタビューした。(15頁参照)

この記事を見て、かつて旧満州に生まれた東京・小金井市に住む上木喬さんという90歳の方から、参拝団に方正公墓に花輪を捧げてほしいとカンパが送られてきた。

朝日の記事「私の視点」に全国から反響

大類が書いた朝日新聞「私の視点」の記事も反響が大きかった。(16頁参照)この原稿は、南野知恵子さん一行の訪中以前に書いたものであるが、掲載されたのは訪中後の10月10日だった。翌日の11日には、中国で最もインテリ読者が多いという『参考消息』にも翻訳され転載され、すぐにそれを引用する形で、人民日報(中国語版)のインターネットにも掲載された。(17頁参照)また、ヘラルドトリュービン紙と朝日新聞が提携する英字紙『ヘラルド朝日』にも翻訳転載された。(18頁参照)

反響のいくつかをご紹介したい。まず、事務局に「南十字星会」の会長である青柳幸司さんが訪ねて来られた。青柳さんは、二人のおじを旧満州とニューギニアで亡くされていて、南方などで未だに収集されずにいる100万柱を超える遺骨の収集に取組んでおられる方である。会員に記事をコピーしてこの公墓を知らせ、自分たちの活動の励みにしたいといわれた。

埼玉県の齋藤實さんからもご来訪いただいた。齋藤さんは、敗戦直後ソ連軍に追撃され、満州の広野を逃げ惑い、流浪の末、行き着いた先が方正県伊漢通避難民収容所だった。この方正で、齋藤さんは母親と弟さんを亡くされた。父親はシベリアに抑留され死亡。齋藤さんは小学6年の時、孤児になった。

46年の春が訪れた時、何かに誘われるように収容所の西にある山の裾野に近い野原の方に一人で足を運んだ。その時、高く積み上げられた山があることに気付き、吸い寄せられるように近くに行けば、それは何重にも積み上げられた遺骸の山だった。体中の毛が逆立つような震えを覚えた、と語る齋藤さんである。お話を聞けば、それはその後3日3晩ガソリンをかけて焼かれた五千体余りの遺体であり、今それらは方正公墓に眠っている。

齋藤さんは、46年9月錦州市を経て葫蘆島から日本に引き揚げてきた。齋藤さんは、その体験をまとめられていて原稿も持参されたが、完成まであと2、3年はかかるという。ぜひとも早く読みたいものである。

その葫蘆島で、中国から日本への引揚げ船を待つ間に両親を亡くされた、さいたま市の石井敏夫さんからも電話をいただき、今後の交流を確認し合った。

神戸に住む90歳になる阿蘇睦子さんからは、丁寧な字で書かれた便箋3枚のお手紙をいただいた。阿蘇さんの実兄は破魔豊候(はまとよさぶろう)といい、かつて特務機関に務め中国にいたが、敗戦で捕らえられた。裸にされ、木に吊るされ、蟻のすきまもない包囲の中を、三人の中国人に助けられたという。それというのも、お兄さんは、軍からもらった多額の給料を中国の貧しい人や子供たちに与えて「破魔大人」と慕われていて、その恩恵に与った人たちに助けられたとのこと。妹である阿蘇睦子さんはそのことを聞いていたので「義理人情に厚い中国人故のこと、日本人の亡くなった人達のお墓を管理して下さっていること、ほんとに感激の念でいっぱいです」という内容だった。

二つの観音様がたどる歴史

名古屋にあるNPO法人『二つの観音様を考える会』からは、当会へ入会の申し込みがあった。この

会について全く知識がなかった大類が電話で尋ねたところ、会の代表である天竺桂尚穂（たぶのきたかお）さんから、次のような逸話をお聞きした。

かつて日中戦争の際、日本軍は宣撫工作のため、名古屋から大きな十一面観音像を南京に送った。そのお返しに南京から千手観音像が送られてきた。南京の十一面観音は文革で破壊されてしまった。しかし千手観音は名古屋市千種区にある平和公園の平和堂内に、隠されているかのようにひっそりと安置されていた。今、千手観音は年に 10 日ほどしか公開されていないという。天竺桂さんらは、傷みが目立つ千住観音を「南京にお返しをする。そして何年後かにまた名古屋に来てもらい、相互に行き交うようになればいい」との言葉である。そして、二つの観音像の歴史は、そのまま日本と中国がたどった近現代史の歩みそのものであり、二つの観音像がたどった歴史を学び、南京市民との交流を深めていきたいと語られた。資料も送付していただいたが、その手紙に天竺桂さんは、「日本人公墓のことを知って、ますます観音像の南京毘盧寺里帰りを実現したい思いが強くなりました」と記されていた。

「福田さん、旧満州に来ませんか」

10 月 26 日の朝日の『声』欄に、長尾光之さんという方が「私の視点」の記事に触れて書いていた。長尾さんは昨年、方正公墓を訪れたが、日本に帰国した残留孤児の 2 世たちが言葉の問題もあり、中国人女性と結婚する青年が多い現実を見て、中国人花嫁が日中友好の礎になってもらいたいという内容だった。

大類は、友人知人に事改めて「方正の会」のことを伝えていたわけではなく、朝日の記事で知ったという人も多い。その何人かからは「感激した。なんでもいいから会のお手伝いをしたい」というメールや、京都・綾部の大本教の旧友である出口三平さんのように、ブログで仲間たちに記事を配信し、もっと公墓の存在を知らせたいというメールをいただいたりした。また、大類の行きつけの床屋の主人が、「最近の中国にはあまり親しみをもてなかったが、記事を見て、いやあ中国を見直したよ」と言ってくれたのには嬉しかった。改めてマスメディアの影響の強さを思った。

また 11 月 5 日付、朝日新聞・古谷さんの記事「福田さん、旧満州に来ませんか」というハルビン・レポート（12 頁）は影響も大きいだろう。

栃木県の 70 過ぎのご婦人は敗戦直後、ハルピン郊外で 3 歳の弟さんを餓死で亡くされた。「私の視点」の記事を見て、「弟がこのお墓にいるように思えて」記事を切り抜いておいたが散逸してしまった。二度弟を捨てたように思っていたところ、古谷さんの記事を見つけた。すぐに朝日の本社宛、古谷さんに手紙を書いたところ、瀋陽から古谷さんの返事が来た。そこに我々の会が記してある。すぐに電話をかけて来られ、「何かをしたい。ぜひお仲間に入れていただきたい」という言葉である。

こうしたいろいろな出会いが生まれたことは、今後の活動のためにも大変良かったと思う。新たな展開が生まれそうな予感がするのである。（大類）

中国養父母公墓を参拝後、語り合う伊藤、南野、朝日の古谷さん（左から）

朝日新聞07年11月5日付朝刊

水/地 平線
すいへいせん/ちへいせん

福田さん、旧満州に来ませんか

ハルビン　古谷浩一

松の枝から漏れる晩秋の日差しが、石柱をまぶしく照らしている。

中国黒竜江省ハルビン市郊外の方正県。ここに中国当局が1963年につくった「日本人公墓」がある。終戦の混乱の中、日本への引き揚げがかなわず死んでいった旧満州の日本人を弔ったものだ。

日中国交正常化から35周年を迎えた9月29日。ハルビンで開かれた記念行事に参加するため訪中した元法相、南野知恵子さん(71)らの一行とともに、この公墓を訪れた。

終戦時、旧満州にいた日本人は155万人。ソ連軍の侵攻を受け、飢えなどで20万人以上が命を落としたとされる。多数の残留孤児の悲劇もここで生まれた。

黙って公墓に向かって手を合わせていた南野さんは「来られて本当によかった」とつぶやいて、涙ぐんだ。

参院議員の南野さんは今の黒竜江省チチハル生まれ。引き揚げの経験を持つ。幸い家族に亡くなった人はいなかったそうだが、「自分も一つ間違えれば、残留孤児になっていたかもしれない」との思いがずっとあったのだという。

地元政府関係者は「日本の与党の国会議員が来たのは初めてです。みなさん、悲惨な引き揚げの歴史を引きずっているようです」と話した。毎年300人から400人ほどの日本人がここを訪れ、静かに手を合わせていくのだと聞いた。

戦後62年。約2500人の残留孤児が帰国を果たしたが、この地にはまだ、「日本に帰りたくても、帰れない」といった事情を持つ日本人たちがいる。

ハルビン市に住む林鳳芝さんもそんな一人だ。中国当局の記録で68歳。日本政府は、中国人夫婦に娘として引き取られたのが終戦前後の混乱期より前だとし、「残留孤児」とは認めていない。

このため、中国政府は日本人だと確認しているが、訪日調査などの支援が受けられない。日本の親族は不明だし、月1万円弱の年金収入では自力の日本行きは難しい。

「ここでは貧しいけど、なんとか暮らしている。でも、私ももう長くはないでしょ。自分がいったい何者なのか知りたくてねえ。日本をこの目で見たい……」。林さんはそうしんみりと話した。

戦争という歴史に翻弄された日本人の様々な思いが今も、この地ではうずいているように感じる。

97年、当時の橋本首相は現職首相として戦後初めて、日本が明治以降の大陸政策の拠点とした瀋陽と大連を訪ねた。それ以来、日本の首相は旧満州に来ていない。

日中関係は4月の温家宝首相の訪日を経て改善が進む。中国政府は福田首相に年末の訪中を呼びかけており、年明けの実現を調整する動きもある。この訪中でハルビンも訪ね、日本人引き揚げの歴史に一つの区切りをつける姿勢を日中双方の国民に示せないものだろうか。

残念ながら、外交当局者は「中国東北地方にはすでに橋本さんが行っているから」と否定的な反応だ。37年に日本軍が多数の市民を虐殺した事件で知られ、日中の歴史問題で象徴的な場所である南京も含め、日中関係筋は「今、首相訪中でわざわざ歴史に踏み込む必要があるのか」と慎重な見方を示す。

ただ、旧満州には歴史とともに、それにつながる今がある。残留孤児の問題で、日本は国家としての責任を問われ続けている。日本政府が国際社会と約束し、これから本格的に取り組まねばならない遺棄化学兵器の処理問題もある。実現は難しいと承知しつつ、あえて言ってみたい。

「福田さん、旧満州に来てみませんか」

歴史を語る

「方正地区日本人公墓」の建立に携わった女性
松田ちゑさんに聞く

敗戦の混乱の中で旧満州の開拓団員らが集結した黒竜江省方正県。ここに国交正常化前の1963年、同省人民政府の手で「方正地区日本人公墓」が建立された。公墓の建設を県政府に嘆願したのが、元開拓団員の松田ちゑさん（88）。終戦記念日を前に、現在、東京に住むちゑさんに当時の話などを聞いた。

板橋区の公営団地の一室に松田ちゑさんは暮らしている。息子夫婦と同居、近くに住む孫とひ孫が毎日のように訪ねてくる。脳梗塞の後遺症で話すのはゆっくりだが、山形訛りの大きな声は健在。近所の区民センターで午前と午後、カラオケを歌うのが日課だ。

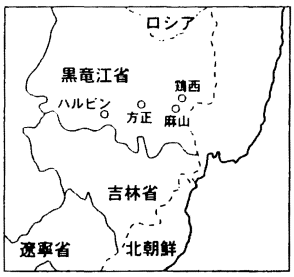
ちゑさんは1919年、山形県天童市生まれ。21歳の時、夫と舅、姑、長女の一家5人で方正県より北の三江省（現・黒竜江省）依蘭県の開拓団村へ。終戦後、駐留の日本軍を頼りに方正へ逃げるが、ソ連の参戦で日本軍は撤退。約半年間、方正近くの伊漢通の収容所に入る。夫は終戦前に招集、一人娘をここで亡くした。

帰りたくても帰れない

開拓団村には24、5の家族がいて、荒野を耕し、コーリャンやトウモロコシ、豆、粟などを作っていた。

「満州は本当に広くて自分の力で思う存分働けば、生活できないはずはないと思った。（終戦後）方正には中国中の日本人が集まってきたけど、兵隊さんは出て行った。兵隊さんに行かれちゃうと寂しいね。一家の親父が出て行ったのと同じ。自分は自分で何とかやっていかないと。収容所は食べものはないし、言葉にできないほど寒くて体力が弱ってみんないろいろな死に方しました。春になって引揚げの話が出たけど、帰りたくても帰れない。汽車が出るハルビンまでは方正から何十里（注・180キロ）もあった」

方正県政府は46年、県内の収容所で亡くなった約5000体の遺体を集めて焼却した。やがて48年と63年、方正県の山麓で野ざらしになったままの遺骨を目撃したちゑさんは、方正県公安局に埋葬を嘆願。周恩来首相の許可で黒竜江省が「方正地区日本人公墓」と刻んだ墓を建て、文革の最中も省政府の訓令で手厚い保護を受けた。



中国東北部と方正県／日本政府が1932年から45年まで東北部に展開した「満蒙開拓団」で中国に渡ったのは約27万人（約8万人が死亡）。送り出し県で最多の長野が3万1千人余、山形が1万3千人余

伊漢通開拓団跡

生きていて良かった…

ところが68年、ちゑさんはスパイ容疑で投獄されてしまう。71年に周首相の指示で釈放、死刑を免れた。

「残留婦人や孤児のため日本へ手紙を代筆したり、親を探してやって牢獄に入った。正しいことをしたと自分を慰めました」

その後の生活で楽しみにしていたのは、日本から公墓への訪中団。「日本から（訪中すると）手紙がくると、私が方正の日本人にお知らせするの。盆や正月には日本人が大勢集まって公墓の前で日本の歌をうたったり、踊ったり…」

望郷の念を募らせたちゑさんが祖国の土を踏むのは、ようやく91年になってからだ。

「日本に住んでたんだから祖国のほうがいい。親兄弟恋しくて日本に帰りたいの。生きていて良かった。また帰る身になれたから」

日本人公墓への思いを語るちゑさん（板橋区の自宅で）

日本人がやるべきこと

今はひ孫らに囲まれて平穏に暮らすちゑさんだが、おととし、再び日本人公墓を訪れ、ある思いを強くした。

「方正の政府で墓を掃除してくれてるし、申し分ないと思っているんです。でもそれは本当は日本人がやること。国のために満州まで行って亡くなった人たちなんだから。戦争のときは（日本人が）中国人をひどいめにあわせたのに、中国政府はそういうことを思わないで世話してくれる。日本の政府はおかしい。日本と中国にはこれからも仲良くしてもらいたい。（それには）中国政府に任せっ切りにしないで、なんとかしてほしい」

ちゑさんは憤りを込め、何度も「おかしいよ」と繰り返した。

維持に求められる協力

公墓には埼玉、長野、山形の各県・地区日中友好協会も慰霊に訪れている。埼玉県日中は94年、募金を募って公墓や周辺道路の修復を実施。翌年、同日中の寄付で記念陳列館が付設された。公墓前の「平和友好」の碑は95年、長野県日中が中心になって建設した。

2004年に靖国参拝が原因で中国側が慰霊を中止した時は、㈳日中友好協会の申し入れで、翌年、王毅中国大使から平山郁夫会長に再開が報告された。

しかし近年、「遺族の高齢化で訪中団の数も減少傾向にあるのでは」と、公墓の周知活動を続ける方正友好交流の会の大類善啓事務局長は危機感を募らせる。また、日本から方正へは、90年代後半に農業分野で政府のODAが実施されたが、公墓の維持に関しては方正県が管理し、民間の友好団体が訪中時に寄付しているだけというのが現状。「日中友好の原点」ともいえる公墓を日本も協力して維持してほしいというのが、元開拓団員や遺族の共通の願いだ。

◇

ちゑさんが思い焦がれた祖国では今、憲法改正への手続きが進んでいる。激動の歴史を生き抜いた人たちの声に耳を傾け、平和の重さを改めて考えたい。

※方正友好交流の会は8月22日～26日までの方正への旅の参加者を募集中（7月15日締切）。また会報「星火方正」第4号を5月に発行した。申込み、問合せは同事務局☎03－3295－0411へ

東京新聞　07年8月14日付　夕刊

中国が戦後建設 日本人開拓民墓地

友好の原点「記録に」

羽田監督、構想作りで旧満州へ

記録映画監督の羽田澄子さん(八一)=東京都世田谷区=が、新作の構想を練りに今月下旬、旧満州(中国東北部)を訪れる。足を運ぶ先は黒竜江省ハルビン市郊外の方正(ほうまさ)県にある「方正地区日本人公墓」。終戦直後の混乱期に亡くなった日本人開拓民の遺骨を納めた公墓で、中国人が戦後日本人への恨みを乗り越えて建設した。だが、一般には存在はほとんど知られておらず、旧満州で生まれ育った羽田さんも最近まで知らなかった。「一度現地を見て、作品化できるか確かめたい」。羽田さんは現地入りを心待ちにしている。

(千葉支局・宮尾幹成)

黒竜江省ハルビン市の「方正地区日本人公墓」(方正友好交流の会・南誠さん撮影)

羽田澄子さん

羽田さんは一九二六(大正十五)年、旧満州・大連生まれ。終戦も大連で迎え、四八年、日本に引き揚げた。五〇年に岩波映画製作所に入社。五七年に初の監督作品「村の婦人学級」を手がけ、八一年以降はフリーで記録映画の制作を続けている。「方正の日本人公墓の存在は昨年、偶然目にした市民グループ『方正友好交流の会』(事務局・東京都千代田区)の会報誌で知った。

六三年、中国は大飢饉(ききん)に見舞われた。食糧自給のため方正県の煉瓦(ほうたい)山のふもとが開墾された際、たくさんの遺骨が見つかった。かつて、亡くなった日本人開拓民らの遺体を積み上げて燃やした場所だった。日本の侵略の記憶が生々しい時代だったにもかかわらず公墓の建設が中央政府に諮られ、周恩来首相(当時)が「亡くなった開拓民は日本軍国主義の犠牲者」として建設を認めたという。

方正友好交流の会事務局長の大類(おおるい)善啓さん(六一)は「当時の中国には国際的な連帯の熱い気持ちがあったと思う。日中両国で悪い意味でのナショナリズムが高揚している今、旧満州の地で日本人のための公墓が造られていたことの意味は大きい」と話す。

羽田さんの方正訪問は、同会のメンバーらとともに二十二日から四泊五日の予定。カメラマンらスタッフ二人も同行する。羽田さんは「全くの白紙の状態ですが、撮れるものをメモのつもりで撮ってみるつもりです」と意気込む。

大類さんは「映像メディアの影響力は大きい。羽田さんのような大家にて未来に残していただけたら素晴らしい」と期待している。

方正地区日本人公墓　終戦直後の混乱で亡くなった旧満州の日本人開拓民ら約4500人のために建てられた公墓。日中国交正常化に先立つ1963年に仮墓標が建立。64年には墓碑が造られ、地元政府が維持管理している。「方正」は、同じ黒竜江省の「宝清」県と区別して「ホウマサ」と呼ぶのが慣例

映画監督 羽田澄子さんが方正へ

〝残留孤児の映画作りたい〟

昨年は最新作『終わりよければすべてよし』を発表するなど、50年以上にわたり精力的な活動を続けている記録映画監督の羽田澄子さん（81）が8月、中国で唯一の日本人公墓が建つ黒竜江省方正県を訪れた。中国残留孤児をテーマにした作品づくりのヒントをつかもうという思いに突き動かされての旅だった。

開拓団村跡を撮影する羽田さん（右）

羽田さんは旧満州大連の生まれ。開拓団員ではなかったが、中国残留孤児の問題はいつも心の片隅にあった。数年前から映画にしたいと思いはじめ、先の残留孤児訴訟では東京地裁に足を運んで周囲の状況をフィルムに納めた。「裁判が孤児側の政府支援策受入れという形で決着し、映画としては扱いにくくなった。思案していたとき、方正へのツアーがあるのを知って『とにかく行こう』と」

参加したのは方正友好交流の会実施の8月22日から26日までハルビンと方正を訪ねるツアー。方正には1日半の滞在だったが、公墓や開拓団村跡などを回り、「目に止まるものすべて」を記録した。

現地に立った羽田さんが感じたのは、方正が抱える歴史や現状の複雑さ。「お墓へ行くまでの道が舗装工事中で、敷地の入り口には立派な門があった。方正政府は公墓を観光の呼び物にしようとしているらしいけど、それでもかまわない。観光客が来るのは公墓の根底に平和があるから」

「中国側が日本人公墓を建てるには複雑な気持ちがあったはず。しかし（公墓の建設を指示した）周恩来の思想は日本の軍隊と人民の間に線を引いていた。敵国の日本にも友好の手を差し伸べる思想的な背景を作っていて、それが方正の担当者にも当然と通った。中国人が日本人のためにしてくれたことを感謝すべきだし、政治家はもっと評価すべき」

昔、中国で何があったのか

羽田さんは戦後、日本人の引揚げなどを組織していた大連日本人労働組合で婦人部の仕事を手伝った。大連にたどり着いた開拓民の惨状を目の当たりにし、それまで知らなかった満蒙開拓団の苦労に思いいたった。

「どんなことがあったのか、ということ。開拓村を作ったのは軍部だけど、そこにみんなのっかってしまい、結果がああなった。（軍隊が）中国に何をしたのか、つられて行ってしまった自分たちの国の人に何をしたのか。考えるべき人は死んでしまったけれど、跡をついだ人たちに考えてもらいたい」

旅を終えた羽田さんは映画製作について「方正が抱えている複雑さを整理してから」としながら、今回撮影したフィルムが映画に使われる可能性も十分にあると話す。

方正友好交流の会の大類善啓事務局長は「当時の中国政府が人種や民族を超えて心を繋げようとしたシンボルが方正地区日本人公墓。その深い意味をぜひ羽田さんに映像で表現してもらい、戦争を知らない若い日中の青年たちにみせてほしい」と大きな期待を寄せている。

羽田澄子（はねだすみこ）／1926年大連生まれ。48年に日本に引き揚げた。50年岩波映画製作所に入社、57年『村の婦人学校』で初監督。81年退社後はフリーで記録映画を制作。『歌舞伎役者　片岡仁左衛門』(92年)など多数。(写真は日本人公墓の前で)

【方正日本人公墓】

終戦直後の混乱で方正で亡くなった約4500人の満蒙開拓団員らが眠る。元残留婦人の松田ちゑさんが方正県へ嘆願し、周恩来の許可で1963年に建設された。

朝日新聞 07 年 10 月 10 日付朝刊

私の視点

siten@asahi.com

方正友好交流の会事務局長
大類　善啓

◆日中友好

日本人公墓を知ってますか

今年は日中両国が国交を正常化して35年になる。記念すべき年ということで、両国ではさまざまな交流行事が行われている。お互いに胸襟を開いて語り、知り合い、今まで抱いていた悪い固定したイメージが、氷解する話を聞くのはうれしい。

しかし先の戦争で亡くなった残留婦人や孤児などおよそ5千人といわれる死者たちを葬る日本人公墓が、旧満州の地、黒竜江省ハルビン市郊外の方正県に建立されていることを知る人はいまだ少ない。

もともと中国の土地であった旧満州に国策として入り込んだ開拓民は、ソ連の参戦、それに続く敗戦の知らせと同時に祖国を目指して逃げ惑い、難民、流浪の民と化した。人々は零下40度という酷寒にさらされ、飢えと栄養失調、発疹チフスなどによってこの方正の地で息絶えた。

それから数年、累々たる白骨の山を見たある残留婦人は、何とかして骨を拾って埋葬したいと願った。その願いは県政府から省政府を経て中央政府へ、最終的には当時の周恩来首相のもとまで届き、日本人公墓の建立が許可された。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、日中が国交を回復する10年ほど前のことである。「一部の日本軍国主義者と日本の人民を区別する」という新中国の方針に基づいた、階級的観点から公墓を建設してくれたのだろうと、冷ややかに言うことは易しい。

ハルビン市の朽ち果てた外人墓地の、所有者がわからない膨大な墓石の中から、一番大きく一番きれいなイタリア製の花崗岩を探し出し、優れた書家に「方正地区日本人公墓」という碑銘を刻んでもらった高さ3・3㍍の石碑は、2日がかりで、ハルビンから方正県まで運ばれた。まだ貧しかった中国だが、それでも大金を投じて日本人公墓を建立してくれたのだ。

中国に存在する唯一の日本人公墓である。66年から荒れ狂った文化大革命の時、紅衛兵たちがこの日本人公墓を破壊しようとした。しかし黒竜江省政府は、「これは日本軍の墓ではない。日本の庶民の墓である。彼らに罪はない」と紅衛兵の要求を退けた。

私たちの会は15年ほど前から、「残留婦人の帰国が即、幸せの道につながるわけではない。残留する人々が一番多い方正県に対して何かできないか」とささやかに活動してきた。その過程で知った日本人公墓は、中国通と呼ばれる人々にも知られていないことに驚いた。

日中両国で屈折したナショナリズムが台頭する昨今、民族の憎悪を乗り越えて建立された日本人公墓は、これからの日中関係のみならず、今後の世界のありようを考える時、極めて示唆に満ちた存在だ。長年にわたって墓守をおき、日本人公墓を維持管理している中国に、我々は何ができるのか。国交正常化35年の今、改めて問われているのではないだろうか。

投稿は、〒104・8011朝日新聞声・主張面「私の視点」かsiten@asahi.comへ。電子メディアにも収録します。

『参考消息』07年10月11日付

「私の視点」の記事が、中国で最もインテリ読者の多い『参考消息』に掲載された。見出しは「中国人の懐の深さを表す日本人公墓」となっている。

参考消息

CANKAO XIAOXI 新华通讯社主管主办

国内统一刊号：CN11－0048 参考消息报社出版

2007年10月11日
星期四
第17771期

日报文章

“日本人公墓”体现中国人胸怀

【日本《朝日新闻》10月10日文章】题：你知道日本人公墓吗(作者 方正友好交流会事务局长大类善启)

今年是日中邦交正常化35周年。在这样一个值得纪念的年份里，日中双方都举办了各种交流活动。大家开诚布公、相互了解，努力消除着迄今为止形成的不良印象，看到这些我感到十分开心。

但是恐怕很少有人知道，在黑龙江省哈尔滨市方正县有一座日本人公墓，那里埋葬着大约5000名在战争中死去的日本平民。

根据当时日本的国策，这些平民作为开拓者进入位于中国东北的满洲国。在苏联对日宣战和日本战败的消息传出后，这些盼望早日回到祖国的人在战火中四散奔逃，逐渐沦为难民。在零下40度的极度严寒中，许多人最后死在了方正。

数年后，当地农民开荒时发现堆积如山的累累白骨，一些遗留在中国的日本妇女迫切希望能够将这些遗骸重新掩埋。她们的请求经过县政府、省政府直接被转达到中央，并经过当时周恩来总理的批准建立起一座日本人公墓。这件事发生在中国人对日本侵略仍然怀有强烈仇恨的1963年，距离日中邦交正常化也还有近10年的时间。

我们可以冷冰冰地说，中国是基于“把一部分日本军国主义者同日本人民区别开来”的方针，从阶级的观点出发为日本人修建了公墓。事实上，中国方面是在哈尔滨凋敝的外国人墓地中众多无名墓碑的中间，选取了最大最漂亮的一块意大利花岗岩墓碑，邀请著名书法家撰写了“方正地区日本人公墓”几个大字。碑身通高3.3米，仅从哈尔滨市内运到方正就花了两天时间。对于当时还很贫穷的中国来说，建立日本人公墓无疑是一笔巨大的开销，从中可见中国人不计前嫌的人道主义胸怀。

这是中国唯一的一座日本人公墓。在1966年席卷中国的文化大革命爆发后，红卫兵曾试图将其捣毁。但黑龙江省委拒绝了红卫兵的要求，理由是“这里不是日本军人的墓地，而是平民的墓地，他们是没有罪的”。

从15年前开始，我们这个交流会开始举办一些小型活动。在这个过程中我们惊讶地发现，即便是那些被称为中国通的人也不知道还有个日本人公墓。

近年来，日中两国扭曲的民族主义情绪开始抬头。而跨越民族仇恨建立起来的日本人公墓，不仅对于日中关系，就是对整个世界的发展也极具启发价值。对于长年看守并管理着日本人公墓的中国，我们能做点什么呢？在邦交正常化35周年的今天，这个问题是不是应当被重新考虑呢？

·责任编辑 徐群·

10月20日、英字紙「ヘラルド・トリビューン／朝日」にも翻訳掲載

中国、戦争で置き去りにされた日本人たちの公墓を建立し保存

POINT OF VIEW / *Yoshihiro Ohrui*

China caring for remains of war-displaced

The Asahi Shimbun

On this 35th anniversary year marking the normalization of diplomatic ties between Japan and China, many commemorative events are taking place. This is good—people in both countries are speaking more frankly, getting to know each other better, and dispelling negative images that have accumulated over the years.

Few people, however, are aware of the public Japanese cemetery in Fangzheng, outside Harbin in Heilongjiang province.

The area was part of the state of Manchukuo that was set up by Imperial Japan in 1932.

The remains of about 5,000 Japanese who died at the close of World War II, left behind in China, are buried there. They were mainly women and orphans.

During its occupation of the former Chinese region, Japan sent settlers to live there. However, after the Soviet Union's entry into the war and Japan's subsequent defeat, many of these immigrants were unable to return to Japan.

The settlers tried in vain to flee to their native land. Many of them became refugees and were forced to live in exile.

Thousands of Japanese, many of whom were women and children, made their way on foot to Fangzheng from where they hoped to travel home to Japan. Winter was setting in and they soon realized their way was cut off. Many died of starvation and typhus during the harsh winter, when temperatures dropped to 40 degrees below zero. They were left in a mass piled in a farmer's field.

Years later, a Japanese woman who had survived in Fangzheng was moved by the fact that the mass grave had been unearthed.

She petitioned the county government for permission to collect the remains and give them a proper burial. Her request was passed on to the provincial government, which in turn conveyed it to the central government.

Finally, that request reached the Premier Zhou Enlai, who in 1963 gave permission to build a public Japanese cemetery. This was about 10 years before Japan and China normalized diplomatic relations. Many Chinese still harbored much animosity toward Japan because of the war.

Today, it is easy to say that Zhou's decision was likely based on a new policy to treat Japanese civilians differently from the wartime military leaders.

Yoshihiro Ohrui

Although China was still poor in the early 1960s, it spent a huge amount of money to build the Japanese cemetery at Fangzheng.

A beautiful Italian granite gravestone was carved by a prominent calligrapher with the words "Fangzheng district public Japanese cemetery" and placed in the new graveyard. The 3.3-meter block of stone had long stood in a dilapidated foreign cemetery in Harbin that was filled with abandoned graves.

It took more than two days to transport the stone marker to Fangzheng.

Today, this cemetery is the only public cemetery for Japanese in China. It survived the chaos of the 1966 Cultural Revolution, even though Red Guards wanted to destroy it. The Heilongjiang government rejected their demands, saying, "This is not a cemetery for Japanese soldiers. This cemetery is for innocent Japanese citizens."

For 15 years, I have worked with a group called Houmasa Yuko Koryu no Kai (Japan-Fangzheng friendship group), doing what little we can to support war-displaced Japanese women left behind in China.

We understand their return to Japan does not immediately lead to their happiness. Still, we hope to do all we can for Fangzheng county, which still today has the largest number of war-displaced Japanese.

During our efforts, we learned about the public Japanese cemetery. We were surprised to find it largely unknown even among people who are well-versed in Chinese affairs.

This cemetery was built in a spirit that transcended grudges between Japanese and Chinese people. In these days when distorted nationalism is growing in both countries, the cemetery offers much to think about for future—not only for Japan-China relations but also how the world ought to be. What can we do for China, which has taken care of the graves of thousands of Japanese for so long?

We need to consider this idea on the 35th anniversary of normalization of diplomatic ties.

The author is general secretary of Houmasa Yuko Koryu no Kai.

「方正日本人公墓」が語るもの

凌 星光

周恩来の英断

大類善啓氏から方正日本人公墓のことを聞き、大きく心を動かされた。その物語は次のようなものである。

中国黒竜江省方正県にはいくつかの満州開拓団があったが、ソ連軍進入後、奥地の開拓団員が方正収容所に集まってきたため、人数が急速に膨張していった。零下40度の厳寒下で、1945年末から46年にかけて、方正に集結した多くの開拓民が飢えと凍えで亡くなった。1946年に方正県人民政府が誕生し、散らばっていた遺体4500体を一箇所に集めてガソリンをかけ、三日三晩焼いた。そしてその遺骨は野ざらしにされ、白骨の山となっていた。

1963年の春、1945年当時の厳寒を体験したことのある開拓団の一員松田ちゑさんが、このまま放置するわけにはいかないという心情にかられ、同じく開拓民であった佐藤栄さんと相談して、遺骨を埋葬する許可を方正県人民政府に申請した。栄さんの夫鄭さんもこれに尽力し、県人民政府、省外務弁公室、外交部（外交部長は陳毅）、周恩来総理の手を経て、1964年10月、「方正地区日本人公墓」が建てられた。

日中国交正常化後、多くの日本人がこの事実を知ることとなり、墓参団も組織されるようになった。とりわけ、故石井貫一会長及び牧野史敬氏をはじめ多くの方によって「方正地区支援交流の会」が組織され、この公墓を日中友好の礎として日本での広報に努めてきた。ここ数年、大類善啓氏が事務局長となってからは、「方正友好交流の会」として再出発し、会報「星火方正――燎原の火は方正から」が出されている。

会報4号で知ったことだが、松田ちゑさんは文化大革命中にスパイとして拘留され、もう少しで死刑になるところであった。ただ、外国人であったため、死刑罪状が周恩来のところまで上げられ、即時釈放になったとのことである。これは松田ちえさんの息子さんが30年後に方正を訪問した際、リタイアした元公安局の幹部が打ち明けてくれたことで、ご本人はそれまで知らなかったとのことである。文革を経てスパイ嫌疑をかけられた筆者にとって、その辺りの状況は十二分に理解できる。正に日中両国間に発生したドラマティックな出来事である。

ドイツに学ぶべき敗戦の教訓

好転し出した日中関係を更によい方向に推進するために、「方正日本人公墓」存在の意義を再認識し、それをＰＲすることは極めて重要なことであると考える。思ったことをいくつか述べてみたい。

先ず、過去の侵略戦争への正しい認識が求められる。中国当局は日本の過去の侵略戦争について、中国人民ばかりでなく、日本人民もまた被害者であるとしている。方正公墓は正に日本人民も被害者であったことを立証している。中国への侵略戦争は不正義の戦争で

あり、日本は二度とこのような戦争を起こしてはならない。また中国は日本人がこの戦争を人類史的視点に立って総括するよう協力していく必要がある。

1648年に締結されたウエストファリア条約によって、国家主権を絶対視する近代国際政治が始まった。即ちヨーロッパで作られたいわゆる国際条約によって、アジア、アフリカ、ラテンアメリカは植民地化した。そして第一次世界大戦と第二次世界大戦が起こった。現在、世界はまだ白人が作った世界秩序が基本であり、かつて植民地であった発展途上国には不利な仕組みとなっている。21世紀には中国やインドの勃興によって、奴隷貿易など人種差別も含まれた近代国際政治の見直しが行われよう。四年前に南ア連邦で開かれた人種差別解消会議は、奴隷貿易の清算が含まれており、画期的なことであったが、結局、米欧の反対に遭って成功しなかった。まだ機が熟していなかったのである。今の段階は第二次世界大戦のフアシズムと軍国主義を清算し、今世紀後半には近代国際政治そのものが、人類史的視点で総括されよう。日本は「国家間の戦争では正義も不正義もない」などとは言わないで、人類史的視点で自らの過ちを早期に総括し、今世紀後半で展開される近代国際政治の総括に積極的発言ができるよう努力すべきだと考える。

この点で、日本はドイツに学ぶべきである。事情は必ずしも同じではないが、侵略戦争を起こし、人類史的罪を犯した点では共通点がある。ドイツ政府と国民は深く反省し、周辺諸国及び国際社会の信頼を得ることとなった。今やドイツはヨーロッパのリーダー格となっているが、それに異を唱える声は聞かれない。それに対し、日本政府は60数年経った今でも、証拠がないとか国際法に違反していないと言って逃げようとする。日本はドイツと違って、政府も軍隊も崩壊せず、降伏決定から米軍が資料接収までの約三ヶ月、証拠隠滅を組織的に行い、国家的犯罪に関わる殆どの資料を焼却した。証拠がないと逃げている限り、国際社会から信頼を得ることはできない。

日本政府と国民は方正県での悲劇を心に刻み、軍国主義の起こした侵略戦争とは一線を画し、肩にのしかかっている重荷を下ろして国際社会で大いに活躍すべきである。「主張する外交」を展開しようとしても、歴史認識問題でけりをつけていないために、慰安婦問題発言が飛び出し国際的批判を浴びた。これはよき教訓である。

方正公墓は東洋文明の再起の源だ

次に日中双方の人間性重視と東洋文明への共通認識を強調したい。方正公墓は松田ちえさんの発案で、佐藤栄さんとその夫鄭さんの協力によって建てられた。つまり庶民からの提案、下からの提案によるものであった。松田さんは本当に偉大なことをして下さったと思う。同時に、1953年、私が興安丸に乗って帰国した際、日本の人たちによってなされた強制連行中国人労働者犠牲者の遺骨送還活動を思い起こす。東洋には儒教の和の精神や仏教の慈悲の精神がある。これを共通の価値観として相互の交流を深めていくべきである。

中国では日本は野蛮な民族であると見る人がかなりいる。中国を侵略した際の野蛮さが祟っているのである。日本人は決して野蛮ではなく、ただ、近代国際政治において列強への仲間入りを目指し、軍国主義が支配的地位を占めたために起こったものである。中国の一部にあるこのような偏見は改めなくてはならないが、日本としてもこのような偏見が是正されるような努力をする必要がある。近代において、日本が列強に仲間入りできたこと、

近代化を実現できたことには誇るべきところがたくさんあるが、他方、そのプロセスでのマイナス面を総括することによってはじめて、21 世紀の世界においての先導的役割を果たせる。「脱亜入欧」からもう一度日本自身およびアジアを見直すことが肝要であると考える。

現在日本で価値観外交を推進する動きがある。それは本来、アジア共通の価値観を踏まえて人類共通の価値観に進むべきだと思うが、米国に迎合して、自由、民主、市場など近代ヨーロッパ価値観を強調する。欧米価値観即先進的という既成概念は崩れ、他の文明への再評価がなされつつある今日において、このような命題提起は全く時代にそぐわないものである。世界はさまざまの文明と文化から成り立っている。文明文化の相互尊重と共存によって人類は平和的発展を遂げることができる。方正公墓をめぐる国民レベルの心の交流は、東洋文明再起の源となるものである。

根底にある国際主義

第三にインターナショナリズム、グローバリズムを提唱すべきである。方正公墓の根底には、人民の視点に立ったインターナショナリズムがある。それは現在しきりに言われているグローバリズムと共通する。ただ、前者は国家の存在を前提としているのに対し、後者は超国家的視点から国家間、民族間の問題を見るところに違いがある。今世紀前半は国家の存在は大きいが、後半になると国家の壁はますます低くなっていこう。近代国際政治によって、国家が絶対的地位を占めるようになり、人権は国家権力に従属するものとなった。今世紀はグローバリズムを旗印に、国家主義から人本主義に返る世紀である。

日本は戦後、過去の国家主義の反省から国際主義の道を歩んで来た。そのため、過去の悪いイメージは一掃され、中国や韓国を除いては、平和的文明国家として高く評価されるようになった。ところが、日本経済の相対的地位低下と中国の台頭によって、日本国民の心理的屈折感が強まり、狭隘なナショナリズムが謳歌されやすい土壌がつくられた。それは過去の歴史問題での日本中心的発想法に典型的に見られる。他方、中国においても、偏った愛国主義教育の下で狭隘なナショナリズムに傾斜していく現象が起きてきた。今、日中両国の政府及び有識者には、如何にして自国のナショナリズムを抑制し、より国際主義の視点に立つようにするかが問われている。幸い、昨年 10 月の安倍首相訪中によって、両国関係は改善されつつあるが、引き続き努力することが求められている。

日本は戦後、政府の役割と市場の原理とをたくみに結びつけ、世界に誇るべきよきモデルを作り上げた。アジアＮＩＥＳ、アセアン、中国などもその経験に学び、目覚しい発展を遂げた。後にそれは東アジアモデルと称された。但し、ここ 10 年、米国の新自由主義の影響を受けて、市場万能論がはびこり、日中双方とも格差が拡大し反省期にある。今こそ日中両国は協力して東アジアモデルを再構築（一国範囲内の政府主導型市場経済を東アジア範囲での国際協調主導型市場経済に作り変える）して、日中協力によるエイシアンスタンダードを確立すべきである。そして今世紀後半には、その成功を踏まえてグローバルスタンダードに持っていくべきだ。ここに至って、世界の政治は近代国際政治から脱皮して、全く異なった様相を呈することとなる。

さらに広報活動を！

最後に、「方正友好交流の会」を発展させる上での幾つかの提案をしてみたい。

1　**日中双方でのＰＲを強化する。**ここ数年、新役員の努力によって、日本での広報活動が強化された。これを中国でもやるということである。この 4 月上旬、私と大類氏が中国を訪問した際、彼が日中科学技術文化センター、日中関係研究所、方正友好交流の会の三つの事務局長をしていると紹介した。そして、殆どの人が方正公墓のことを知らなかったので少し説明したところ、どこでも大反響があり、方正友好交流の会の事務局長が最も意義あることだとお褒めの言葉を頂いた。そこで中国で大いにＰＲする価値があるなと感じた次第である。

2　**中国の大学の日本語科に資料を送る。**方正公墓についてテキストになれるような名文を 2000 字くらいで書いて、中国の大学に送り多くの学生に知ってもらうのである。そうすると、各大学の日本語科には必ず数人の日本人の先生がいるから、それは必ずまた日本に返ってくる。つまり日本と中国の両方でＰＲすることによって、相乗効果が生まれるようになる。

3　**日中両国が共に歴史教育をする場にする。**ある中国人が「方正公墓はもう一つの靖国神社だ」と言ったが、より次元の高い日中両国の歴史教育の場、国際主義教育の場とすべきだと思う。中国はあちこちに愛国主義教育の拠点を作った。それに対し、私は愛国主義ばかりでなく、国際主義を教育する場でもなくてはならないと提案してきた。残念ながら、それはまだ実っていない。しかし、中国当局も変わりつつあり、そのうちに私の意見を取り入れてくれるものと思う。方正公墓は日中両国政府と国民が共に力を入れて整備し、国際主義教育をする格好の場となるはずである。

4　**英文資料を作成し国際的広報活動を展開する。**歴史認識問題では、海外華僑が大きな影響力を持つ。戦時中に、米国、欧州、東南アジアで大きな抗日支援組織が生まれ、その伝統的影響が今でも残っている。それが現地の有識者にも影響し、日本のイメージを悪くしている面がある。方正公墓をめぐる日中友好交流の草の根運動が紹介されれば、日本の国際的イメージアップに繋がる。一部の右より論者が日本の侵略戦争を美化しつつ日本の国際的影響力を維持しようとしているが、それは失敗する運命にある。日本の真の国益のために、もう一つの流れを作るべきである。

5　**未来志向の友好活動を展開する。**会員メンバーを見ても分かるとおり、多くの人が年配の方で、過去にこだわりやすい。これでは若い人を引き付けることができない。遺骨の山の写真などは一度見ればよい。会員の中には中国の花嫁を紹介し、幸せな家庭を作るお手伝いをしている人もいると聞く。多くの美談があるはずであり、絶えず明るい話題を提供し、未来志向の場を提供することが大切だと思う。第二代、第三代、第四代の会員を増やし、新しい草の根運動にもっていくよう提案したい。

（日中関係研究所所長、福井県立大学名誉教授
社団法人 日中科学技術文化センター 理事長）

中国人の寛大さと慈愛心

金丸 千尋

中国で唯一の日本人を祀る「方正地区日本人公墓」が１９６４年、中国によって建立された。この「公墓」は、『侵略戦争に責任がある一握りの軍国主義者と日本の国民大衆とは別であり、日本国民は戦争の犠牲者である』という中国政府の理念と政策が根底にあったことはいうまでもない。

私は戦後１３年間、中国の人たちと共に働き生活した体験から、日本と異なる社会体制や制度、とりわけ日本の侵略によって被害を受けた悲惨な体験を味わった中国民衆の反感・・・という状況の下で日本人の「公墓」を建てることがいかに至難であったかが良く判るのである。この難問に現地の方正県、黒龍江省の関係者は人道主義の立場で問題解決のため奔走し、中国人の感情、日本人の心情、これがもたらす影響などいろいろなことを考慮して中央政府に申請し、最終的には周恩来総理みずからの決裁によって中国の手で「公墓」をつくってくれたのである。

時は流れて１９８４年１０月、敗戦時の旧満州の悲劇のひとつで婦人、子供を含む５００余名が自決した「麻山事件」の犠牲者のために「麻山地区日本人公墓」が方正県に建てられた。これも冒頭の中国側の理念によって実現したものである。私は遺族の依頼をうけて、野ざらしになっていた麻山の犠牲者の遺骨収集と鎮魂の協力を黒龍江省政府外事弁公室の孫志堅副主任はじめ関係者にお願いした。また、日本人の死生観や風習などについて胸襟を開いて話し合った。省政府の諸先生は寛大な心で「麻山で亡くなった人たちは戦争の犠牲者である」といって遺族の悲願をききいれ、遺骨収集のために特別の便宜をはかってくれ、そのうえ省政府の資金で立派な墓をつくってくれた。私は今でも「方正の公墓」の話が出ると往時のことが鮮明によみがえり感謝の念で胸が熱くなるのである。

暑い夏がやってくると旧満州での敗戦の日々を思い出す。１９４５年８月９日のソ連参戦時、私は１７歳で、満鉄チチハル検車区に勤務していたが、「可能な限り多くの列車を準備せよ」と関東軍から命令がきて先輩たちと共に徹夜で車両を整備した。そのころ駅前広場はハイラル方面から避難してきた人たちで溢れ、南下する列車待ちをしていた。ところが私たちが編成した列車に真っ先に乗り込んできたのは銃を構えた兵隊に守られた関東軍高級軍官の家族たちで、大きな荷物を積み込んで慌ただしく南下していった。次の列車も、また次も関東軍の家族が乗車し、命からがら興安嶺を越えて避難して駅前広場にいた人たちは置き去りにされたのである。このような光景は長春、ハルピン、牡丹江でも同様だったとのことである。

一方、国策で僻地の開拓に従事していた人たちは、ソ連軍侵攻の情報が届かず、事態の重大さを知った時には、守ってくれると信じていた関東軍の姿はなく、避難列車も途絶えてしまい徒歩で広野をさまよい続けたのである。ようやく辿りついた難民収容所は劣悪な環境で、飢え、寒さ、疫病のために大勢の人たちが尊い生命を落とした。その数は２０数万人といわれている。この世の地獄さながらの逃避行と収容所生活の中で多くの「残留孤児」が生まれたのである。私はその現場にいた者として絶対に許せないのは、「邦人を守る」と豪語していた関東軍上層部が、いち早く彼らの家族を避難させ国民を置き去りにした卑劣な行為である。あれから６０数年たったが、今でも怒りは収まらず〝軍隊はあてにできない〟という強い不信を持ち続けている。

いま日本各地で中国「残留孤児」の国家賠償訴訟がすすんでいる。２００７年１月、東京地裁は・・・国には「残留孤児」の早期帰国を実現する義務はなく、「孤児」は帰国後、日本社会に適応し自立している・・・・・・旨の判決を下した。裁判官の「残留孤児」問題についての無知、無責任さにはあきれると共に、「孤児」たちの苦しみ、痛みを慮んばからない冷酷さに憤りを覚える。中国の人たちが戦争の犠牲者に同情し、日本人の子供の生命を救い、「日本人公墓」をつくってくれたこととの落差に驚くばかりで、これが〝美しい国〟なのかと考えさせられた。

「残留孤児」が生まれた根本原因は日本の中国侵略政策であることは明白である。見捨てられた可愛そうな日本の子供に愛の手を差しのべて我が子同様に養育してくれたのは、日本の支配下で苦しんだ中国人―とくに貧しかった農民で、彼らの「一視同仁」（差別せず一様に仁愛を施す）の寛大さと慈愛心であった。中国人の他人の痛みを知りいたわる心は、敗戦時の関東軍上層部の醜悪の対極にあるもので学歴や知識水準とはまったく無関係の徳性といえよう。これは五千年の悠久の歴史があり、偉大な中国文明を創造し、〝人生いかに生きるべきか〟を説いた老荘思想や儒教の伝統をもつ中華民族、また、陸地続きの多民族との共生、長い戦乱などの環境のもとで人間同士が助け合い、忍耐づよく強靭に生き続けた中で培われたものに違いない。

気骨と先見性をもった政治家―宇都宮徳馬先生は、生前「平和な国民生活の基本、平和共存は国家の基本理念、日中友好は日本の最大の安全保障」と私たちに教えてくれた。日本は現在及び将来にわたって中国との友好の絆を強め、お互いに平和、繁栄、幸福の道を歩まなければならない。そのためには隣人である中国人はどのような心の持ち主かを知る必要がある。私のつたない体験の一端が参考になれば幸いである。

（本会・顧問）

遠く万里離るとも

いよいよ深し中日の情

石 金楷

２００７年6月１１日から１３日まで、日本の友好人士、山村文子さんと相坂百合子さんが訪中、黒龍江省と吉林省で日本の残留孤児と養父母を訪ね、行く先々で熱い歓迎を受けました。同時にお二人は日本人民を代表して養父母と孤児をやさしく見舞いました。

黒竜江省でお二人はハルピン市養父母連絡会の熱烈な歓迎を受け、連絡会の秘書長たちは、わざわざお二人を訪ね関係資料をプレゼントしました。連絡会がセッテングした座談会で８５歳の山村文子さんと８４歳の相坂百合子さんは、千葉市日中友好協会理事・秋葉二郎先生の連絡会と養父母に対するご挨拶を伝えました。そして養母の張菊桂さんと詳しい話をする中で、張さんの健康状態や暮らしぶりなどを詳細に尋ねていました。お二人は養父母たちが戦後の、きわめて生活が困難な時期に敵国の子供たちを育ててくれたことに対し、深く感謝の意を評すると同時に、中国人民の国を越えた心の広さに対して心から敬服していると語りました。同時に同席した残留孤児に対しては彼女たちの生い立ちに同情すると同時に日本国内の状況を詳しく話して聞かせ、体を大事にして暮らし、日中友好のために努力してくれるよう励ましました。そして彼らが早く日本の身内を探し出せるよう祈っていると言いました。

座談会に参加した人たちもお二人の日本の友人が遠路、中国を訪ねてこられ、カンパを寄せていただいたことに感謝すると同時にお二人が健康で長生きされるようお祈りしました。そして座談会が終わったとき、みんなは別れがたい気持ちで記念写真を撮りました。

６月１２日、２人が吉林省長春市の日中友好楼に養父母を訪ねた時は連絡会の石金楷、陳英傑も一緒に伺いました。事前に電話しておいたので、ここに住む健康な３人の養父母、項貴臣、張雲労、崔志栄がはやばやと建物の前に出て待っていました。みんなは２階に住む張雲芳の部屋へ行きました。山村文子さんはもうここへ１０何回も来ているので、古い友人と一目あっただけでお互いに懐かしそうでした。話してわかったことですが山村さんは昔、長いこと中国で暮らしたことがあり、今回で訪中も３０何回目かだそうです。友好楼が１９９０年に建設されてから彼女は毎年日本の友人を連れてきてお金やものを贈って来ました。そして彼女自身もここに住む養父母に１０万円も寄付しているのです。この話を聞いて私たちは深く感動し、思わずカメラのシャッターを押していました。白髪ながら気力に満ちたご老人を見ながら私たちの胸に深い敬意が沸き起こりました。彼女の行為の意味するものは、すでに金銭の範疇を遠く越え、それは日本人民の中国の養父母に対する感動であり、その意味するものは中日友好が世々代々続くことへの願いです…

会見が終り、人生の苦労を嘗め尽くした３人の老人と同様の人生を生きてきた８０歳あまりの日本の友人を眺めながら、彼女たちの皺だらけだが慈愛に満ちた手を握り締めながら、私の胸には、思わず日本の残留孤児・井上征夫さんの詩が甦ってきたのでした。

母親たちの間に立ち
私は熱い想いでその両手を引き寄せる
しっかりと握った両手を空に向かって突き上げる
明日への誠を誓う
２度と繰り返すまい：
　　硝煙、血の海、刀の光
２度と繰り返すまい：
　　離散、涙の跡、泣き叫ぶ声
一衣帯水の隣国が仲良く
手を携えて進む平和の足どり
ともに歌う峨嵋と富士
艶を競う桜と牡丹
幸せ願う東瀛（日本）、華夏（中国）
永久の安定、中国、日本

（ハルピン市養父母連絡会秘書長）

9月30日、ホテルに大類を訪ねてくれた石金楷さん（左）

長野県開拓自興会結成６０周年記念訪中記

永原 今朝男

今回の訪中は、旅行期日を急遽４カ月ほど早めた事情もあり、僅か２８名の参加者（前回は、９８名、前々回は１３０名）であったが、募集窓口側としては、訪中コースの設定、旅行社との折衝、人員掌握、事務連絡等の作業も順調に進み、チームワークも取りやすく、私自身も緊張感から解放され、楽しい有意義な旅であった。

６月２７日、１２時１５分新潟空港を飛び立ち、１３時４０分ハルビン空港に到着、発着ロビーで大歓迎を受け迎えのバスに乗り、ハルビン市の黒龍江省人民政府外事弁公室・人民対外友好協会日本処処長ほかの政府関係者、日本留華孤児養父母聯誼会関係者の皆さんが迎える表敬訪問会場へ案内された。名刺交換の後通訳を通じ、進行は中国側に任せてほしいと言うことで、最初に日本処処長から歓迎のあいさつを受けた。続いて訪中団を代表してあいさつをしたが、中国側の歓迎のあいさつの要旨に応えるべく、前もって用意したあいさつ文を若干修正し、一残留婦人の願いを聞き入れ、中国側の負担によって公墓が実現したこと、敵国であった残留孤児の養育をした養父母の人類愛、平和友好之碑建立に対する理解と協力、中日友好園林の充実整備に取り組む好意に深く感謝したい旨述べた。そして、最後に侵略戦争の結果、中国の皆さんに甚大な被害を与えたことを詫び、過去の歴史を反省し、同じアジアの仲間として平和の尊さを訴え、中日友好の輪を大きく拡げ、中日友好園林を拠点として、東北地区との友好交流を深めたいと結んだ。

これに対し、「甚大な被害を被ったのは、中国人民ばかりでなく、日本開拓民の皆さんも同じ被害者だ、我々は差別しないので詫びる必要はない。悪いのは日本の軍閥だ。」と通訳を介して聞いたが、中国人の心の広さに改めて感服した。

記念品交換を済ませ、ハルビンから方正へ移動中、凄い大雨に遭ったが、無事にホテルへ到着した。県政府関係者も出席して、盛大な交歓会を開催し、終了後翌日の全体行事の実施方法について、中国側と打ち合わせ、了解を得た。

翌２８日の午前、方正県政府を表敬訪問したが、立派な県庁が建設されたのにはびっくりした。ハルビンと同じく中国側の進行で始まり、記念品の交換、記念写真の撮影など済ませ、平和友好之碑、日本人公墓前での全体行事を挙行。その後本団主催の答礼宴を開催し、午後から４コースに分散し、開拓団や収容所跡、近隣農村や知人、政府関係機関等を訪問し友好を深めた。前回訪中の時は新潟空港で突然、一切の全体行事は禁止と伝達され、小泉首相の靖国神社の参拝、歴史教科書問題などが原因とは言え、参拝禁止は余りにも冷たい扱いではないかないかと、通訳を介して抗議したが、中央政府の指令だからの一点張りで、非常に残念な思いをした。今回もその点に若干の不安を抱いていたが、表敬訪問・晩餐会・全体行事・写真撮影などすべての面で親切な対応を受け、その上、中国残留孤児関係及び方正公墓関係の写真付諸資料全体行事の写真等々沢山お贈りいただき、生涯忘れられない感謝感激の旅であった。

全体行事終了後の私達４名の訪問コースは都市コースで、四平市北方の松本郷開拓団跡、西安炭鉱（対店義勇隊員が拘束使役された炭鉱）、瀋陽の富士青年学校跡の収容所（私の過ごした所）渾河墓地の訪問慰霊が目的であった。方正を車で発ち、ハルビンから夜行列車に乗り、長春のホテルへ着いたのは１０時過ぎであった。気の合う４名（内女性１名）は中国酒を交わしながら地図を広げ、開拓団跡や炭鉱の場所を調べたが、当時と地名も変り突き止めることは難しかった。

２９日の早朝、長春の旅行社から派遣された専用車に乗って、松本郷開拓団を目指すべく出発したが、添乗員（大学生のアルバイト）も運転手も道路事情に暗い人で、行く先々で道に迷った

が、幸いにも松本郷開拓団跡を知っているという、農家の老婆に出会い、懐かしの地を散策することが出来た。

西安炭鉱は現在も採鉱されているので、あまり迷わず尋ねることが出来た。当時の建物も僅かに残り、あちこちにあるボタ山をよじ登り、石炭を拾い集める老人の姿も見えた。炭鉱で亡くなった兄の最後の場所を知りたいという一念で、前回に続いて訪問中したＹさん（女性）も、永年の願いが叶い、これで私の務めは終わりましたと慟哭し、草木の根元に供物を添え、香煙に咽びながら、亡兄の冥福と鎮魂を祈る姿は、周囲の人の涙を誘った。予定時間を超過し瀋陽へ向かったが、道に迷い夜になり、スピード違反で拘束される等して、途中から道案内のタクシーを頼み、瀋陽のホテルへ到着したのは、夜の９時過ぎであった。このため瀋陽の収容所跡（現在中学校）渾河墓地の慰霊を翌日に変更し、またハルビンへの列車の乗車時間も変更してもらい、念願の慰霊と収容所を訪問することが出来た。

今中国はオリンピック一色で、ハルビンも長春も瀋陽も高層ビルと高速道路建設の仕上げブームで、２０階３０階建のビルが林立し、高速道路の建設と並行して地方の道路の拡幅整備が盛んに進められている。そして都市部に住む若者は車を持ち、服装も派手になり十年前と様変わりしている。しかし、今回訪問した四平市以北の農村の人家の造りは貧弱で、服装もみすぼらしく、質素な暮らしをしているように感じた。農作物も水田地帯を除き唐もろこし一辺倒で、山の際まで茂っていた。他コースの人に聞いても、やはり圧倒的に唐もろこしが多かったと聴いたが、中国政府の農業政策の転換に驚いた。日本と同じように農村と都市部の格差が拡大しているため、農民の救済対策として、バイオ燃料生産の施策に切り替えたのではないかと、自分流に判断して農村地帯を眺めてきた。

以上纏まりのない訪中記であるが、方正県の日本人公墓は、かつての敵国という憎しみを超越して、中国側の負担によって建立された唯一の公墓である。慰霊のことばで「満州開拓団殉難者全員の皆さんの御霊が安住の地を求め、中日友好園林内のこの公墓に舞い戻り、祖国の安泰と日中友好の絆の深まることを祈っておられるでしょう。」と万感の思いを込めて、慰霊のことばを述べる機会に恵まれたことは、生涯忘れることの出来ない思い出である。

最後に異国に散り果てた、殉難者のご冥福と鎮魂をお祈りして、訪中報告に代えたい。（会員）

方正公墓がある中日友好園林にて

・・・・・草の根の友好運動・・・・・

伊藤 州一

開拓団の叔母さん

「あの叔母さんは本当に可哀いそうな人だから、皆で話をしたらいかんよ。満洲から帰ってくる時に背負っていた赤ん坊が死んだもんで道端にうっちゃってきた、可哀いそうな叔母さんだからね」

母は私にそう言い聞かせました。静岡県と長野県の県境の山に囲まれた横山小学校３年生。戦争が終って２年過ぎた年でした。住む家がなかったのでしょう。幼子を２人つれて学校の用務員室に住み込みました。開拓団として中国に渡り、命からがら帰国した叔母さんでした。これが私が始めて中国を意識した時でした。

(その叔母さんは私が卒業するまで用務員室に住んでいましたが一度も笑顔を見せたことがありませんでした)

秘書時代

塩谷一夫代議士の秘書時代に本格的に中国と友好運動を始めました。当時は国交回復前で自民党は佐藤栄作総裁でしたから議員のほとんどは台湾派でした。日中友好促進議員連盟の会長は藤山愛一郎先生。中国と友好を願って行動する自民党の議員は１０人程度でした。

(まだその頃は「促進」の文字がついていました)

私は秘書の仕事の傍ら議員連盟のお手伝いもしていました。

藤山議員連盟会長らが中国を訪問し北京で発表した共同声明が自民党の党規委員会にかかり、会長の藤山先生が無期限の役職停止という処分を受けたことがありました。

また、川崎秀二先生や古井喜實先生らの北京での記者会見が問題になり、自民党の外交調査会に呼びつけられたこともありました。

(その時、私には呼びつけられたとしか感じられませんでした)

賀屋興宣調査会長は「貴方がたは北京で何をしゃべってきたのだ。あれが外交というなら土下座外交そのものだ」と机を叩いて凄んだのも目の前で見ていました。

私が最も尊敬する松村謙三先生の葬儀をお手伝いした時のことです。中国政府を代表して王国権先生が参列され、本願寺の本堂で沢山のカメラマンの前で佐藤総理大臣と儀礼的ですが握手をしたことがありました。

私はその光景を「ああ！歴史が変わっていく・・」そう思いながら見ていました。というのはその年は国連総会でアルバニア案が可決されて中国が国連に加入することは間違いない。翌年には佐藤総理は引退する。次の総理は中国と国交回復するだろうとも囁かれていましたから。

１９７５年。国交回復から３年目に中日友好協会から議員連盟の秘書団に招待状が届き、３６歳の団長として文化大革命の末期の北京、南京、上海などを友好訪問しました。私にとって初めての外国旅行、しかも中国ですから大変興奮し緊張しました。

留学生として

定年退職を待って北京郵電大学に留学しました。クラスメートは韓国人やインドネシア人などの若者ばかりです。彼らの記憶力にはとても及びませんが熱意だけは負けていませんでしたから発音の練習やら単語を記憶することなど宿題もあり、それなりに努力をしました。

やがて自分の語学学習よりも同じ大学で学ぶ中国人学生たちに日本語を教えることに熱中し、後半の１年は日本語を教えることが主になりました。

郵電大学では２年半在学しました。中国語はある程度の話は出来るまでになりましたが、２００３年から心機一転、大連交通大学に転校しました。

語学学習はあくまでも手段で友好運動が目標ですから、郵電大学で日本語を教えたことは意義深いことでした。そこで交通大学に転校してからも自分の語学学習はそっちのけで日本語を教えることと学生たちに日本の図書を贈る運動に夢中になりました。

中国ではどこの大学でも多数の学生が日本語を学習していますが日本の図書はありません。そこで同窓生にお願いして「贈書運動」を始めました。郵電大学には１７００冊、交通大学には２２００冊の図書が集まり大変喜ばれました。

僻地に小学校を建設

私は少年の頃、小説「二十四の瞳」の大石久子先生のような僻地の先生になりたいと思っていましたから、希望プロジェクトの話を聞いてこれが私の運動だと思い、中日友好協会の許金平氏に相談しました。

間もなく彼から長春市双陽区太平鎮の小学校の改築の話があり、私は二つ返事でOKし、２００３年秋の竣工式に妻と出席しました。そこで初めて出会った小学生たちの喜びの歓迎と輝いた瞳は忘れることができません。

開拓団の一番多く入植した土地は黒龍江省です。友人の李鉄民氏が札幌総領事をしていた頃、ハルビンに学校を建てたいと相談したところ方正県の学校を紹介されました。

方正県ときいて「どこかで聞いたことのある名前だな」と思い友人に尋ねたところ開拓団が悲惨な目にあった所だと教えられ、此処こそ私の「運動の心臓部」、早く新校舎を建設し訪ねてみたいと思いました。

２００５年１０月、妻と竣工式に出席した折に中国政府によって建てられた日本人墓地に手を合わせ、この墓に何千人もの同胞が眠っていると思うと涙が出ました。

侵略、戦争そして開拓団の入植。言い表すことのできないほどの災難を与えた中国人に「幼児を連れては日本に帰れないから育てて欲しい」

小説「大地の子」の陸一心のように育てられて帰国した何人かのお宅にお邪魔して当時の模様を聞いたことがあります。

避難時のお話を聞くために伺いながら「もう、それ以上のお話は止めてください・・・」と言いたくなるほど悲惨なお話ばかりでした。

生徒たちとクラスで交流会

毎年春に長春の中日友好至誠小学校、秋には方正県の中日友好沙河子至誠学校を訪問し

ています。

(両校に"至誠"の名前を付けたのは２８歳で逝った息子の名前を付けたのです)

生徒たちと交流会を楽しみに毎回２０名もの友人が参加してくれます。私たちのお土産は鉛筆、サッカーボール、ピンポン台、テレビ、デジカメ、パソコンなどです。

参加者はクラスに入って孫のような生徒たちと交流します。日本語を教えたり、折り紙をしたり、歌を歌ったり、ピンポンやバドミントンをしたり、様々な楽しい１時間です。最後にクラス毎に写真を撮って全員に送ってあげます。恐らくその写真は想い出とともに永く保存してくれるでしょう。

また、この子供たちとは別に今年から方正県の日本語学校２校の学生たちと日本語で交流することも始めました。日本語学習のお手伝いです。此処の学生たちの中には既に日本人と結婚し日本に行くために日本語を学習している女性もいました。

日本の小学校と姉妹校

私には未だこれ以外にしなければならないことがあります。

長春の至誠小学校と母校の横山小学校、方正県の沙河子至誠学校と水窪小学校とは姉妹校として交流しています。

両校生徒たちの作文や丹精こめた作品を持って今度は日本の小学校を訪ねて報告をしなければなりません。

横山小学校、水窪小学校訪問時は静岡新聞と中日新聞の記者が取材してくれますから、その記事を中国語に翻訳して両至誠学校に届けるのも私の務めです。

翌年、逆に中国の両校訪問時は横山、水窪両校の作文や作品を持って行くのです。まるでサンタクロースのように毎年４校の生徒たちが待っていてくれるのです。これが私にとって一番楽しい一時です。

将来、あの生徒たちが必ず日中両国の友好の架け橋になってくれると信じています。

何時の日か「伊藤さん!　私は至誠小学校の卒業生です。いま日本に来ています」という電話がかかって来るのを楽しみにしているのです。

私の運動の原点は "お詫びと償い" にあります。二度とあのような過ちを繰り返さないためには両国国民の心と心の繋がりが一番です。それには交流です。「交流に優る友好はない」私はそう考えます。

尊敬する松村謙三先生は車椅子でも再三中国を訪問して国交回復に努力されました。

私も昨年胃癌の手術をしましたが癌なんかに負けてはいられません。身体の続く限り友好運動に努めていくつもりです。

（中国東北地方の教育を支援する会 会長）

残像

10歳で家族と敗戦直前の満州へ渡り、命がけの避難で母と妹を失った。あれから62年、この体験が新潟県で獣医を営む樗沢仁さん（72歳）を中国へ駆り立てる。毎年、私たちと方正を訪ねた後、独りとんぼ返りでハルピンに引き返し、その晩、夜行列車でソ連国境の綏芬河（スエフンガ）へ向かう。忙しくて3ヶ月も中国へ行けないとじっとしていられなくなる。今回の方正行きは今年6回目の訪中となった…。　（方正友好交流の会）

樗沢 仁

運命的な糸に操られて旧満州との関わりを持つ事になった。日本のアジア進出の時流に乗って様々な人達が流れ込んで行った。王道楽土へ、大部分はそれを信じてやまなかった。十歳の少年には、果てしなく続くコウリャン畑やなだらかに幾重にも連なる広大な丘陵、日本による侵略の現実なぞ分かるはずもなく、それは眼を見張るような大地であった。

北満（黒竜江省）の軍人官舎での贅沢三昧の日々に、満足どころかへきえきし始めていた頃、遠くに静まりかえったような小さな中国人部落を覗き見た。山育ちの腕白が見慣れていた日本の疲弊した農村風景どころではなかった。“何かが違う…“と、説明のつかない素朴な疑問は遊びにまぎれて母に聞くのを忘れてしまった。

戦火の中、助けを求め懇願する婦女子の一団をすり抜けて行った軍のトラックの上から結局はただの非力な傍観者でしかなかったにせよ、それから始まる開拓団や一般邦人の一連の悲劇の一端を垣間見る結果にもなった。方正墓参には参加せねばと自身に言い聞かせる一因でもある。

ノモンハンを始め、満州里（まんちゅうり）、海拉尓（はいらる）、中国最北端の漠河、黒河、虎頭(要塞)、綏芬河（すいふんか）、東寧(要塞)、牡丹江などと、その周辺の対ソ作戦の主な前線基地を訪ね歩いた。何処も悲惨な負け戦と侵略の爪跡を今に残して、関係者の高齢化とともに訪ねる人も殆ど居なくなったという。捨て石のごとく国境線に貼り付けられた一部の将兵と一般邦人の終焉の地である。虎頭要塞には旧ソ連の戦勝記念碑の周りにロシア人の新しい花輪が十数個も並んで、傍らに守備隊や逃げ遅れ駆け込んだ邦人を含む二千人余が全滅した日本軍の地下要塞入り口が枯れ草の中にポッカリと口を開けていた。

訪中を重ねるうち戦前の二ヶ月を過ごした綏西（すいせい）の知り合いをその小さな農村に度々訪ねるようになった。鉄路がロシアと直結している国境の街・綏芬河と牡丹江との間の綏芬河近くの小さな寒村である。牡丹江の手前に構築中であった東部満州の対ソ第一線陣地のはるか国境寄りである。「…静謐を旨とする…」という軍部の決定なぞ知る由もなく、幾つかの開拓団と同様、我々家族も危険極まりない所へよくぞ行ったものである。綏芬河の両翼には東洋一と言われた虎頭と東寧の地下要塞がある。

訪問の度に不審に思っていたが、集まってくる親戚や知人に心ばかりの土産を持参するのだが、その家の主婦はすぐさま仕舞い込んでしまう。識者によると昔から貧しい東北の農村では手渡されたものはその人の独占物であり、分配は独占者の自由裁量になるのが習慣という、こまかい習慣や文化の違いに振り回されて凝りもせず綏西行きは続いている。

訪中機会が何度もありながら、気にかけていたハルビンの外僑養老院への訪問も果たせなかった。遅ればせながら、長春の「中日友好楼」を昨年と今年と訪ねた。病気がちという残留孤児の

養母が昨年の三人から今年は二人に減って、少ない年金では月額八十元のアパート代にも事欠くという。帰国した孤児達に資金援助の余裕のないのも事実である。文盲に近い養母たちは、ひたすら日本からの電話を楽しみにしているという。ただ、充分ではないにせよ家族や周囲との絆を感じとれたのが唯一の救いであった。軍人恩給等を基盤とした大きな組織とは違って、残留孤児達には大きな力となって行動できる予算も票もない。関係者の高齢化とともに歴史の中で風化してしまうのか。

一般には、我々被害者としての問題提起のみが先行しその情報の多さに比べ、植民地と化した大地で不条理に泣いた虐げられた民の如何に多かったかを併せ検証せねばならない。それは我々の比ではなかったはずである。真の友好の原点であろう。

難民生活の地であった吉林省山中の炭鉱の村には、当時の炭鉱にまつわる中国人の殉難者の立派な霊園がある。この小さな村で、その数を上回る避難民が眠る日本人埋葬地に墓標をという話は、たち消えになったままである。牡丹江近くの陣地で日本人の盾となって全滅した重砲連隊の墓標は一夜にして持ち去られたという例もあり、無言のうちに“順序が逆だ”という内に潜む彼らの本音を突きつけられた思いがする。

孤児としての帰国であったせいか、仲間の組織や関係者とのその後の横の繋がりや連絡も全く持てず、日中国交回復前後まで長い空白の時間を過ごさざるを得なかった。ようやく探し当てた中国関係の少人数グループに関わって、通化市(吉林省)へ中古救急車を持ち込んだり、街の時計台の設置に参画したり、あれやこれやと“ええ格好しの自己満足”を経て訪中を重ねてしまったが、自己の中にある贖罪とも言える何かが、どちらかといえば草の根の交流に偏ってきた所以でもある。

他人事のように感じていた高齢者とは自身の事と実感せざるを得なくなり、難民生活の一端を体験した最後の世代になった。吉林省の山中に眠る母や妹、戦火や戦後の混乱にさまよった人達、カマやクワを振りかざし押し寄せてきた暴民、進退窮まった時そっと手を差し伸べてくれた中国人など、胸中深く潜むそれら幾多の残像が中国へと駆りたてるのか、何時まで続くことやら。

(会員)

樗沢さん
東寧地下要塞、後方に入り口の一部が見える

中日友好楼の養母たちと

シャボン玉と般若心経

伊原 忠

ハルピンを訪れたのは二回目。一度目は２００５年に「７３１部隊」の歴史を知るために。その時、日本のメディアは、「反日デモ」を盛んに報道していました。しかし、危惧する事がなく、親切なガイドのお陰で、充実した旅行ができました。

今回の旅は、「竹が取り持つ不思議な縁」で奥村正雄さんと出会ったことで実現しました。初めてお会いしてから、奥村さんから「方正」に関する思いがけないお手紙や新聞の記事が届くようになりました。それで、私は方正の「日本人公墓」のことを知りました。もともと日本と中国の関係に興味がありましたので、方正県をぜひ訪れてみたいと思い、今回同行させて頂きました。

いよいよ今日は「方正」に出発。ハルピンから約２００キロ。高速道路は広くまっすぐ続いていました。道路の両脇の延々と続くトウモロコシ畑を眺めながら、私はいろいろな思いをめぐらしました。満蒙開拓団の人々はこの大地をどのように開拓したのだろうか？そして、敗戦の時に婦人や子ども達は、この広大な大地をどんな思いで逃げ惑ったのだろうか？このトウモロコシ畑からも襲撃されたのだろうか？・・・などなど

そして、方正に到着。墓守に守られた正門をくぐると、森林の中に中日友好の石碑や平和を祈念する石碑が建ち、建立した人々の思いが伝わってきました。左の門扉には「万里の長城」の絵が、右の門扉には「富士」の絵が掲げられておりました。その奥にたたずんでいる墓前に立ち、黙祷を捧げました。ここで死んでいった子ども達は、どんなにか辛く、切なく、苦しい思いをして死んでいったことだろう。もし子ども達が生きていたなら風に吹かれて自由に空を飛んでいくシャボン玉を飛ばして遊んだであろう。遊べなくて死んでいった多くの子ども達のために日本から持ってきたシャボン玉をいっぱい、いっぱい飛ばして供養してあげました。その後私は、数年前に覚えた「般若心経」を唱えさせてもらいました。死ななくてもよかった人たちが、国策で満州に来てしまった不幸な運命を考えると唱えながら自然に涙があふれてきました。

初めて、「日本人公墓」を墓参し、その存在をわが目で確認し、長年にわたり日本人のために墓を守り続けてくれている中国の懐の大きさに感嘆しました。

今私は、今回の旅でご一緒した石原政子さんが書かれた「わが半世紀－凍土の地、旧満州の空の下で」という作品を、中学二年生の「選択の授業」で子ども達と一緒に読んで学習しています。子ども達は、「満州国」の名は知っていても、そこで、何が起きていたのかは全く知りませんでした。文章の生ま生ましさは、戦争の悲惨さを十分に感じ取らせる事ができました。

「日本人公墓」の歴史はまさに平和の礎の一つです。（謝謝）

（八千代市　中学校教師）

７３１部隊記念館で忘れたもの

津久井　洋

８月２２日「中国･交流と歴史検証の旅」に参加した。方正にある日本人公墓は黄金の稲穂と、熟れたとうもろこしに囲まれ収穫の秋を迎えていた。路上で食べた炭火焼のとうもろこしは、甘過ぎずモチモチした食感で昔を思い出した。墓参後、７３１部隊記念館を訪ねた。この部隊はハルピン市平房区に１９３５年細菌兵器製造を目的に作られた。細菌兵器の効果を確かめるために生きた人間を生体実験したのであるが、１９８０年作家森村誠一著「悪魔の飽食」によりその全貌が明らかになるまで闇に包まれていた。

見学中ハルピンの大学に研修にきていた鳥取大学生のグループと出会った。彼らはメモ帳を片手にガイドの説明を真剣に見聞きしていた。館内には、人体解剖の生々しいジオラマを紹介してある。これを見て立ちすくんだ女性がいたので、少し休んではと声をかけたところ、大丈夫です、こんなむごいこと信じられません。と同僚に支えられ苦しそうに言った。私も昨年見学した時、相当のショックを受けたので彼女の気持ちが理解できる。気持ちを変えてもらいたいと思い、同じ人間の行為とは信じられません、この残虐行為で３０００人もの尊い人命が犠牲になりました。このことは忘れてはいけないが、人間をこのようにさせる「戦争」とは何者であろうか？との角度で見学してはいかがですかと伝えたが気持ちの転換になっただろうか。また、別の学生から部隊の「犯罪」責任について問われた。そこに元隊員の謝罪文があります。この人は上官の命令とはいえ自分が行った罪を５０年間後悔してきた。そして、この地を訪ねて謝罪をしました。長い間悩んでいたことが文面にでています。そういう面で加害者も戦争の被害者といえます。しかし、重要なのは部下に命令をした責任者が「実験資料」を米国に渡して罪を逃れたこと、そのうえ事実を隠し謝罪もなく沈黙していることを知って欲しいと述べた。

戦後生まれが７５％となった今日、戦争の事実を風化させる動きが強まっている。沖縄における「日本軍による集団自決強制」はなかったとする教科書「記述削除」はその表れである。人間の記憶はいずれ消える運命にあるが、歴史の事実は消してはならない。館内に掲示されていた「前事不忘　後事之師」はこのことを後世に伝えている。学生と別れる際、良い勉強になった、体験者から話を聞き、仲間と話し合ってもっと掘り下げたいと言われた。元気を貰い、気分爽快で手を振った。が、大切なことを話し忘れてしまった。それは方正地区日本人公墓のことである。気分爽快が急に憂鬱になった７３１記念館での一コマである。

（会員・千葉市、東京都嘱託）

「中国・交流と歴史検証の旅」に参加して

栗林 稔

1　はじめに

８月２２日より４泊５日の日程で初めて方正県を訪問してきました。「中国語新潟」に参加したことがご縁で方正友好交流の会の奥村さんから参加のお誘いを受けました。「天を恨み地を呪いましたー中国方正の日本人公墓を守った人々ー」や「星火方正～燎原の火は方正から～」、今回同行した石原さんの手記など頂いた資料を事前に読み「方正日本人公墓」について学習しました。

2　方正日本人公墓

私は、１９５２年生まれなので戦争を体験していません。ましてや日本公墓のことはまったく知りませんでした。方正県は、黒龍江省ハルビン市街から東へ約１６０キロメートルに位置します。高速道路を走り、３時間もかかりました。当時の日本政府の国策で３０万人以上の開拓民が満州に渡りましたが、１９４５年の夏、ソ連の参戦に続く日本の敗戦で地獄のような状況が満州で見られました。多くの日本人開拓団は、やっと黒龍江省の方正県にある収容所にたどり着きましたが、酷寒の中で飢餓と疫病に苦しみ５０００人以上の人々が亡くなったといわれています。１９６３年、中国残留婦人と中国人の手により公墓が建立されました。

今回同行した樗沢さんより「満州・荒野の旅一少年の記録」という自伝を頂きました。その中で引用してあった「敗戦後の異国での地獄を忘れないということは、他国の民をそれ以上の地獄におとし入れたことを決して忘れないということにつながらねばなりません。」という一文が心に残りました。歴史的事実を忘れないためにも、満州開拓の犠牲者への追悼行事が必要だと思います。方正県が管理している日本人公墓に、日本政府から積極的に関わってもらいたいと考えました。

3　７３１細菌部隊記念館について

森村誠一著「悪魔の飽食」を読んだときから、いつから訪ねてみたいと思っていました。今回、参加を決定したきっかけとして、日程の中に７３１細菌部隊記念館見学が入っていたことがあげられます。陸軍に細菌兵器の開発・研究を提言したのは石井四郎です。１９３２年陸軍軍医学校に防疫研究室を設立しました。１９３８年、ハルビン市郊外の平房区を特別軍事区とし、６平方キロメートルにわたる広大な施設を建設しました。敗戦が確実となった１９４５年８月１３日、証拠隠滅のため７３１部隊本部は爆破されましたが、ボイラー室の煙突が２本残りました。本部跡は復元され、展示館になっていました。中国はアウシュビッツ収容所のように世界遺産にしたいと意気込んでいるようです。

中国には沢山の戦争記念館があるそうです、中国人は過去に日本人に侵略されたことを絶対に忘れません。このことをよく理解してつき合っていきたいと思いました。このことを肌で感じることができた旅でした。

4　おわりに

帰国後しばらく下痢に悩まされました。朝市で買った果物を食べたことや、墓参の帰りに寄り道をして農家の方から干したリンゴを沢山頂いて食べたことなどを思い出しました。朝の散歩で、松花江で魚釣りをしていた人に話しかけましたが会話にはなりませんでした。多くの人々と会話ができるよう中国語の勉強を頑張りたいと思いました。また、記録映画監督の羽田澄子さんも同行したのですが、「方正地区日本人公墓」の記録映画を作るようだったら、真っ先に見たいと楽しみにしています。戦争を二度と繰り返すことがないように、日中友好のお役に少しでも立てればと、中国語会話の教室に通っています。

（新潟市）

今年も会いに来ましたヨ

奥村 正雄

■ 鎮魂のシャボン玉

毎回、墓参団として公墓の墓前に花束を供えるほかは、参加者それぞれ思い思いのやり方でお墓に向い合う。ある時は小雨の中、懐から取り出した鉦をたたいて般若心経を唱え続ける人がいたし、またある時は、日本から携えてきた故郷の味を墓前に供えて合掌する人もいた。今回、思いがけない光景を目の前にして深く感動したのは、ご夫婦で参加された小、中学校の教師夫妻が子供たちが遊ぶシャボン玉セットを取り出し、それぞれ口にくわえたストローから静かに吹き出された無数のシャボン玉が、お墓の周りを漂っては松林の中に消えていったシーンだ。

一瞬、私の脳裏では、かつて王鳳山さん（元方正県人大常務委員会副主任）が拙著「「天を恨み　地を呪いました」のために書いてくれた一文「日本人公墓についての随想」の中の、地中の子供たちが墓参者に語りかけるシーンと、いま目の前の現実が一つになった。日ごろ、子供たちと多くの時間を共有している夫妻の鎮魂の姿が、いまも目の前に浮かんでくる。

■ 砲台山に分け入る

今回、同行者の中に記録映画監督の羽田澄子さんと若いスタッフがいた。日本を離れる前から方正を再訪する残留婦人の姿を丹念にカメラに収めていたのだが、方正に着いた日の午後、私たちの宿に突然、予期せぬ訪問者が現われた。残留孤児Ｊさんが彼女の娘、孫娘に付き添われ、会うなり泣いて訴え始めた。「日本政府はまだ私を孤児と認めてくれない！」その手には日本の厚労省が送った書類が握りしめられていた。「あなたの気持ちはわかるが、以下の７つの、日本人である証拠、手がかりを探し出して提出しなさい。それがないと日本人と認めるわけにはいかない」2001 年 1 月 17 日の日付である。Ｊさんと家族はその「証拠」となるものを必死に探し続けている。この日、1 枚のＣＤを携えてその場で映像を見せた。「日本人の子であるＪが友人に預けられるのを私は見た」という中国人の証言を撮影したものだが、この証言がそのまま証拠とはされないだろう。作られた証拠ではないという「証拠」がない以上…。

62 年前、荷車に積まれて運ばれ、油をかけられて 3 日 3 晩燃やされ、後年その白骨が松田ちゑさんによって発見された砲台山の現場を撮影したい、ということになった。外事弁公室の副主任Ｒさんがつき添ってくれ、公墓の裏道を進んだ。しかし行けども行けども標高が上がらない。どうやら山あいの山道を奥へだけ進んでいたらしい。結局、あきらめて引き返した。あれから６１年たって、その道を案内してくれる当時の目撃証人を探し出せないでいる。またしても 76 歳になった自分の残り時間を数え、焦燥感のみが募る。

その途上、2 箇所、赤松林の中に土地の人の墓があった。まわりの薮の小枝に何ヵ所か赤い布が結ばれていた。「これまで土饅頭だったところに小さな石塔を建てた祀りをやったのでしょう」とＲさんが教えてくれた。

■　鐘よ、響き合え！

友好園林の中にある陳列館が老朽化してきたので建て替えられるそうだ。公墓を訪ねるたびに気になる陳列物がひとつある。今から５年前、山口県「中国残留婦人交流の会」（会長磯野恭子さん）が贈った、高さ１メートル足らずの鐘である。これは陳列のために贈られたものではなかった。同じものを二つ鋳造し、一つは山口市香山の瑠璃光寺境内に据えられ、もう一つがこれを鋳造した山口県阿東町の貝森さんによって方正に運ばれたのだった。そして山口と方正双方で鳴らす鐘の音が、亡くなった同胞の冥福と未来永劫の友好平和を願って殷々と響き合うように、という願いが込められているのだ。

それから５年、方正に届けられた鐘はいまだに安住のところを得ず、陳列館の片隅に借り物のように置かれたままである。聞けばこの鐘の設置について、上部組織にお伺いを出しているのだが、まだＯＫが下りないのだという。陳列館建て替えの機会に、この鐘があれだけ広い園林の小高い場所に移され、赤松林に響き渡る日が早く来て欲しい。

■　公墓に消えた高官

公墓へ向かうマイクロバスがハルピンから乗ってきた大型から中型に変わった。途中の道路をコンクリートに改装中のためだった。反対側車線を砂利道に残したまま、すでに出来上がった片側を中型バスが車幅いっぱいに進む。幹線から分かれて公墓への道に入っても、この半製品道路が続いた。３年前にはぬかるむ道を、高速道路下のトンネルで大型マイクロバスの頭がつかえるからと下車、トンネルの先で待つ小型車まで歩き、乗り継いで参拝したことがあった。来年はこの道路が完成し、公墓参拝がさらに便利になるだろう。

一行がハルピンに戻った翌日、公墓の裏山、砲台山へ向かうのに、この半製品道路を通らず、ガタピシの砂利道を迂回して走った。山の裏へ回るには、こんなに悪い道しかないのかと、腸がねじれそうなタテ揺れヨコ揺れに耐えていると、遠くからパトカーのサイレンの音。公墓入り口で何台かの高級車が止まると、警護のスタッフやマスコミに囲まれた省の幹部らしい人物が公墓の中に消えた。私たちが前日通った工事が片側だけできた道を今日は通れなかったのは、このＶＩＰ公墓訪問のためだったのだ。

「あれは誰？　何のために公墓へ？」

同道してくれた県政府のＲさんに尋ねたが答えは返ってこなかった。

■　松花江のほとりで

撮影のため、一行より１日余計に方正に留まった私たちは、帰国前日の夕方、ハルピンの中国料理店で合流することになっていた。約束の時間まで間があったので、ひとり中央大街（キタイスカヤ通り）の本屋を覗いた後、松花江のほとりで腰をおろした。土曜日とあってベンチは家族連れや恋人たちで満員。今年は松花江の水流が少なく、はるか沖合いまで川底が現われ、そのいたる所で凧が揚っていた。34 年前、ここから伊漢通まで公墓の墓石を船で運ぶのに、水量が増すのを待ったことを想った。

（本会参与）

方正日本人公墓　鎮魂歌

福久 かずえ

私は大正末期、中国大連に生を享け、七歳の時から父の仕事の関係（電気技師）で中国三省を転々と住所と学校を変えながら、幼少・青春時代を過ごしました。

終戦時（日本運命の日）、旅順師範学校在学中で寮生活をしていた私は、身を寄せる親戚、友人もなく、一家離散の憂き目に遇い、遂に天涯孤独の身となり、置き去りにされたのです。

同年九月十八日、旅順は中国とソ連に接収され、母校も立ち退き命令が下り旅順を脱出。大連に避難中に結核が再発し、翌年春大連港から引き揚げの機会を逸してしまいました。路頭に迷っているとき、優しい中国人に助けられ、病院で手当を受け、健康を取り戻したあと、その命の恩人と結婚。

そのあと、大連市も解放されて、中華人民共和国政府が樹立。変転する社会の中に飛び込み、自分を失うことなく積極的に社会事業に参加し、戦後四十五年の「前半」は医師の職を求め、「後半」は大学での日本語教師として、直接新中国経済建設に寄与しました。このことは、私の戦後六十年の生活の中で、生きて来た証としての足跡であり、一人の人間として成長してゆく上で心の支えと糧として意義深いものがあったと思い自負しています。

しかし、人生にはいろいろな出会いや巡り合わせがあり、様々な経験や生き方をするものです。遠い日の記憶の中で、1966年、忘れることがない「文化大革命」の嵐が中国全土に吹き荒れ、外国人、しかも日本人である私も避けて通れなかったのです。今までかつて経験したこともない七ヶ月間の「軟禁生活」の中で、理不尽なことを言われたり、されたりして、かきむしられるような悔しさと虚しさに、うちひしがれることもありましたが、無事乗り切ることが出来たことは不幸中の幸いとでも言いましょうか。

そこではじめて知った過去の戦争は一体何だったのか――正しい「歴史認識」のもとで、日本と中国が再び戦争をする事はないという、しっかりした信念で戦争の加害者の立場から,深く謝罪し、中国に恩返しの意味で、終生の事業は日中友好の使命を果たすことを決意し、六十二歳の定年退職まで頑張ることができました。当時、過去の日本の侵略戦争が中国人民に犯した罪悪は計り知れないことを学び、深く肝に刻みまがら、悲しい汚名は心の痛きに耐え難さを感ずる私でした。

私達は加害者であると同時に戦争の被害者であることがわかり、自分の生き様を正当化せずにおられない気持ちでした。「命ある限り希望あり」で、勇気を持って自分が体験した事実を、堂々と次世代に語り継ぎ、あの忌まわしい戦争地獄は愚かで、最も憎むべき侵略行為で、二度と正当化することのないように、精神面での教育こそ大切であると思いました。地球の平和と人類の幸福を守るために、二十一世紀は、「核兵器は必要ない」ことを、日本が先頭に立って断固として叫び続けて行くことの使命を果たすべきだと思うのです。

戦争は決して戦場の兵士だけの問題でなくて、遺された家族は、戦後六十二年以上経ってもその影を残しています。日本は高齢化が進む中で、あの戦争を知り語れる人たちも少なくなって来ています。そして今「戦争放棄」の条文が危機にさらされている中、私は履歴書の一部として戦争詩を読み続けていきたいと思う昨今です。（八十路から始めた詩歌です）

同胞の無念さを代弁し、一人一人が尊い命を継ぐ使命の人になろう！

詠歌

（一）敗戦忌葉月に弔う霊多し永遠に安かれ心から合掌す
（二）神も無く仏も無きか敗戦日星火の如く燃ゆる方正墓地
（三）犠牲者の悲痛な叫び受け止めん方正の御霊は命の歴史
（四）散る桜残る桜も永遠に命の限り不戦を誓う
（五）同胞の君を泣く大義なき戦場に二度と殺すな殺されることを許すな
（六）置き去りの方正の難民自決の地「戦争放棄」九条平和の証
（七）国敗れ家族の絆引き裂かれ生きて再び見えぬ祖国今思う
（八）生かされて永住帰国果たせるも吾が終生の使命は日中友好
（九）敗戦の苦労を語りいつまでも麗しい日本で明日を生きなむ
（十）幾星霜越えて今日ある命をば「平和であればこそ」続けて祈る
（十一）中国人の妻となりきし六十年日中友好の架け橋となりぬ

終戦から六十二年。これだけは語り残す戦争体験『旧満洲死の逃避行』。この小冊子の中で私が書いた「六十年目の平和の架け橋」の文は、平和であれば書かなくてもいいはずの事柄です。しかしその歴史の中に生存した者は、それぞれ体験されたことと思います。今思えば、過去の戦争で人間が侵した国、民族、異文化への敵対関係という重苦しさを、どうすることもできない空間での苦しみを知らされました。この小冊子の中に語られた中国残留孤児・岩井恒男さんと元中国残留婦人の須田初枝さんの苦難に比べれば、私が体験したなどは比較するほどのことではないと思います。

「過去の満州開拓団の痛ましい最期を書くことこそ、今日を生きる者の使命ではないでしょうか。それが真っ赤な夕日の曠野に散った霊魂を鎮めるはるかな墓標となるのではないかと思うのである。それなのに何も見ず、何も知らずに死んでいった多くの同胞を思うと胸が痛むのである。願わくは、異郷に散った二十七万人の開拓団の同胞よ、鬼神となってわが祖国の永遠の平和を守り給えよ、と叫びたい」

かぎ括弧の引用文は、昭和五十三年三月二十日初版発行の『満州開拓団二十七万人死の逃避行』の著書、合田一道氏の言葉を引用させて頂いたものであります。

なかにし礼氏の著書　『赤い月』

坂東英二氏の著書　『赤い手』

このお二人も敗戦直後、中国東北で死の逃避行を経験されて帰国されました。

（会員 元・中国残留婦人）

「方正」はわが心の座標軸

藤井 正義

私が「方正」という語を知ったのは、平成十九年五月、社団法人日中科学技術文化センターにお世話になってからのことであるから、まだいくばくもない。これを機会に旧満州に対する私の想いは、今までと一変し、その深さと膨らみを増した。

それまでも私は満州についてある種の特別な想いを抱いていた。それは理由のない郷愁のようなものであり、あるいは未知の世界への憧憬のようなものでもある。おそらく数多くの少し虚構化された物語に由来するのであろう。五味川純平の「人間の条件」、なかにし礼の「赤い月」、はたまた、帰郷軍人たちの満州脱出物語、その他市井に散乱する新聞雑誌の類である。巷間に伝わる旧満州についての様々な読み物は、主人公とその周りの人たちにスポットライトを浴びせたものが多く、何れもそれなりに興味深いものではあったが、あるものは世間の受けを狙ってか、本来、悲劇であるべき筈のものまでも美化してしまっていた。

「方正」は違う。「方正日本人公墓」の話を「方正友好交流の会」事務局長であり、当社団事務局長でもある大類善啓氏から初めて聴いたとき、私は胸を締め付けられる思いだった。同時に、今まで漠然と抱いていた満州についての想いが、取り残され非業の死を遂げた五千体の霊のなせる業ではなかったのかという想いがこみ上げてきた。私はこれだと思った。何か大切なものを発見したような気持ちだった。

それ以来、私は、「方正」の文字の入った文章を手当たり次第に読んだ。描写は直接的であり、赤裸々である。見聞きし、体験したことが生の声で述べられている。

私は「方正」を自分なりに構成した歴史の座標軸に据えて考え続けた。

近代史は、世界市場を求めて彷徨う欧米列強の、拡大主義に基づく植民地獲得競争で塗りつぶされている。遅れて参入した日本も、昭和恐慌から始まった国内経済の不況と農村の口減らしを解決する手段として、富国強兵による拡大主義に走り、中国を侵略した。

学者はこれを資本主義発展段階での歴史的必然性と言う。それは客観的な認識であるかも知れないが、裏を返せば非情である。

三十万人にもおよぶ夥しい数の民間人が政府の甘言に乗り旧満州に送られたのだ。新天地を求めて一旗揚げる夢を持って満州に渡った人も多かったと聞く。無敵を誇ると思われた関東軍の存在も、渡満する人々に誤った安心感を与えたのだろう。しかし、関東軍の考えは、開拓民を旧ソ連国境に近い地域に入植させ、人垣による防衛線を築くことでもあったのではないか。

肥沃な自分の土地を追われたのは中国の農民である。流浪の民と化し、悲惨な生活を強いられたのだから開拓民を恨むのは当然である。中国人の恨みを買い、常に襲撃に怯えながら暮らしていた開拓民に、八月九日のソ連参戦は決定的な衝撃を与えた。頼みにしていた関東軍の大部分はとっくの昔南方戦線に移動していた。戦車と重火器で武装されたソ連軍は怒涛のごとくソ満国境を越え、男子はことごとく召集されていたから、残された婦女

子は、土地を捨て、家を捨て、わずかな家財を背負って逃げ惑った。開拓民たちは関東軍の補給基地があった方正に集結したが、すでに関東軍は撤退し、もぬけの殻だった。関東軍は撤退に当たって橋梁を破壊したというから唖然とする。ソ連軍の追撃を遅らせるためとはいえ、同胞に対する思いは何処へ行ったのか許し難い。

開拓民たちに飢えと過酷な冬が訪れ、ソ連軍による暴行と凌辱が始まった。病人が続出し、四千五百人ほどが方正で死んだ。無惨な死だ。死体の置き場に困り、仮置き場に放置してあった死体は春が来ると臭気を放った。これでは霊は収まらない。

幸い読者の皆さんがご存知の通り、何年か後に、中国人妻となっていた松田ちえさんは、砲台山麓の雑草の生い茂る中に野積みになった白骨体を発見した。松田さんは県政府に日本人の墓を造ることを請願した。請願は、県政府から黒竜江省政府を経て中国中央政府に上げられ、周恩来総理により承認された。日中国交正常化の十年前、国際法的にはまだ戦争状態にあった時代だから周恩来の懐の深さがうかがわれる。

日本の人民と軍国主義者を区分する中国政府の戦略だときめつける意見がある。方正問題をまだ理解していない人はその様に考えられであろう。しかし、取り残されて死んで行った何千人の人々には、そういう他人事のような冷めた考えは通じない。中国政府が敵国民の集団墓地を自国内に建てることを許した、その姿勢を真摯に受けとめなくてはならない。日本の為政者はこのことの重大さに気づいていない。いや、気づいていても眼をそらしているのかも知れない。政治はしばしば真実を歪める。民のためを思わず、為政者自身の満足だけを思っているからである。

『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』に掲載されている郝薫華氏の詩、「もうひとつの靖国神社」（１９９９年作）は、「方正」の真実を物語って感動的であり、為政者に猛省を促している。九段にある靖国に詣でる人なら、何故、方正県にある「もうひとつの靖国」に詣でようとしないのかと訴えている。「方正」は「方正友好交流の会」の努力によって蘇った。

私には人間関係は相対的であるように思える。鏡のようなものであり、こちらが笑えば鏡の中の顔も笑う。こちらが怒れば鏡の中の顔は怒る。国と国との関係も同様な面が多い。微笑には微笑が返る。憎悪には憎悪が返る。二国間の関係は、いわばＸ軸とＹ軸の真ん中を通る右肩上がりの直線であるべきであろう。一方の友情が増せば他方の友情が増す。こう考えると「方正」は座標軸の中心に位置する原点である。

日米戦争と異なり、日中戦争は日本の仕掛けた戦争である。大勲位の中曽根康弘元総理もいつかテレビ放送で述懐していた。日本は中国には悪いことをしたのだから中国に謝るべきであると。

われわれは真実の歴史認識の眼を曇らせてはならない。民を戦争に巻き込み、戦争を正当化する「間違った大義」に導かれないよう、日中関係をはじめ世界の動向に眼を光らせていなければならない。私は「方正」を原点としてその想いを新たにした。

最後に、松尾芭蕉の句を一つ。　「むざんやな甲（かぶと）したのきりぎりす」

（会員、社団法人 日中科学技術文化センター参与）

中国 思い出の旅

石原 政子

私達は八月二十二日 日中友好の旅十三人の団体に参加し新潟発十一時半の飛行機で中国ハルビンに向かい、二時間後に到着、ホテルのバスが迎えに来ました。翌二十三日九時、貸切バスで方正に向かい三時間で着きました。

一九八一年帰国以来方正は初めてです。戦後六十二年ぶりの墓参です。墓地も大きく立派な碑が立ち、これも中国のご尽力に依るものと感謝いたしました。ここに眠っている何千人という祖国に帰れなかった日本人は戦争の犠牲者です。心からご冥福をお祈りしました。走馬燈のように当時を思い出し、暫くの間涙にむせびました。当夜はなかなか眠られなかったのです。二十四日バスは伊漢通へ行く途中、終戦の時何千人の日本難民が見え渡す限りの畑の中に穴を掘って寒さを凌いだ所を通りました。私達親子の別れた所で、私の人生の分岐点でもありました。

バスは伊漢通に向けて走り、しばらくして松花江が見えました。当時、父は四十六歳、私は十六歳の少女、少しでも父を助けたいと思い、頭を丸坊主にし、男の姿で大勢の日本人と一緒に何十回か筵の袋を背負ってソ連軍の所に食料をもらいに行ったのが昨日の様に思い出され感無量でした。残念ながら父は四ヶ月後に亡くなったのです。松花江の景色は変わらず、大河は滔々と流れて以前と同じです。時代は変わり、世界平和の悠久を祈念してやみません。

私は現在七十八歳の高齢者ですが、健康で好きな洋裁をしています。私の日夜の願いは唯一つ、戦争のない平和な世界です。

戦争は絶対反対です。この事実は後世まで伝えて行きたいです。

平成十九年十月二十五日

上記の文章はこの８月墓参団に参加された石原さんの手記ですが、下の「私の半生記」は、平成３年（1991年）にまとめられ、私家版のように刊行されたもので、すでに石原さんの手元にも１部残っているぐらいです。貴重な記録ですので、石原さんの了解のもと、全文掲載いたします。 （編集部）

我が半生記

― 凍土の地、旧満州の空の下で ―

石原 政子

はじめに

「中国残留孤児」と呼ばれる人々は戦後のドサクサで肉親と離ればなれになり、自分の身元がわからなくなって「孤児」となった、という言われ方を一般によく耳にする。また、いわゆる「残留婦人」についても、自分の身元はわかっていても日本に帰れなかった様々な事情を抱えていたと言われる。そう言われれば、聞く方も何となく納得してしまうが、

そのドサクサや様々な事情が一体どんなものであったか、実際のところ当事者でなければわからないことである。

私のような若輩には、ここに描かれているような石原さんの体験は、まさに計り知れないものである。しかしながら、われわれ戦争を知らない世代が戦争の何たるかを少しでも理解しようと思うならば、石原さんや残留婦人方々の体験した事実は避けて通れないものである。なぜなら、戦争は兵士や将軍や政治家だけのものではなく、一般庶民、特に最も弱い立場にある女性や子供に否応なしに降りかかってくるものだということを、この人たちの体験は如実に物語るからである。石原さん自身、そして石原さんの家族の身の上に起こったことは、戦争という人間の愚かな行為がもたらす、あまり表立つことのない、しかし厳然として存在する、ひとつの必然である。

私は、自らの体験をこのような手記にまとめた石原さんの勇気を讃えたいと思う。そして、より多くの残留婦人や残留孤児の方々が、同様にしてそれぞれの体験を語り継いでいってほしいと思う。当事者にとって、それについて語るということがいかに辛いものであっても、いや辛いものであるからこそ、それはわれわれ戦争を知らない世代にとって、何ものにも替えがたい貴重な財産となるからである。

今田　克司

この前書きは、今田さんが中国帰国者三互会の私達残留婦人と交流を深め、また体験記執筆者の私ともよくお話し合いの機会を持たれて、読後感として書いて下さったものです。色々と多くの皆さんの御協力により、私の本当につたない体験記が不十分ながらも出来上がりました。今後とも呉々も宜しくお願いいたしますと共に、末筆ながらお礼を申し上げます。誠にありがとうございました

石原　政子

「満州に行きなさい」

昭和十九年九月十八日、大陸令１０３０号「帝国陸軍対ソ作戦計画要領」が大本営参謀本部より関東軍に伝達されました。これは児島襄氏が書かれた満州帝国をはじめ、多くの戦史の中に書かれています。太平洋戦争の敗色と共に、多くの戦力を南方戦線の防衛に割かれ、国境の防衛力を失った関東軍が、せめて鮮満国境、新京・大連の三角地帯に兵力を集め、持久戦に持ち込もうと云う作戦計画だったのです。

これは「極秘事項」として隠蔽されていましたから、行政の末端で依然、国策として守る意志のないソ満国境近辺に、開拓団、義勇隊・女子勤労奉仕隊を送り込み、悲劇を増幅させたのでした。

私の父は山梨県都留市（当時は町でした）で和裁塾を開いて居ました。ご近所の評判も良く、多くの弟子を抱えて私が子供の頃はまあ良い暮らしをしていました。然し日中戦争の拡大と共に和服を着る人が次第に減少し、失業へと追い込まれていきました。それと共に役場から開拓係の人がやって来る様になりました。背の低い丸顔の黒ぶちの眼鏡をかけた四十前後の男です。

「満州に行きなさい。空襲はないし配給制じゃないから米は自由に買える。ここに残って

も徴用で軍需工場に回されたら家族がばらばらになっちまうよ。満州に行けば生活が楽になる。その方が良いよ」と、行きさえすれば何でも良い方に片づく様に話すのです。それが毎日です。まず母が乗せられ、父もその気になりました。

こうして昭和二十年五月二十六日、私達を含めて四十七人が都留町から満州に向かいました。下関までの車中で、空襲で焼かれ、赤錆た鉄骨の街が点々と続くのを見ました。下関から乗船の予定が変更され、海底トンネルで博多に行きその夜の六時に乗船、釜山に向かいました。昼間はアメリカの潜水艦や飛行機に狙われて危ないからだそうです。翌日の朝の八時に釜山の港に無事着きましたが、救命袋を枕に一晩中眠れませんでした。

汽車で四日間、朝鮮を通り、今の中国の瀋陽に着きました。子供心にも長い長い旅でした。一泊して、汽車は北に向かうこと二日、漸く勃利に着きました。当時は雨ばかり降って旅館に二十日も宿泊した記憶があります。目的地に行くには荷物を運ぶ馬車の他は乗り物はありません。漸く雨が上がったある日、待ちかねた私達一行は徒歩で出発し、二日間かけてやっと広富山開拓団に着きました。

「日本は負けたんだ・・・」

広富山開拓団は、やはり山梨県の都留周辺の人たちの集まりで、入植して三年から五年位の農家の人たちとそうでない人たちが混ざり合った、全部で三百人位の集団だった様に思います。古い人たちは現地の様子を、私達は都留の近況を語り合って、久しぶりにくつろいだひと時を過ごしました。然し、割り当てられた宿舎は土の壁に草の屋根、小さな窓、今まで見た事もない深い深い井戸、電気はありません。勿論電話もラジオも新聞もありません。夜は石油ランプだけで過ごすという、現実に私達が住むところとは思えないようなものでした。

私、石原政子十七歳の夏、父と母と二人の妹、弟一人の六人家族の新しい生活が始まったのです。到着した六月の半ばから二ヶ月近い月日が慌ただしく過ぎました。待ちわびていた日本からの荷物が届いて家族の心がうきうきしていた夜のことです。突然、本部から「ここにいては危険だ。全員、依蘭に向かう」との避難命令を知らされたのです。「父ちゃん何故だ」「わからんねえ、これは命令だから仕方なえ」私は何もわからぬ儘に家族と共に家を出ました。せっかく日本から届いた荷物はその儘です。人数を確認して私達が村を出るか出ないうちに、もう何処かから集まって来たのか、何百人もの中国人が土塀の外からこちらを窺っているのです。団の男たちは十八歳から四十五歳まで総て召集を受けました。残されたのは女・子供と年寄りです。

「あわてるな」「弱みを見せるなよ」荷物を積んだ何台もの馬車、お互いに励まし合い長い行列を作って依蘭に向かいました。雨続きの道は泥田の様です。私は母に聞きました。「母ちゃん、これは一体どうしたの。私達は何処へ行くの？」母は沈んだ声で応えました。「日本は・・・・・・戦争に負けたんだ」と。

何で何で日本が負けるんだ。どんなに苦しくとも最後は絶対勝つ。そう教えられて来たじゃないか。数日前からの爆音だって「大きな演習やってるのぉ」と言っていました。日本が負けたなんて信じられない、と私は心の中で叫びながら黙々と怒ったように歩きました。とにかく歩き続け、依蘭に着かないことにはどうにもならないのです。その日の夜、中国人の地主が、粟のご飯といんげんの煮たのをふるまってくれたうえ、泊めてくれまし

た。一日中何も食べずに歩き回った私達には、初めて食べた粟のご飯の何と美味しかった事でしょう。

次の日も一日歩き、三日目に依欄の峠が見えました。「頑張れ、あれを越えれば依蘭の街だ」「もう少しの辛抱だぞ」皆疲れを忘れて転がるようにして前へ進みました。

その時です。峠の向こうから副団長が撃たれたのは・・・・・・。銃声を聞き、皆顔色を変えて駆け寄りました。副団長は頭から血を流して倒れていました。

即死だそうです。人が殺されるのを私は初めて見ました。これから先何人の人が死ぬのを見る事になるでしょう。ぼんやりと副団長の死顔を眺めていました。奥さんの泣き声が何時までも何時までも耳を離れませんでした。

漸く到着した依蘭の郊外には他所の開拓団の人が大勢集まっていました。夕刻お互いに苦労話等を交わしているさなか、ソ連の飛行機が町を爆撃しました。飛行機から次々と黒い物が落ちてきては爆発します。中国人街、日本人街の中には慌てふためいて郊外へ逃げる人たちばかり。安住の地は何処にもないのでしょうか？

松花江を渡り方正へ

私達は松花江を渡り、方正に向う事になりました。他の開拓団も混えた大勢の人が河を渡る事ことは大変な事です。人目を避けて夜渡ることになりました。一回で約三十分、全部の人が渡り切るまで、それは長い不安な時間でした。それから匪賊の襲撃を避ける為に夜間だけ歩く事になりました。昼間は林の中で休み、食物を探します。見た事もない木の実も食べました。持っていた少量のお菓子は、弟（六歳）や妹（九歳）に分けました。お米や塩が少しはあっても鍋がありません。お金があっても買う所がないのです。日暮れと共に歩き出し、一晩中歩いて明け方から林の中で休みます。大きな荷物を背負って疲れ果てた父は、蚊がいっぱいたかっても、その儘ぐうぐう寝ていました。私は木の枝で蚊を払いながら父の寝顔を見ていました。かわいそうなお父さん。こんな筈じゃなかったのに。こんなに苦労をして・・・・・・。私もいつしか寝てしまい、蚊に刺されて目を覚ましました。

次の日、方正に近い部落の空き家で休んでいると、突然数人のソ連兵が入ってきて、五十歳を過ぎた何人かを残して男を連れて行きました。そのため父が背負っていた荷物は、私と母が分けて背負うことになったのです。自分の荷物の他に又父の分が増えたのですからとてもつらく感じました。励まし合って歩き続け、漸く方正の街が見える地点にまで来ました。夕方には街に着ける、と喜んでいると、包米（とうもろこし）畑の中から銃を持った十数人の中国人が出て来ました。「匪賊だ、逃げろ」夢中で駆け出しましたが、母が捕まってしまいました。銃を突き付けて大声でわめきながら母の体をさぐっていましたが、何も無いとみると荷物を調べました。お金は一番小さい弟の身に付けていたので、見つかる筈はありません。

その時、私から二、三十メートル離れた所に朝比奈さんがいました。五十過ぎても背が高く、体格が良く、大きな荷物を背負ってその外側にかけてあったハンガーがブラブラ揺れていました。黒い帽子をかぶりピストルを持った中国人が近づくと、朝比奈さんに「金を出せ」と言って体をさぐったのです。日本語と中国語で争っているうちに、ドーンと銃声がしてハンガーが吹っとぶと朝比奈さんは胸から噴水のように血を吹き出して倒れまし

た。見ている間に顔が真っ青になっていきました。賊が去ると、家族が駆け寄り、人が集まり、死体を草むらに隠すと、顔に手ぬぐいをかぶせて立ち去りました。奥さんと息子の泣き声。私は恐ろしい夢を見ている様に唖然と立ちすくんでいました。四十五年経った今でもテレビのシーンの様に甦ってまいります。

そして漸く方正に辿り着きました。

生き地獄のような生活

方正は黒龍江省の中央、松花江の支流、蟻蜒河の南の大きな街でした。平和の時に訪ねたのであれば、さぞ楽しくもあろうに、今は地方からの避難民が何千人も集まり、ごった返していました。その中を日本兵が一組五人、十人の組を作り、白旗を持って歩いています。その規律の正しさが異様に感じられ、情け無く思いました。

私達一行は小学校に収容されました。積み重なった疲労と栄養不足から次々と病人が出て死んでいきました。夜になるとソ連兵が日本の女性に乱暴するのを、誰も守る事は出来ません。

生地獄の様な不安の中に二週間程が過ぎ、私達は郊外の空家に移りました。七世帯だったと思います。地べたに蓆（むしろ）を敷いて暮らしました。九月の末頃、ソ連に連れて行かれた男たちが帰って来ました。その中に父の顔を見て、とび上がって喜びました。男たちは三日に一度、ソ連兵の所に食料の配給を受けに行きます。私も頭を坊主にし男装して、父と一緒に半日がかりで着いた所は伊漢通という小さな港でした。日本人が袋を背負って帰る行列が次々と続きます。高粱、大豆、もみの付いた米、その日によってもらう食料は変わります。もち米をもらって帰った日は、一升瓶の中で棒でつついて、もみ殻を落とします。赤黒い本当の玄米。六人家族の食べる量を作る事は大変な努力でした。それを、日本兵が捨てた鉄兜のお鍋で炊くと鉄のあくで黒いご飯が出来上がるのでした。

いつになったら日本に帰れるのでしょうか？十月にはいると朝は薄い氷がはる様になりました。毎日人が死んでも埋める場所が無くて重ねて蓆をかぶせて死人の山が出来ました。この儘では冬は越せない。皆で相談の上、比較的土の軟らかい畑に穴を掘って住む事に決まりました。六人家族が住むには四畳位の広さが最低でも必要です。父は毎日穴を掘りました。私と母や妹は、遠くまで木の枝や棒を拾いに行きました。深さは二メートル位、真ん中にいろりを掘って煙突をつけ、屋根は棒や木の枝を組み合わせて蓆をかぶせ、刈り取った草を敷き土を上にかぶせて小屋は出来上がりました。これは大変な大変な重労働でした。そして今度は燃料集めです。私と母は燃えそうなものを、又日本人が残していった畑から人参や大根を掘りに、だんだん遠くまで行くようになりました。

父は相変わらず、港まで食料をもらいに行きます。男手がなくなった家族や病気で動けない人の分まで運ぶためには、毎日のように行かなければなりませんでした。この生活がいつまで続くのでしょうか。いつまで耐えられるのでしょうか。わかりませんでした。

ある日、ドーンと大きな音がして私は外に飛び出しました。隣の原田さんの小屋が潰れたのです。主人は招集され奥さんが五人の男の子を育てていました。周囲の小屋から人が集まり、協力して掘り出しましたが、二人の子供は助かりませんでした。

十一月になると中国人のブローカーが、日本人の子供をもらいに、または日本の女性をお嫁さんにもらいに、話をもちかけて来ました。

当時は売買結婚の習慣があり、農村では農耕馬一頭、又はそれに値する金額が基準とされていたとの説もあり、貧しい故に結婚出来なかった農民にとって、生活に打ちひしがれた日本人の女性との結婚は千載一遇のチャンスでした。また日本人の子供は頭が良いとの理由で、欲しがる人も多かったと言われています。

寒さと共に生活が次第に厳しくなると、(せめてこの子だけは生き延びて欲しい)(子供一人手放せば、家族が生き延びられる)という気持ちが起きたとしても責められません。これまでに散々苦労をしてきたのです。中国人の誘いに応じる人がだんだんと出てきました。生きるという事は、哀しくてつらい事でした。

「政子、中国人の所に行ってくれ」

ある日、近所のおじさんが中国人のブローカーを連れて来ました。いつでも外でこそこそ話をしているのを変だとは思っていましたが。「ここに居れば寒さと栄養不足で死んでしまう。病気になっても医者もいないし、薬もない、お金を使い果たしてしまえば死ぬより他はない。君江、お前中国人の所に行ってくれ。来年の春暖かくなったら、お母ちゃんきっと迎えに行くよ。少しの我慢だよ。ある家で女の子を欲しがっているの。老夫婦がとても良い人らしいよ」と思い詰めて妹に言い聞かせる母の表情は今でも忘れません。九歳になった君江には、事の重大さがわかっています。「嫌だ。行かないよ。姉ちゃん達は何故行かないの。嫌だよぉ、嫌だよぉ」と夢中で首を横に振ります。

二日経って、今度は日本語の上手な中国人が来ました。いろいろと話し合いましたがまとまりませんでした。母は困り果てた顔で私に言いました。「政子、お前も一緒に行って呉れないか。お前が一緒なら君江もきっと承知してくれるよ。お前は体も丈夫じゃないし、此処に残るより良いかも知れない。お母さんを助けるつもりで一緒に行っておくれ。来年の春になったら帰っておいで、その頃になれば君江も馴れてくるし・・・・・・。お前と一緒ならあの子も行ってくれると思うの」

私は身体が弱く、子供の頃から病気ばかりしていました。決して行きたくなかったけれども、母を助ける為であれば仕方がありませんでした。あのブローカーが来て、「今度来るときは迎えに来る」と言いました。もう引き返せない所に来てしまったのです。

五日経って、養父とブローカーが乗った馬車が私達姉妹を迎えにきました。母が戸外で話をしていました。お金と、先方の住所を書いたものでも受け取ったのでしょうか。綿入れの服と防寒靴と布団が下ろされ着替えました。馬車に乗って布団に座ると母と妹が見送りに来ましたが、子煩悩な父と弟は、家の中に引っ込んだまま出て来ませんでした。母は妹に「来年温かくなったら、きっとお母ちゃんが・・・・・・」と話しかけましたが、終わりの方は声になりませんでした。

これが私達親子のこの世の別れでした。言葉のわからない他国で、二人のわが子を手放さねばならない母の気持ちは、私にもよくわかります。私は涙の中に遠ざかる母を見つめていました。今度どの様な生活をするのか、どんな運命が待っているのか想像もつきません。走っても走っても広野の中を馬車は一日中走り続け、夜になって中語人の家に泊まりました。暖かいオンドルの上で、布団をかけて寝ていても、家族の事を思うと一晩中まんじりともしませんでした。

尋ねて来た父の死

翌日は馬車で一日中山の中を走り、夕方になって目的地に着きました。「張」という家です。養父母に妹と同じ年齢位の男の子の三人家族。養母は五十を過ぎた優しそうな人で、妹に何かと話しかけますが、私達にはわかりません。これからどうなるのでしょう。一夜明けると私の新しい生活が始まりました。七頭いる豚と鶏の世話、馬小屋の掃除です。私は妹が馴れるまでの付き添いの様な契約ですから使うのが当然というのでしょうか。次々と仕事が与えられ、なかでも石臼で豚の餌を引くのは重労働でした。養母は喘息で、冬になると何も出来ずに、火鉢でじゃがいもを焼いては、おやつがわりに妹に食べさせていました。私はおいしそうに食べる妹を羨ましく思いながらも、大事にされていることに安心するのでした。毎晩暖かいオンドルの上で布団を掛けて寝ると、穴ぐらの小屋で蓆をかけて寝ている家族の事を思い出します。そんな時、頑張ってください、と祈らずには居られませんでした。

ある日養父が「この村に又日本人が来たぞ」と言いました。私は妹とその家を見に行きました。私達の知り合いであった町田さん一家でした。おばさんは顔を見るなり涙ぐんで「政子さん、君江ちゃん、此処にいたの。お父さん達はまだ頑張っているよ。うちのお父さんは死んじゃった。あそこでは男手がないととても生きてはゆけないんだよ」と言いました。二十歳の娘さんは中国人の嫁に行き、おばさんは三人の子供を連れて趙さんの所へ来たのでした。

旧の正月が過ぎて、やがて三月になりました。三月といっても外は零下二十度にもなります。

或る日、突然に父が尋ねてきました。髪の毛も髭もぼうぼうとして、青白い顔は七十過ぎのお爺さんのようでした。私の顔を見るなり涙をぼろぼろこぼし言葉になりませんでした。「お父さんこんな遠くまでよく来たね」「三日がかりで来たよ、お前達に、お前達に会いたくてね」妹は父が約束どおり迎えに来たと思って大喜びでした。「お母さんは何故来ないの」「うん。孝太郎の具合が悪くてなぁ」と説明する父もどこと無く元気がありません。その夜、張家では米のご飯を炊いてくれましたが、あまり食べませんでした。粟を常食としている農家では精一杯の歓待で、それのわからない父では無い筈です。そして日毎に体がむくんできます。私の荒れた手を撫でながら「すまないねぇ。苦労をかけて」と涙ぐむ父。「こんなの平気だよ、それより何で食欲ないの」「何だか食べたくないんだよ」「駄目だよ、食べなきゃ、お粥にしようか」その夜お粥を軽く一杯食べると父は言いました。「俺はもう駄目だ、長くはない。今は日本に帰れる気配はないがやがてそういう時が来る。暖かくなれば何とかなると思うよ。体を大切にし、達者でいれば、いつか日本に帰れる日が来る。政子、君江を頼むよ。お父さんは体が良くなったらハルピンに行ってパン屋で働くよ」はじめははっきりと、終わり頃は半ばもうろうと、夢の様な話をします。父はあの時、きっと白いパンが食べたかったのではないでしょうか。

翌朝から容体が悪くなり、意識がなくなりました。「お父さん、父ちゃん」とすがりつく私達を一瞬目を開けて見ましたが、言葉もなく目を閉じ口からぶくぶくと血の泡が出て来ました。呆然と見守るうちに、虱が体から外に最初の一匹が出てくると、あとは体温の冷えるのを嫌って気味が悪い程出てくるのです。養父が首をふりました。「死了（死んでしま

った)」

10歳の妹の死

そばにいる二人の老人も、すがりつく私の視線に黙って首を振りました。父は息を引き取りました。私は涙で一瞬のうちに父の顔が見えなくなりました。かわいそうな父、日本を離れて僅か十ヶ月、四十七歳で世を去りました。お通夜も、お経も、勿論柩もなく、蓆にくるんで遺体は山の中に捨てました。その時、何で私達がこんな目にあわなければならないのかと激しい怒りに燃えました。

昭和二十年の五月、戦争に負ける事が日本政府にはわからなかったのでしょうか。また、都留の役場の開拓係の黒縁の眼鏡の中年男。満州に行きさえすれば何もかも良くなると失業中の父に毎日毎日たきつけた男。日本へ帰ったら殺してやりたい。父を返せ！父が亡くなったのを母は知らない。不安のうちに何日も何日も父の帰りを待ち侘びたに違いありません。

父の死後二ヶ月程経った或る日、方正県から来た中国人が「日本人はみな日本に帰ったぞ」と知らせて呉れました。(註　誤報。南満州から始まった引揚げ第一陣が二十一年六月頃の日本上陸と聞いている。方正より治安の落ち着いた南方都市への移住が誤り伝えられたものではないか)　それを聞いて私は、母たちは日本へ無事に着いただろうか、帰れたら必ず手紙をくれる、と心待ちにしていましたが、音沙汰はありませんでした。

暖かくなるにつれて「お姉ちゃん、お母ちゃんいつ迎えにくるの」という妹の質問は一段と厳しくなりました。無理もありません。しかし「お母さんは忙しい」「弟が病気」「もう直ぐ来る」考えられるだけの理由を探し出して、私はだまし続けました。かわいそうな事をしたと思います。夏になると私の仕事に畠の草むしりが加わり、更に忙しくなりました。

妹は学校に通うようになりました。読み書きだけの昔の寺子屋の様なものです。そして又冬が来ました。妹は風がもとで高い熱が出て、いく日も下がりません。医者はいないし熱を計ろうにも体温計すらないのです。祈祷師が毎日おまじないを繰り返すだけです。何の病気かもわかりません。高熱のためか歯まで黒くなり「お母ちゃん、おかあちゃん、いつ迎えに来るの？帰りたいよぉ」と熱にうなされて呼びかけます。私はなぐさめる言葉すらなく涙を流すばかりでした。

君江十歳。短い短い生涯・・・・・・。

生きるために隣村へ嫁入り

妹が亡くなってから、養父母が口喧嘩をする様になりました。言葉の細かい意味はわからないまでも雰囲気でわかります。養父は私を何処かに嫁に売れば金になる、と言い、養母は私を手元に置いて一緒に暮らしたい、と言っているのです。私は死んでも中国人と一緒になるのは嫌でした。でも、父は亡くなり母の行方もわからず、頼れる人は誰もいないのです。

翌年、昭和二十年の春。養父の口利きで隣村へ嫁入りしました。現在の夫の所です。生きるためにはそうするしかありませんでした。嫁いだ先は舅、姑、小姑三人、四六時中監視されている様な毎日でした。炊事、洗濯、豚の世話。言葉は思うように通じません。い

じめられ、殴られることもたびたびでした。部落には三人の日本人がいましたが、互いに会う事は禁じられて、たまに会って話をしようものなら、あとで厳しく叱られました。いく度も自殺を考えました。でも死ぬ位なら逃げようと思いました。然し西も東もわかりません。山の中では夜になると狼の不気味な鳴き声がするのです。犬死にはしたくない。「生きていれば誰かに会える、いつかは日本へ帰れる。政子、お前は生き抜け・・・・・・」と言った父の言葉を思い出して、自分を励まして一日一日を過ごしました。そうした苦しい日々は、帰れる日に近づいていくことと信じていました。

その後延寿県という所に移りました。日本人が少し離れた街に二十人程いるらしいとの事で楽しみに機会のくるのを待ちました。

昭和二十七年の旧正月、私は姑の許しをもらって町に行きました。結婚当時は、逃亡を恐れて監視も厳しかったのですが、こちらの諦めもあって、この頃はかなりの自由も許されるようになっていたのです。方正を離れて以来六年ぶりで見た街並みは、それなりに心を浮き立たせるものでありましたが、私は手早く用件を済ますと、本当の目的である日本人探しをしました。

そして内山さんご夫婦にお会いしたのです。心おきなく日本語を使って時間が経つのを忘れる程お話しをしました。「石原さん、今は日本と文通が出来るようになっているんだよ、あなたも手紙を書いてみませんか」　夢のような話しを聞かされました。日本へ手紙を？でも私の親戚はみな東京なので、おそらく空襲で焼き尽くされているかも知れない。でも誰か一人でも生きていれば返事をくれるだろう、いやきっとくれる、と信じて文京区の叔父に手紙を書きました。「皆さんはご無事ですか？父と君江は死にました。母と妹達は無事日本に帰りましたか？私は元気で生きています」中国人と一緒になったとはとても書けませんでした。

日本からの返事

ひと月、ふた月、み月と過ぎても返事は来ませんでした。五ヶ月経って（やっぱり駄目か）と諦めたある日、とうとう返事が来ました。その封筒の宛名を見ただけで一瞬息が止まる様に感動して、あとは涙で字が見えなくなりました。日本からの手紙は私達一家を案じていたのです。方正で別れた妹の昭子からも手紙が来ていました。

方正県から尚志県へ移動中、弟は病気で歩けなくなり、中国人に預けるというより拾ってもらった。その時の病状から生死の程はわからない。尚志県に着いた二日後の夜、母も力尽きて亡くなった。「昭子、もし日本に帰るときが来たら孝太郎を探して連れて帰っておくれ」と言うのが遺言だった。一枚の布団にくるまる様にして寝ていたが朝になったら母は冷たくなっていた。

一人ぼっちになり茫然としていた妹を運よく日本人の医師夫婦が面倒を見てくれ、看護学校にも入れてもらい今は看護婦をしている。お姉ちゃんが無事でいることがわかったら力を合わせて孝太郎を探したい、と書いてありました。

幸せになるのに満州に来たのに、父と母と妹を亡くし弟は行方不明。この世に神がいるなら、何処まで私達を苦しめるつもりですか？もうお止めになって下さい。然し、吾が身の不遇を嘆いてばかりはいられません。方正県から延寿県を通って尚志県に至る国道に沿って町や村が何百あることか、大海に浮かぶ小さな木片を探すようなものかも知れません。

でも私は独りではありません。昭子と力を合わせて孝太郎を探し抜こう、と心に決めました。

ある日の夕方、村外れから馬車の鈴の音が近づいて来ます。誰だろうか？こんな時間に、町からさほど遠くないこの村に馬車で来るなんて。「ここが由さんの家だよ」と客を降ろすと、馬車は引き返して行きました。私が出て行くと、一人の女性が立っていました。どこか見覚えのある顔です。妹の昭子でした。「姉さん！」「昭子！」抱き合うと涙が溢れて言葉になりません。方正のある小屋の前で別れた時は十二歳の少女、今は美しい年頃の娘です。

「いい人にお世話になって良かったね」一晩中話し合った中に、この言葉を何回繰り返したことでしょう。母亡きあと、一人ぼっちの妹を拾って育ててくださった医師夫婦に深い感謝の心を抱きました。と共に、妹が生きていたのだから、弟だって諦めるわけにはいかない、と誓いを新たにするのでした。

高良とみ議員の訪中―残留日本人の帰国へ

昭和二十七年、日本の参議院議員の高良とみ先生が来られ、中国の紅十字を窓口に交渉された末、残留日本人が帰国出来る様になりました。昭和二十七年の中頃から手続きが始まり、弟の消息が分からぬ儘に妹は帰国の申請をしました。私も今までの苦労を考えると一緒に帰りたかったのですが、その頃はすでに長男がいましたし、帰っても中国人と結婚した女、と軽蔑されるのではないかと思い、諦める事にしました。それが一番だと自分に言い聞かせ、自分を励ましながら、帰国は来年の三月に決まりました。

私は中国での正月を妹と共に祝ってあげたくて手紙を出しました。妹は大晦日の夜、一面坡から汽車で尚志の駅に着き、翌朝一番のバスで私のいる村に向かいました。十時間はかかる距離です。正月の元旦となればバスはお客の少ない終点までは行かず、途中で客を降ろすと尚志に引き返してしまいます。目指す村までは二十華里もあり、歩けば半日はかかります。

妹はそりを頼みに行きました。そこは三百戸位の大きな村で、馬車引き等の溜まり場では、正月休みの十人近い人たちがトランプをしていました。加信子までのそりを頼むと「今日は元旦だに、加信子へ何しに行くんだ」と良い返事は来ません。妹は重ねてそりを頼みながら、人群れを見ると半ば習慣的に「この辺に日本人の男の子がいませんか」と聞きました。

「日本人？いるよ。どこの村でも一人や二人はいるさ。あの年（昭和二十一年）、この国道で日本人の子供を拾った人は大勢いるでよ。あんた日本人か。この村にも日本人の女性がいるよ。ここの学校にも男の子が一人いたっけ。とても賢い子だって評判だよ」と話好きらしく答えてくれます。

「何て名前の何歳位の子ですか」子供の名前は劉忠奎（リントンクイ）といい、年恰好は別れた弟に似ています。更に問いかける妹に対して「お前何でそんなに気にしているんだ」と男たちの中の一人が聞いたので、妹はこれまでの事を総て話しました。「もうすぐ日本人の帰国が始まります。弟を探して一緒に帰りたいけれど未だ見つかりません」「そうかそれは気の毒だ。そういえばあの子、どこかあんたに似ている。ここから三里先の村から毎日学校に通っているよ、もし行くなら俺が連れていってやるよ」と雪原の中にぽつんと

浮かぶ小さな村を指さして言いました。

地獄に仏とはこういうことでしょうか。それで三十分程走って着いた村は三十戸程でかなり大きく、対の家では五十を過ぎた老夫婦がいました。妹は「私には弟がいたが、七年前に避難する途中どなたかに預けました。今探していますが見つかりません。お宅に日本人の男の子がいるそうですが会わせてもらえませんか」とたずねました。老婦人の方が「子供は遊びに出ていないよ。あんたのお母さんはどんな人か」と逆に問い返します。当時の母の年恰好を説明すると「それは違うね。あんたの弟じゃないよ」と素気ありません。途方にくれる妹に「誰でもいいじゃないか、会わせてあげなよ」と旦那がとりなす様に言いました。

弟との奇跡的な再会

やがてにぎやかな声と共に近所の子供達と一緒に子供が帰って来ました。この子だよ、と教えられても、お互いに顔を見合わせてもわかりません。すっかり中国人の子供になりきっていたのです。妹が「あなたの名前は」と日本語で聞いても反応がありません。中国語で聞くと、「劉忠奎」と答えました。重ねて「日本語の名前は忘れましたか」と聞くと、「僕の名前は、石原孝太郎」と答えました。養父母に対する気がねもあったのでしょう。日本語を忘れていたのかも知れません。妹は涙をこらえていましたが、弟を抱きしめると声を上げて泣きました。探しても探しても見付からなかった弟に、偶然バスを途中で降ろされた事から会うことができるなんて。弟が、弟が。姉さん、弟が見つかったのよ・・・。

中国の正月はたとえ農村であっても、昼間はいろいろな行事があってにぎやかです。その中にあって、私は約束の時になっても顔を見せない妹を心配のなかに待ち続けました。何かあったのではないかしら。そんな不安も、村外れから響いてくる鈴の音と共に霧のように消えてしまいました。

その中にいた一人の男の子を、私はそり主の子供と思っていました。外は既に暗く、顔はわかりません。妹は私の姑と話しながら家の中に子供を連れて入って来ました。子供はそり主の帽子をかぶり、毛皮のオーバーを着ていましたが、屋内でそれを取りました。その一瞬、私は心臓が止まるのではないかと思いました。弟の孝太郎です。一目でわかりました。「孝太郎、孝太郎、今まで何処にいたの。よく生きていたねぇ」オーバーを脱いだらその服装の粗末な事。でもその様な貧しい人が孝太郎を育ててくれたのです。私は流れる涙を拭きもせず立ちつくしました。一緒に送ってこられた内山さんへの挨拶も忘れて。でも心が落ち着き、話し合うにつれていろいろな事がわかって来ました。

中国の農家では幼い子供のうちから仕事を分担して責任を持たせますが、弟に与えられた仕事の量はその範囲を超えたものでした。劉の家では、同情から弟を拾い育てましたが、結局は農奴として酷使したのです。「でも姉さん、養父が拾ってくれなかったら今の僕はいないんだ。学校に行かせてくれるんだから我慢するよ」と弟は健気に言いました。それにしてもひどい服装です。汚れた上着にボタンが一つしかないのですから。正月は来客が多く、弟が見つかったとなるとお祝いの人も来ますから、それらの人に見られても恥ずかしく無い様に、妹と二人で一晩中弟の着るものを作りました。久し振りに心が和むような安らぎの中に、五日間程過ごして二人は帰りました。

これから弟を日本に帰すための手続きをしなければなりません。国からは「たとえ結婚、

養子縁組などの手続きをしたものであっても、本人が希望するならば無条件で帰すように」との通達が出ていたにしても、実際には難しい問題があります。養父母の劉の家に妹が幾度も足を運び、或る程度のお金を渡して納得してもらいました。

昭和二十八年の四月、日本人石原昭子、石原孝太郎として二人は無事に帰国しました。「姉さんの子供が僕と同じ様な苦労をしてはかわいそうだから、姉さんは出来れば帰らない方が良いと思うよ」と言った孝太郎の言葉を噛みしめながら、複雑な思いで二人を見送りました。

堪えぬいた文革の日々

私の夫は、当時の農村では珍しく教育を受け、国営企業の事務職をしていました。二人が帰国して間もなく、夫の転勤があり伊春市に移りました。人口十万程の都会ですが、日本人は私を含めて四人しかいません。平凡な、そして平和のうちに十三年が過ぎました。

昭和四十一年、中国の文化大革命が始まりました。それは旧満州の残留日本人にとって忘れられない、忌まわしい体験でした。上の方では政治の争いがあったかも知れません。又解放時には功労者として多くの年金を保証された人でも、徒食の生活を送っていえれば目ざわりになるでしょう。何はともあれ、自分達ではやりにくい事を紅衛兵を利用して糾弾したのではないかと思います。

文革は拡大するにつれて、過激になり、旧満州ではそれが残留日本人に、又それに関係のある中国人に向けられました。旧日本帝国主義の手先としてです。日本人の子供を育てていた中国人は慌てて証拠となるような作品を燃やしたり、捨てたりして隠しました。後年、残留孤児調査が難行した一因はここにもあったのです。

私は常に監視されるようになり、夫は、妻が日本人であるとの理由で事務職から現場の労働者に格下げとなりました。長男は「お前の親は日本人だから、高校に入る資格はない」と非難されました。私は校長の処に話し合いに何度も行きました。「彼女は反省どころか党の政策を誹謗している」と逆に叩かれぬ様に一語一語に気を付けて・・・。次女は毎日、学校で「日本人の鬼の子」と虐められて来ました。私が買い物に行けば「日本人の鬼、打倒帝国主義！」と石が飛んで来ます。

つくづく、帰れば良かった、あの時日本へ帰れば良かった、と思いました。でも私達はまだ軽い方で恵まれていました。後年、帰国してからお付き合いさせていただいている残留婦人の方々の中には、文盲の中国人の手紙の代筆を引き受けた為にスパイと疑われ、手酷い扱いを受けた人。戦前日本に留学して、帰国後日本の企業に勤めたが故に、戦後ソ連軍に疑われ、国民党の軍隊に搾られ、人民解放軍に捕まり、そして文革、と今でもつらそうに思い出話をする夫をもつ人。子供や夫が労働改造の名の下に、何ヶ月何ヶ年と強制収容された人等、苦労を重ねた人が多いのです。厳しい冬の様な月日が続き只じっと堪えて過ごしました。

遂に国交回復へ

日本から元田中総理大臣が中国に来られて、昭和四十七年に国交が回復されると、私達に見せる態度がよくなりました。日中友好だ、日本人は友達だ、と政策が変われば、掌を返す様に変わってしまう一面が中国にはあるのです。

昭和四十九年の五月、私は二人の子供を連れて里帰りをしました。二十九年ぶりの日本、昭和二十年五月私達が日本を離れた時、東京は焼野原でした。今は繁栄した平和日本の都。余りの変わり様に呆然と見とれるばかりです。戦時中から戦後にかけたあの苦しみや悲しみに満ちた私の体験は、ひとときの幻だったのでしょうか？いや違います。この掌に、鏡に映る顔の中に、深く刻まれています。その様な私を妹の昭子が、そして今は立派な社会人となって弟の孝太郎が、温かく迎えてくれました。六ヵ月の滞在は夢のように過ぎて私は中国に帰りました。

昭和五十五年、妹から（姉さん、日本に帰ってこないか？）という手紙がきました。前々から文通はしていましたが、妹も帰国して二十五年、生活も安定してくると、旧満州に一人残っている私の事が気掛かりでならなかったのでしょう。然し私は、あまり気が進みませんでした。文革以後、日中国交が回復してからは、雨降って地固まるとでもいいましょうか。生活も安定していますし、言葉のわからない家族を連れてあの目まぐるしいばかりに変貌する日本の社会の中に適応出来るかどうか。むしろ苦労する姿が目に見えています。

家族５人で帰国へ

でも家族の方が積極的でした。見聞きした日本への憧れもありますが、心の奥底には文革の苦しい体験が染みついているのです。あの様な事が絶対無いとは言い切れないのが中国社会です。私も過去の事を思い比べて日本に帰る決心をしました。

私の半生三十六年を過ごした中国よ再見。妹が保証人になって昭和五十六年十一月、家族五人が国費で帰国しました。帰国の手続きに際しては、三互会の和泉先生の親切なご指導を受けました事を今も感謝して居ります。帰国してから九年たちました。子供たちは日本語も上手になり、それぞれに正社員になって働いています。主人も真面目に働いています。私は六十過ぎのおばあちゃん、毎日孫の保育園の送り迎えが仕事です。一番の楽しみは三互会婦人部の皆さんと旅行に行く事です。戦乱の時代を一緒に歩み、戦争の犠牲となり、それぞれに胸の中にドラマを秘めた心のお友達です。草津、北海道、瀬戸大橋、浜名湖、今年の九月にはお伊勢参りの予定です。中国では旅行など夢にも思った事はありません。帰ってきて本当に良かった。

亡き父母も天国の何処かで（政子、帰ってこられてよかったね。私たちの分まで幸せになっておくれ）と喜び、願っていると思います。

山梨県都留市には、都留周辺から参加した開拓団の犠牲者、二百四十四名の霊を祀った慰霊碑が建てられ、毎年十一月三日には慰霊祭が行われます。

私も毎年参加しますが、黒ブチ眼鏡の開拓係の男には一度も会いませんでした。彼には彼の立場があったのでしょう。然しその為に多くの人々が亡くなった事実は拭えません。当時の年齢から考えても、故人となっている事と思いますが、せめて存命中は亡くなった人々に対して心を痛め、冥福を祈ったであろう事を願う次第です。

私がこの一文を書いたのは、私の子供たちとその周辺の人々に、この様な事実があったと言う事を忘れないで欲しいとの願いからです。

この世で一番恐ろしいものは戦争で、多くの善良な、そして弱い人たちが最も犠牲になるという事です。戦争は絶対に反対です。

活躍する会員の写真家、高部心成さん

中国残留孤児・婦人の２世、３世がアイデンティティー（自己の存在証明）を求めて、様々な表現活動を行っている。会員の高部心成さんは、『故郷松花江黒龍江省哈爾濱』という作品集も発表されている。その高部さんが朝日新聞で紹介された。高部さんの記事の左隣は、孤児だった父の軌跡を追求した『あの戦争から遠く離れて』の著者、城戸久枝さんだが、ご本人と連絡がつかず割愛した。朝日の古谷浩一瀋陽支局長が、しばし我々が見落としがちな「中国から見た残留孤児」を書いている（次頁）。また孤児だった井上征男さんが短編小説を寄稿してくれた。東京新聞で井上さんを紹介した記事をプロフィールとして合わせお読みいただきたい。　（下は、朝日新聞 11 月 3 日付け朝刊）

故郷写し、悩み吹っ切れた

カメラマン・高部心成さん(28)

中国残留孤児・婦人の2世、3世、写真・ルポで「自分探し」

ルーツ求め心の旅

まっすぐ前を見据える子ども。毛糸のマフラーと帽子に覆われた顔からは表情はうかがえない。かなたに見えるまばらな樹木まで、凍て付いた土の道が続く。

東京に住むフリーカメラマン高部心成さん(28)が一番好きな作品だ。故郷である中国東北部・黒竜江省の村で撮ったこの写真を見ると「幼いときの自分を見ているような気がする」という。

高部さんは、中国残留婦人を祖母に持ち、中学3年のとき家族で帰国した。故郷の人々や自然をテーマに作品を発表し、若手写真家を対象にしたコニカ・フォトプレミオ（02年）、さがみはら写真新人奨励賞（04年）などを受賞。現在は、永住帰国した中国残留婦人の撮影に取り組んでいる。

自分の作品を見せながら長男の漢ちゃんと話す高部さん＝東京都内の自宅で

敗戦の混乱の中で旧満州に取り残された中国残留孤児や残留婦人の2世、3世の中に、自分のルーツをたどり、写真やルポで表現しようとする人がいる。日本と中国のはざまでアイデンティティーが揺れ動く中で、日本社会への同化ではなくルーツにこだわることによる「自分探し」の試みだ。　（山根祐作）

一家は帰国後、大阪に住んだ。日本語が不十分なため友達がなかなかできなかった。やがて、テレビで繰り返し流れる中国人の集団密入国や犯罪のニュースを見るうち、「中国で生まれたこと」にコンプレックスを持つようになった。「中国人として育ったことを忘れようと、昔の思い出を全部封印してしまおうと努めた」という。

「自分は日本人にも中国人にもなれないのか」と悩み続けた。「芸術なら言葉の壁を超えられる」と、美大を受験したが不合格。写真の専門学校に入学した。

しかし、ロケの授業でどこを歩いても一向に「撮りたい」という気持ちがわかない。「何を撮りたいのか分からないのは、そもそも自分が何者か分かっていないからじゃないか」と思った。「故郷に帰れば何か変わるのでは」。そう感じ、夏休みに帰郷した。

つかまえたカエルをレンズに差し出す少年、土間で質素な食事をする家族、スイカを山積みしたトラクターの夫婦……。知り合いの村人たちの日常にシャッターを切り続けた。「まるで失った自分の記憶をたどるかのようだった。なぜか楽しくて楽しくてしょうがなかった」

持ち帰ったフィルムを現像して講師に見せると、「高部君にしか撮れない写真だね」と言われた。「すてきな村だね」と感想を言った同級生もいた。

「自分は自分でいいんだ」。悩みが吹っ切れた。「中国と日本の魅力を写真で双方に伝えられるのは自分だけだ」とも気付いた。

現在のテーマである残留婦人は、撮影の度に「顔に日中の戦争の歴史が刻まれている」と感じる。「多くの悲劇を生んだ戦争。でも、その戦争がなければ存在しなかった自分」だからこそ、戦争の記憶の記録をしなければ、と考える。

日中両国のはざまで揺れ動いた家族の記憶を子どもにも伝えたいと、3年前に生まれた長男には「漢」と名付けた。

朝日新聞 07 年 10 月 30 日付朝刊

中国から見た残留孤児

「民族の寛容さ」示す歴史

1981年4月、中国共産党機関紙の人民日報に、ある寄稿が掲載された。

中日友好協会顧問の趙安博氏が書いた「戦後、中国に残った日本の孤児のことで思う」。これが、中国主要メディアが初めて日本人残留孤児の問題を解説的に伝えた記事だとされる。

記事はこの年に始まった日本人残留孤児の肉親捜しの訪日調査のことを伝えたうえで、こう結んだ。「私は多くの中日の友人たちが理解してくれると信じている。苦しい戦争の時代に、中国人民が日本の人民に示した深い情けは、中日友好のさらなる発展に極めて意義があるものだ」

それ以来、中国でこの問題は、日中友好の重要さを訴えるものとして繰り返し伝えられてきた。

終戦時、旧満州にいた約155万人の日本人のうち20万人以上が飢えや寒さなどで亡くなった。日本の悲惨な引き揚げの記憶は、中国において残留孤児に対する「民族の寛容さ」を示す歴史と裏表になっている。

「戦後、2808人の日本の子どもが中国に残され、孤児となった。戦争による傷に満ちた中国人が、彼らを死から救った」。今年4月、日本を訪問した温家宝首相は中国国内に生中継された国会での演説でそう語った。

中国黒竜江省ハルビンでの残留孤児関係の連絡組織である「中国ハルビン市日本留華孤児養父母聯誼会」の理事長・陳英潔さん(68)は、姉が残留孤児だった。

帰国喜ぶ姿に複雑な思い

そうした中国当局の姿勢や関係者の思いにもかかわらず、中国人の残留孤児問題に対する関心は決して高くない。中国でこの問題についての報道は活発とは言えず、特に孤児たちが肉親との再会を果たすような場面が中国のテレビに流れることは異例だ。

その理由について、残留孤児問題の著作がある北京郵電大学の王歓教授(社会心理学)は、「中国人に言わせれば、それはプライドを傷つけることでもあるからだ」と説明する。

帰国を果たした残留孤児はその喜びを涙ながらに口にする。日本人にとってはこの感動的な場面だが、多くの中国人の心情は複雑だという。「じゃあ中国は地獄なのか、我々中国人はそんなにあなたたちに悪かったのか、と。当然、民族感情が出て自けてしまう」

少なからぬ孤児たちが帰国後は中国との連絡が疎遠になっていることもある。

「孤児たちの日本での生活は楽ではない。メンツもあるし、連絡をとるのは簡単ではないのだろう。でも、中国では『豊かなところに行って、私らのことは忘れたな』と感じる人がいる」

陳さんはこう強調する。

「当時、なぜ中国人は日本の子どもを養子にしたのか。私も多くの人に聞いた。子どもに罪はない。本当にかわいそうに思ったからだ」

孤独な養父母への同情

中国での残留孤児問題への研究が本格化したのは、90年代後半に入ってからだと言われる。

2005年に遼寧社会科学院歴史研究所の張志坤・研究員と関亜新・副研究員がまとめた「日本の残留孤児の調査研究」(社会科学文献出版社)は、中国で学問的な視点からこの問題をまとめた初の本格的な研究書と評される。中国政府系のシンクタンク中国社会科学院が政府の委託を受けて始めた歴史研究プロジェクトの一環である。

「日本人残留孤児の歴史は世界史の中でもまれなものではないか。これほどの数の戦敗国の子どもを、戦勝国の人民が恨みを忘れて養子にするのは簡単でないことだ」と張さんは語る。

主な研究対象として選んだのは、養父母や帰国せずに中国に残った残留孤児たちだった。中国でこの問題が語られる時、養父母への視線が常にある。

「中国の養父母は必ずしも生活が苦しくて困っているのではない。より大きな問題は、精神的な孤独だ。年老いた彼らは、子どもが頻繁に自分に会いに来てくれることを望んでいる。何らかの支援が必要だ」

この研究書には、日本人から子どもをあずかった際に金銭を渡したとの養父の証言や、「子どもができない」との理由で孤児を引き取ったとの養母の話も出てくる。

中国では、老後を息子や娘の世話になることを幸福とする伝統的な価値観が強い。中国の支援関係者は「中国人は、日本に去った孤児たちのことより、孤児たちが帰国した後の養父母たちの暮らしに同情している」と語る。

広東省の地方紙「南方都市報」は05年3月、「養父母は孤独の中で亡くなっていく」という記事を掲載した。この中で、長春に住む81歳の養母は「私は日本兵に腹をけられ、流産した。これは死ぬまで忘れない。でもね。小さな女の子の孤児を見た時、恨みは頭から消えていた。私が養わなければ、この子は死んでしまうと思った」と話している。90年に日本に帰国した娘は毎年のように「里帰り」してくれるが、一度に滞在できる日数は多くない。養母は「寂しく暮らしている」と記事は伝えた。

温首相は日本での演説で、孤児たちが養父母に感謝していることにも言及し、その言葉を読み上げた。「我々は養父母たちの人道精神と慈愛の心に深く感激し、この恩を永遠に忘れない」

それはまた、今の中国の広範な国民が受け入れることのできる感情を意識したものなのかもしれない。

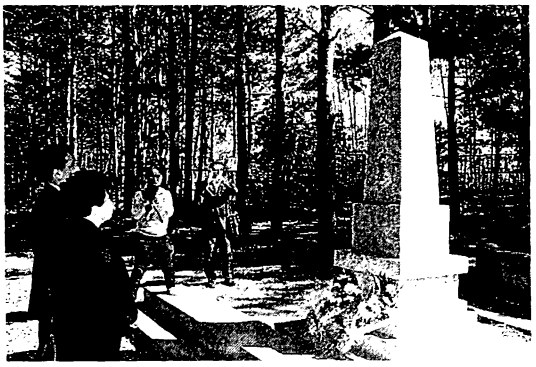
(瀋陽=古谷浩一)

記憶をつくるもの

旧満州の大地に取り残された「残留孤児」をめぐり、日本では国家の責任が問われる。一方、中国の人々の目には異なった像を結んでいる。

残留孤児　終戦時に旧満州(中国東北地方)に住んでいた約155万人の日本人のうち、旧ソ連軍の侵攻などの混乱を受け、親族と死別したり、中国人に引き取られたりして、中国に残された子どもたち。厚生労働省は終戦時におおむね13歳未満だった人を「残留孤児」、13歳以上だった女性を「残留婦人」と規定している。72年の日中国交正常化以降、帰国した残留孤児は約2500人に上る。

帰国後の孤児たちは日本語習得の問題などで経済的な自立が難しく、生活保護を受けた人も多い。国が速やかな帰国と自立への支援を怠ったとして、02年から全国各地で国家賠償請求訴訟が起きた。今年7月、孤児たちと与党との間で、新たな自立支援策を実施することで合意が生まれ、その議員立法成立に向けた協議が続いている。



日本に帰国した残留孤児が中国の養父母への感謝の意を込め、95年に中国ハルビン市郊外の方正県に建てた「中国養父母公墓」。同県は終戦直後、日本の多くの開拓団関係者が亡くなった地として知られる＝古谷写す

日中国交正常化35周年を記念して、9月21日に人民日報が掲載した残留孤児の特集記事。「この恩は山のごとく重く、その情けは海のように深い」と見出しにある

◆「歴史は生きている　東アジアの150年」は、東アジアの近現代史から10のテーマを選び、現在とのつながりや「交流と連鎖」という観点から描きます。日本、中国、韓国、台湾の歴史教科書の比較や、私たちの集団的な「記憶」をつくってきた報道、映画、文芸作品などの解剖も試みます。次回のテーマは「日中戦争」。11月26日付と27日付の朝刊に掲載予定です。

◆これまでの記事はウェブサイトのアサヒ・コムで読むことができます。アサヒ・コムには英語、中国語、韓国語でも掲載しています。ホームページの「ニュース特集」をクリックすると、「歴史は生きている」のコーナーがあります。

韓国の東亜ドットコム(dongA.com)にも、韓国語と中国語で掲載しています。アドレスは、http://www.donga.com/asahi_special/

東京新聞　07年8月15日付　朝刊

祖国を愛しているから

4年の賠償訴訟 矛盾に悩む

記憶 20代記者が受け継ぐ戦争 5

中国残留日本人孤児　井上 征男さん(63)

飛行機の窓から見える美しい日本の国土に、涙がこみ上げた。一九八五年九月八日。肉親捜しの一訪日調査一で、四十年ぶりに祖国に戻った。成田空港では、祖国の発展ぶりを誇らしく眺めた。翌朝、宿泊施設に掲げられた日の丸を見上げて、また泣いた。

■　■

井上征男さん(六三)＝千葉市美浜区＝は四四年六月、五人兄弟の末弟として前橋市で生まれた。生後九カ月で、満蒙(まんもう)開拓団の一員として両親や兄たちと中国・黒竜江省に移住。四五年八月九日、侵攻したソ連軍から逃れる途中、父と三人の兄は命を失った。

生き残ったのは母と七歳年上の次兄、一歳の井上さんだけ。母は二人の息子をそれぞれ別の中国人に預け、先に帰国したという。

十歳のとき養父が亡くなり、養母の趙恵君さんが女手一つで大学まで通わせてくれた。苦しかったのは、六〇年代後半に始まった文化大革命期。一小日本鬼子一（日本人に対する差別語）の養親と分かっただけで、懲役刑を科されたら一とかたくなに口を閉ざした。時代だ。「激しい差別から私を守り抜いてくれた。女神のような人だった一と、井上さんは言う。ただ一回だけ、具体的にどんな差別を受けたのかは一関係者に迷惑がかかるか

「2つの祖国」について宮尾記者に語る井上征男さん＝千葉市美浜区で

中国残留日本人　終戦直後の混乱で旧満州（中国東北部）に残され、中国人の養親に引き取られたおおむね当時13歳未満の人たちが一残留孤児一、中国人男性と結婚するなどして帰国の機会を失った女性は一残留婦人一と呼ばれる。1972年の日中国交正常化後、80年代から帰国が本格化し、これまでに全国で6300人以上（厚生労働省調べ）が永住帰国。不自由な日本語や生活習慣の違いから、日本社会で暮らす上でさまざまな困難に直面するケースが多く、約7割が生活保護を受けている。

10歳のころの井上征男さん。右は養母の趙恵君さん

鎮魂の夏 2007

思いだったが、日本への思いが上回った。帰国から九年後、養母は世を去った。実母は七八年に亡くなっていた。

永住帰国は八八年。四十歳を過ぎていた。養母との別れは断腸の

日本では、一年先に帰国していた次兄を頼り、千葉県内の食品工場に就職。中国人の妻(六〇)とともに夜通し働いた。井上さんが分かる日本語は、ごく簡単な日常会話程度。中国では共産党の幹部養成組織や労働組合などで事務の仕事をしていたが、日本では慣れない肉体労働ばかりだった。

一生活保護を受けたらどんなに楽だろう一。何度もそう考えた。しかし一国に頼るだけではだめ。自分の力で道を切り開きたかった一と土日も休まず仕事に励み、娘二人を大学まで出した。

一祖国で汗を流し、祖国に貢献できたことを誇りに思う一と晴れやかに語る井上さんだが、二〇〇二年十二月、他の永住帰国者らとともに、国を相手に新たな給付金制度や損害賠償などを求める訴訟を起こした。帰国後、厳しい生活を強いられている仲間たちを傍観できなかった。

四年余りの法廷闘争を、一帰りたくて帰ってきた祖国を訴えるという矛盾に悩み続けた一と振り返る。訴訟は今年一月、安倍晋三首相が新たな支援策を約束したことで終結に向かっている。二千人余りの原告の気持ちはそれぞれでしょうが、私は（終結に）賛成している一。その表情は、つらい闘いから解放された安堵（あんど）に満ちていた。

○四年暮れ、井上さんは中国の温家宝首相に手紙を出した。一日本人孤児を育ててくれた養親たちの存在は、中国人が民族として誇っていいことです。中国政府は彼らの人格を認め、安らかな晩年を保証してあげてほしい一。〝第二の祖国〟への、切実な願いだ。

■　■

私の母方の祖父は元海軍士官、父方の祖父は陸軍軍医だった。祖父たちが国のために働いたことを誇りに思うし、日本軍がしたことはすべて悪だとする主張には賛同できない。しかし、中国大陸で自国民保護の任務を放棄し、井上さんのような犠牲者を多数生んだのは歴史の事実。その責任は、問われ続けなければならないと思う。

私たちの祖国は、戦後ずっと残留孤児らの存在を無視し、帰国後も冷淡な仕打ちを続けてきた。だが、井上さんは一愛する祖国一と何度も繰り返した。その熱っぽい口調が、今も脳裏から離れない。

＝おわり

宮尾 幹成（千葉支局）28歳

この連載にご意見をお寄せください。電子メールは shakai@tokyo-np.co.jp　手紙は〒100 8505（住所不要）東京新聞社会部　ファクスは03(3595)6917

≪短編小説≫

赤々と燃える楓の葉

井上 征男

（カット　井上 征男）

私はずっと彼女を探し続けてきた――あの年、10人の小さな弟妹たちを連れて死地を脱し、1年をかけて広大な東北を歩き抜き、千里の道を逃げ切ったこのお姉さんを、である。

錦秋の10月、私の願いはついに叶ったのだ。50年描いてきた夢が叶ったのだ、夕靄が立ち込めた楓林の中で…。

思いもかけぬ約束

リンリン、リンリン、リンリン…

慌しい電話のベルに私は目を覚ました。

「もしもし、どなたですか？」

「井上さんですか？　すみません、お騒がせして」

受話器から聞こえるバリトンの男の声、ましてや流暢でオーソドックスな中国語。

「実は数年前、あなたが『東方タイムズ』で、＜この世での希望＞という一文を発表されたでしょう」

「そうです。あれは大変つらい尋ね人でした」

「あなたはずーっと、あの、当時10人の子供をつれて避難の逃亡をされたお姉さんを探しておられたんですね」

彼はやさしく尋ねた。

「そうです、私は日本と中国で尋ね人の記事を出して、ずっと彼女を探してきました。しかし残念ながら

…」

「そのお姉さんはご健在ですよ。そしてあなたに会いたがっていますよ」

電話の男のバリトンは真剣だった。私はまったくわが耳を疑った。

「もう1度、言ってください！」

私は胸が高鳴り、受話器をしっかりと耳に当てなおした。

「ああ、すみません。自己紹介をするのを忘れてしまって…私は山川俊秀といいます。あなたが長年、探しておられたお姉さんというのは私の母です。数年前、私の娘が新聞であなたの文章を見て持ち帰り、祖母に見てもらったのです。これを読んだ母はすごく感動し、あなたに京都の母の陋屋にお出で願えるかどうか、今日、私にお伺いするように、ということなのですが？」

「それは…」

私はあっけにとられて言った。

「ほんとですか？　信じられない！」

息を呑むマイホーム

こんなことがあるのだろうか。夜中の電話で、思いがけずも50年間中断されていた消息につながるなんて！私はとるものもとりあえず京都へ飛んだ。

車は京都郊外にある、お姉さんの、ヨーロッパ風の白亜の洋館へ。漢白玉のバルコニーで、おっとりとして美しい、優雅な物腰のご婦人、髪が銀髪でなかったら、80を過ぎたご老人とはとても見えない。

＜この方が長年、自分が崇拝し熱い思いを抱き続けたお姉さんだろうか？＞

私は駆け寄って彼女に恭しく挨拶した。

「お姉さんにお目にかかれて大変光栄です」

お姉さんは背筋を伸ばしてうなづくと、標準的な中国語で挨拶した。

「家族全員を代表して私の弟を歓迎しますよ」

応接間に入ると、深い感銘を与える中国の民族音楽「彩雲追月」がゆったりと流れる。私は辺りを見回し、中国にいるように感じた。室内の配置、飾りつけ、色調、ライティング、家具、茶道具、蔵書などがすべて中国のものだ。壁にかけられた中国の伝統画は斎白石、張大千、徐悲鴻といった大先生の手になるものだ！

往時が夢、幻のごとく

夜の宴会のあと、私はついにお姉さんに昔のことを思い出してもらうことになった。

お姉さんは子供たちを回りに坐らせた。そして用意しておいた資料と中国東北地方の地図、何冊かの写真集を取り出した。お姉さんは重苦しい表情で、あの思い出すことさえ耐えられない昔のことを頭に浮かべていた。

「私たちの一家4人は日本政府によって最も早く中国の東北地方へ動員された家族と言えるでしょう。当時、父も母も教師でした。中国語が話せ、私と弟も中国語ができました。父母は教師という身分で、東北の北安で学校を開きました。そして開拓団の子女に教養を教え、中国人とその子供たちにも日本語を教えました。1944年の初め、私と弟も先生になって子供たちに教えていました。

1945年の初めから時局は急転直下、急を告げ、両親は私たちや生徒たちに、地図を見ながら、交通、地形を勉強し東北の都市、鉄道、道路を勉強させました。そして方向、方角の見分け方を学ばせました。そしていつも私たちに5キロほどの石ころを背負わせ、水筒、手袋、磁石などを持たせ、ハイキングをさせました。両親は私と弟が疲労困憊してもまるで長官が兵士に命令するように、厳しく、独断的でした。山に登り、川を渡り、野宿をしました。当時私たちは両親の真意を理解せず、両親のやり方に反発しました。

1945年8月、ソ連が東北地方に進入しました。あの時は、いたるところで人々が殺されました。頭を斬られたり、腹を切り裂かれて吊るされたり、この世はまるで地獄のようになりました。

トーチカの中の人間は！

戦争はすべての人から理性をなくさせてしまう。

ソ連の戦車が学校の塀を突き破った時、英語、にほんご、中国語で書いた「ここは学校です。ここには市民と子供しかいません」と書いた紙を両手で掲げ、ソ連軍が学校に入ることを阻止しようとしました。しかしソ連軍の戦車は父を轢きました。母と弟が声を上げて駆け寄りましたが、弟は撃ち殺されました。ソ連の大きな兵隊が母に飛び掛った時、母は井戸に飛び込んで自殺しました。

この日、私はずっと積み重ねた草の中に隠れ、ただまわりの銃声、喚声、泣き声を聞いているだけでした。夜になって私はやっとそこから抜け出、野原へ逃げました。

鉄道の線路から遠くない潅木の茂みに、日本軍のトーチカが壊されたまま、その残骸が横たわっていました。私はあわてて一つのトーチカにもぐりこみました。トーチカには10人の大人と１４、5人の子供がいました。5つの家庭の家族かと思いました。女性たちはそれぞれ別々の射撃窓から外を監視し、男たちは慌しく一つのトーチカに集まって、いかにしたら逃げ道を見つけ、遠くへ脱出するかを相談していました。

赤ん坊の泣き声がソ連軍の歩哨を驚かしたのか、それとも誰かが持った懐中電灯のライトが、うっかりトーチカを映し出したのか、ソ連軍が動き出し、探照灯、軍用車のライト、松明などが私たちが隠れているトーチカを照らし出しました。ソ連軍は叫びはしたが攻め込んではきませんでした。

私たちは驚いて地面に腹ばいになり、母親たちは子供たちの口を必死にふさぎました。子供たちはみんな涙をじっとこらえさせられ、ある赤ん坊は、そのために窒息死してしました。

お父さん、お母さん、私を殺すの！？

12時頃、ソ連軍が私たちに向かって日本語で叫び、私たちに命じました。「明るくなる前に武器を捨て、無条件降伏しろ！」　ソ連軍は私たちを日本軍と思ったのです。

1分、1秒…緊張の時間が過ぎてゆきました。10人の大人が1箇所に固まり、声を殺し、差し迫った声でひそひそ、言い争っていました。ときどき誰かが、隅にうずくまっている子供たちに、優しく名残を惜しむまなざしを向けていました。

私はこの大人たちの察知できない表情から、ひそかに答えを探していました。どの顔にもこれまで見たことのない、恐ろしい表情が現われていました。私は何かしら不吉な兆候を感じました。私は全身が震えました。この5人の家長はわが手でわが子を殺して集団自殺をしよう、と最後の決心をした！　私の憶測は間違っていない！

私は寂しそうに震え、お互いにしっかりと抱き合い、4 人のお兄ちゃんとお姉ちゃんに抱かれている、3 歳にも満たない幼児と、残りは 5 歳から 8, 9 歳の、女の子 4 人と男の子 6 人のところへ這って行きました。彼らは一夜のうちに、みんな成長し物事を理解し、これから起ころうとしていることがわかっているかのように、小声で私に尋ねるように言いました。

「お姉さん、お父さんたちは私たちを殺そうとしているの？　ほんと？

私はどうにも涙が止まらず、咽びながら言うほかありませんでした。

「お父さん、お母さんを疑っちゃいけませんよ、あなたたちを愛してるんですよ」

子供たちは、わかったような、わからないような顔でうなずくと、だまりこくってしまいました。

この時、どこからか一声、鶏の鳴き声が聞こえ、トーチカの中の人たちはゾクッと身震いしました。お父さんたちは涙をぬぐうと、子供たちのほうに這ってきました。ゆっくり、ゆっくりと。彼らの目の中にキラキラと輝いた、きれいな光は、これまで私が見たこともない、怪しい光でした…。

生と死を分けた夜

「血なまぐさく、野蛮な戦争はもう人間の天性も人間性も、粉々にしてしまいました。子供を異民族の手によって殺させないために、血を分けた父親、母親が自分が生んだわが子を殺そうとしたのです！

どこから勇気がわいたのか自分でもわかりません。私は突然、大人たちの膝元へ飛び込み、子供たちとの間に入りました。私は大人たちに頭を下げて哀願しました。可愛そうなこの小さな命を私に預けてくださいと。危険を乗り越えて彼らをこの虎口から生きて脱出させられるかもしれないと、誓いました…。

私の勇敢さ、私の自信、私のお願い、私の理由、それが最終的に父親たちの気持ちを動かしました。5 人の母親がまず駆け寄ってきて、しっかりと私を抱きしめ、私を愛撫しました。5 人の父親がいっせいに私の前にひざまずき、子供たちの命を私に託しました。そして私を祝福しました。

生後 6 ヶ月から 3 歳までの幼児を除き、残りの子供 10 人が私について死地から逃げ出そうとしていました。それぞれの両親が自分の子供を抱きしめ、頬ずりし、キスしました。骨肉が別れ、体が焼かれ、心が引き裂かれる時間であり、それは悲惨なものでした。

親たちは子供たちに持てるだけのものを持たせようとして、子供たちのポケットに何かを詰め込んだり、何かを縛り付けたり、ぶら下げたり、また弱弱しい懐中電灯のライトの下で、子供たちの衣服や帽子、靴下やハンカチに何かを書いていました…。

出かけなければなりません。ひとりの父親がトーチカの出口まで行くと振り返り、名残惜しそうに、みんなに別れを告げると、トーチカから飛び出し、荒野に向かって狂おしく叫び、わざと地面の枯れ枝や落ち葉が音を立てるように、蹴散らしながら走り去って行きました。

ソ連軍が驚き、彼が走り去った方角へ追って行きました。

このタイミングを逃さず私は興奮している子供たちをつれて、トーチカの一番低いのぞき窓から飛び出し、逆の方角へ――漆黒の潅木へ這っていきました。

空も大地も一つの暗闇。私たちは幸いにも脱出しました。

空が明るくなりました。私たちが山の背後で休みました。その直後、天地にとどろくような爆発音が鳴り響き、鉄筋コンクリートのトーチカと中にいた人たちがいっせいに空に向かって飛び散り、粉々の灰となって天に舞い上がりました。

想いは大東北に

お姉さんはここまで話すと、もうその先を話し続けられなくなりました。お姉さんは合掌し、応接間の中空に下げられたカラー・ライトに目をやり、その場に居合わせた人はみんな黙りこんでいました。低く偲び泣く声が聞こえました。お姉さんは朗らかに手を振ると話題を変えました。

私は子供たちの期待するまなざしに、私の価値と役割がわかり、更にはっきりと私の責任を知りました。私は命に代えてこの子達を守らなければならない、この子達を、生きる道へ連れて行かなければならない。

そこで私たちは手をつなぎ、小さな悲壮なチームを編成し、南へ、南へ、一歩一歩、歩きました。歩くこと1年、歩くこと何千里。薮の海から、松花江のほとりから、遼東半島へ向かって、渤海の浜へ向かって、太陽の昇る方向へ向かって、歩きに歩きました」

お姉さんはこの大東北縦断の旅を回想しながら、目を閉じましたが、隠すすべもなく涙が流れました。あの困難辛苦の歳月、それはどれほど異常な旅だったか、私にはわかります。それは遊びではない、逃亡だったのです。

お姉さんの回想は、少しも手柄話の感じや自慢の気持ち、自分をひけらかす気などはなく、逆にお姉さんは自責の念と後ろめたい気持ちがあふれるような感じで言いました。

「私がどんなにあの子達を無傷で無事、日本へ連れ帰ろうと思っても、それは困難でした。小さな弟や妹たちはまだ小さすぎ、これだけ困難な長旅を無事に連れて帰ることなど不可能でした。飢えと寒さと戦乱が絶えず私たちを脅かしました。病気や疲労で前に進めなくなり、山道をお登れなくなった時、私は彼らを中国人に上げ、彼らに引き取ってもらい、保護してくれるよう頼むほかなかったのです。一人を残すたびに、また生き別れの、断腸の思いをしなければなりませんでした。しかしその場ではその選択しかなかった。そうするよりほかになかったのです」

お姉さんは恨みを込めながら一気に話しました。まるで小さな弟や妹たちに許しを請うように。目にはまた涙があふれていました。

「あの子達を引き取って育ててくれた中国人は善良で、慈悲深いと思いますし、彼らに感謝し、彼らを信じています。私を含めて、あの苦難の中で、多くの中国人に助けてもらわなかったら、私の今日はありません。私はかつて中国の恩恵を受けましたし、数千人の孤児たちもみんな中国の恩恵を受けました。日本が中国に多くの恩恵を受けたように…。

恨みは許すことができます。そして恩は忘れることも背くこともできません！」

お姉さんの声は、ひとことひとこと、胸に響いた。みんな彼女のおおらかな気持ちに感動しました。お姉さんは家族を指さし、笑いながら私に説明しました。

「あなたはたぶん、私たちの家族構成に疑問を感じたかもしれませんね。でももう、おわかりでしょう。彼らは…」

この時、お姉さんの子供、嫁、娘、婿、孫、孫の嫁、孫娘、その夫、
それに外孫夫婦、外孫娘夫婦が全員、恭しく立ち上がり、老人の話を聞いていました。

「彼らはみんな、半分中国人、半分日本人ですが、私は彼らと、世代を超えた愛の契約に署名したのです。私の子孫の世代の誰もが、日中二大民族によって締結された婚姻によって結ばれる、という契約です。――これは私が命を助けてくれた中国の恩に応えたいという、私の宿願です」

私の敬意をどうぞ…

私は羨望と尊敬の念でいっぱいになり、思わず拍手をしました！

それでは彼女が助けた、あの10人の小さな弟や妹たちは？　彼らはどれほど、彼らの命を救ってくれた恩人に会いたいと望んだことでしょう？　私は胸の中の疑問をお姉さんに、ありのまま話しました。

お姉さんはちょっと微笑むと、茶机からアルバムを1冊取り出し、その中の数枚を広げ、重々しく言いました。

「私はともに苦労した弟妹たちをどれほど懐かしく思い続けたことでしょう。私はずーっとかれらのために敬虔なお祈りを捧げてきました。幸いにして彼らが無事でいるなら、私のことを忘れないだろうと信じています。正直に言って彼らに感謝してもらおうとか、恩返しをしてもらおうとかは思いません。彼らがいまもこの世に生きていてくれたら、私はそれで満足です。

今年、あなたたちは勇敢にも＜戦争反対＞のスローガンを発しました。私はこれに感動し、喝采を送りました。孤児たちがもう成熟し、強靭になりました！　あなたたちが叫ぶスローガンは日本を揺るがし、アジアに伝わりました。これは時代の最大の響きです！　だからお姉さんはあなたに来てもらい、あなたたちへの支持と熱愛を伝えたかったのです。あなたたちの正義の壮挙に感服しています」

お姉さんは気持ちが昂ぶり、私のそばまで来ると両手を指し伸ばし、つづけて言いました。

「私の敬意と願いを受け取ってください！」

美しいお姉さんは残留孤児訴訟の署名を私に渡しました。

私はお姉さんと一家の厚意にお礼を述べました。お姉さんは手で自分の体の上から下まで指し示しながら、ユーモアたっぷりに言いました。

「遠慮は無用よ、忘れないで！　私の半分は中国だってことを」

彼女はまた、即座に1枚の写真を取り上げました。それは中国残留孤児原告団が東京都内で行った請願デモの写真でした。お姉さんはデモの隊伍の中の孤児たちを指さし、嬉しそうに褒め称えました。

「あの時の弟たち、妹たちが彼かもしれない、彼女かもしれない！　彼らがきっとこの行列の中にいる、と信じます。それを私は誇りに思います。私は彼らに会えたのです。彼らに感謝します！」

私の忘れられない旅は終わりました。万感の思いを込めてお姉さんぬい別れを告げました。お姉さんは2階のバルコニーでしきりに手を振っていました。遠くまで来て振り返ると、お姉さんはまだ秋風の中に立ち尽くしていました。夕陽が沈みかけ、霞があたりに満ち、近くの林や遠くの山々の楓の葉が、赤々と照り映え、濃淡さまざまな紅がたおやかにたなびいていました。

お姉さんが楓の中に立ち、紅葉がお姉さんの美しい姿を更に際立たせていました。ああ、お姉さん、あなたこそ真紅に燃えた楓の葉です！

永遠に絢爛と、

永遠にきらびやかな…

（中国帰国者、日本語訳　奥村正雄）

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～　　第３回

大類 善啓

≪前回までの粗筋≫

遼寧省の貧しい村で 1926 年（昭和元年）に生まれた韓慶愈は、1943 年「満州国政府」から派遣され、茨城県の大田中学に留学した。しかし戦局は悪化、韓にも帰国命令が下った。新潟から帰国直前、広島への原爆投下、帰国船上ではソ連参戦と日本の敗戦を知らされた。出港した船は中国へ行かず、迂回して敦賀に入港。予想もしなかった日本に舞い戻ってきた。やっと日本から解放されたと思ったが、蒋介石の国民党代表団からは、韓たち留学生は「祖国を裏切った漢奸」とみなされ国民党に失望。帰国できずにいた韓は、新聞記者の見習いをしながら東工大に進学した。新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促した。韓も 1953 年の第１回の帰国船に学生代表として中国に行き、３回目あたりの帰国船で帰るつもりだった。ところが天津で廖承志に面会したら、「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」という。新中国を背負う大幹部からの直々の要望である。帰国して祖国に貢献しようと思っていた韓は、ここで気持ちを切り換え、日本に戻り、さっそく新たな活動を始めるのだった。

23　新聞発行の準備

日本に戻った後、韓は廖承志が望んだ新聞をどのように発行すべきか考えた。そこで、かつて国際新聞の編集長だった鄭孝舜に新聞刊行の仕事を期待した。鄭の方が新聞では実績がある。なんとかやってもらえないだろうかと頼み説得したところ、鄭は断ってきた。夫人がすでに第１回目の帰国船で子供を一人連れて中国に帰国していて、鄭は残務整理で残っていてすぐ帰国しなければならないという。夫人は日本生まれの日本育ちの華僑である。中国語はまったくわからない。言葉も不自由な中国での生活は心細い。なんとか早く帰ってきてくれという手紙が頻繁に鄭には来ているのだ。鄭は、韓の気持ちはわかるが、俺は申し訳ない、中国に帰らざるを得ない。中国の国内でなんでもするから、韓がやれという。

頑張り屋の韓である。よし、それなら意地でも華僑向けの新聞を発行してみせようと思った。この新聞を刊行することで一人前にならなければいけない、という気持ちだった。韓は、留学生を組織した経験もあり、組織作りには経験があった。

廖承志の指示があったということはみんなには伏せていた。当時は廖承志がどういう人物であるか知る人は少なかったこともある。

廖は当時、僑務委員会という華僑関係の組織で副主任を務めていた。父親は廖仲愷、孫文の信頼も厚かった国民党左派の指導者だったが、保守派に睨まれ広州で暗殺された。母

親は何香凝、彼女も国民党左派であり抗日運動のリーダーでもあった。その息子が廖承志である。廖承志は、いわば革命中国のエリートだった。その後は、知日派NO1とし知られるようになったが、当時は知る人ぞ知るという人物で誰もが知っているわけではなかった。

韓は、台湾、福建、東北各省の華僑たちの有力者や先輩たちに、「我々の新聞が必要である」と呼びかけると、次第に華僑たちが応援しようと言ってくれた。そのため、新聞発行の母体になる理事会を作り、最初の資金は華僑たちが出した。運転資金は応援してくれる中華料理屋や金融組合、貿易会社が出稿する広告や寄付、購読料だった。名目上の編集兼発行人は林慶英、福建華僑の２代目であり、華僑連合会の元会長である。インテリでもあり貿易の仕事をやり、韓のことを可愛がってくれていた。東銀座と世田谷に２軒の家を持つ資産家で信望もある大物華僑である。

24　美津と結婚

新聞の創刊の話の前に、人生の重大事である韓の結婚についてここで触れておこう。

大阪時代、韓は在日華僑などに中国語教室で教えていたが、そこに後に妻になる伊藤美津が聴講生としていた。美津は、日本文学を専攻する学生だった。日本語のルーツを探求するには中国語を知らなければいけないというのが、美津が中国語を勉強し始めた動機だった。関西学院で聴講するように推薦してくれた鄭孝舜と美津の父親は、友人関係でもあった。二人の趣味は同じように切手収集だった。

韓は、小柄で可愛らしく才気を感じさせる美津に惹かれた。大学を卒業した美津は、出版社に勤め始めた。韓に中国語で手紙を書いてきたこともあった。その中には韓のことを好ましいと韓に思わせるような表現もあった。鄭にそのことを言うと、鄭は彼女の実家を訪ねようという。美津の父が亡くなった後だった。鄭と美津の家を訪ねた時。たまたま彼女は不在だった。そうしたらすぐに彼女が国際新聞に韓を訪ねてきた。二人は急速に親しくなり燃え上がり、次第に結婚を決意するようになった。

韓は美津の家に行き、母に「お嬢さんをもらいたい」と申し出た。いずれは、美津を連れて中国に帰国するとも話をした。美津の母親は、「嫁にした娘を連れてどこへ行こうが自由だ、中国に帰ることに異存はない、当然のことでしょう」とこの結婚を祝ってくれた。その時韓は、「いずれお母さんを中国にご案内します」と約束した。その約束は後年、1980年に実現させた。母は70歳を越えていたが、１ヶ月ほどかけて中国を案内した。韓は今でも母親にその約束を果たしたことを密かに誇りに思っている。

中国にいる父に結婚することを手紙で伝えると、父はあっさりと「お前自身の人生だから異論はない」と言ってきた。1951年３月24日、二人は結婚した。韓も美津も共に26歳だった。結婚式は後楽園にある涵徳亭で挙げた。誓いの言葉を述べ、結婚証明書に判子をつき、指輪を交換した。披露宴は会費制で、文字通りの手作りだった。友人たちが簡単な中国風の前菜を作ってくれ、華僑仲間や友人たちがお祝いに集まってくれた。

美津はすぐに中国籍に入った。韓は美津を中国に連れていくには、その方が都合いいと思ったことと、日本籍でいると中国で差別されるかもしれないと危惧したことも一因だっ

た。当時はまだ東京に新中国の代表機関はない。日本もまだアメリカの占領時代である。大陸を支持しているといっても1951年の時は、ことさら国民党と対立しているという状況でもなかった。中国籍を取るためには日本籍を抜かなければいけない。そのため国民党の代表機関に結婚登録を申請し結婚証明書をもらって「中華民国」の籍に美津は入った。美津も中国籍になるのにまるで抵抗もなかった。いずれ中国に行き、そこに骨を埋める気持ちだった。

1953年には娘が生まれ、56年には息子が生まれた。子供と韓のドラマはいずれまた詳しく紹介しよう。

25　『大地報』の創刊

新聞発行の準備は整った。新聞の名前は『大地報』と名づけた。中国語の新聞である。「反中国」という当時の日本の状況の中、１９５４（昭和２９）年３月１日、『大地報』は創刊された。韓は、この大地報に以後１５年間、編集、発行、広告の営業と全力投球をするのだった。

題字は、字もうまい林慶英が書いた。実務はほとんど韓が一人でやらざるを得なかった。記者、カメラマン、編集、それに広告の営業もやらなければいけない。すでに結婚していた妻にも手伝ってもらった。

タブロイド版の記念すべき『大地報』の創刊号を見ると、右上段に林慶英が創刊の辞を書いている。そこで林は、大地報の刊行の第一の目的は、華僑たちの大同団結にある。第二は、人類の平和を擁護すること。第三は、祖国の発揚にあり、第四に中日両民族の友好を強化する。第五に、華僑は相互に助け合い、福利を図っていこうと謳っている。

林の言葉の左側には、「大地風光」と題して、万里長城の写真があり、その説明が掲載されている。下段には祝創刊ということで、各地の華僑総会や金融組合、中華料理屋や貿易商社など華僑関係の名刺広告が並んでいる。

２頁には上海の工業生産の近況、３頁には日本赤十字社、日中友好協会、日中平和連絡会の 3 つの団体が、帰国華僑への援助問題や、抗戦烈士の英霊の送還、中国紅十字代表団の訪日について協議し会談した報道記事、横浜中華街の紹介、北京料理屋の「萬壽山」の写真入り記事などが掲載されている。４頁は、京劇の名優・梅蘭芳の紹介である。

2000部刷ったが、夜なべしながら宛名書きをした。すべては手書きだった。帯封は後楽寮で行った。購読料は1部10円である。

新聞は月刊から旬刊、そして週刊と年毎に部数を伸ばし、最盛期には1万部は発行した。それ以降も、内容は第一に祖国中国の紹介である。社会主義の中国で起きていることを第一義に紹介するように努めた。第二が在日華僑の動きだ。第三が日中友好運動の紹介。第四が愛国・団結を訴える。とりわけ台湾解放に関する記事である。

新中国の紹介は、亜細亜通信社に頼った。日本の植民地だった台湾と東北出身の華僑が作り、中国大陸の記事を配信していた。韓が書くのは、華僑を含めた日本の記事である。また台湾に関する記事も書いていた。往時を思い出し、「台湾の人民は苦しんでいるとかね」

と韓は言い、苦笑した。

韓は帰国すると公言していたので、華僑の仲間からは、「お前は帰ると言ったじゃないか。二番船で帰るとか、秋までに帰国すると言っていたのに、おかしいじゃないか」という声が耳に入ってきた。友人たちには、祖国のために俺は日本に残るのだと話して誤解を解くように努力した。

大地報社の２代目の社長には「維新号」（中華料理屋）の社長になってもらった。鄭勇昌だ。社会的に地位もある人だった。大地報社は当初は任意法人だったが、10 年後には株式会社にした。韓は常務になったが、一貫して黒子である。大地報のバックナンバーを見ても、韓の名前はどこにも出てこない。販売や営業関係も入れると、多い時には５人～６人ぐらいの所帯になった。

新聞発行で一番苦労したのは活字だった。当初は繁体字しかなく、その字も日本の戦後の字とは違っている。中国が簡体字を正式に採用するよう公布したのは 1964 年のことである。印刷所の植字工は中国語ばかりで嫌がってしまう。中国語に理解ある人なら、わからない漢字が出てきても文脈を見て判断できるが、中国語がわからない日本人だとそういうわけにもいかず、印刷面では苦労が絶えなかった。それならと自分たちの手で写植機械を入れて暗室を作り製版にし、それをフィルムにしてオフセット印刷で新聞を作っていった。

26　気になった帰国華僑の様子

さて日本共産党に参加した韓はその後、どのような活動をしていたのだろう。韓は、党の民族対策委員会に関わっていたが、外国人ということで、愛国運動に全力投球するという活動だった。愛国といっても、韓の場合、祖国中国に対する愛国運動である。同じ細胞には４、５人の学生がいた。東工大の学生もいた。みんな華僑だった。華僑活動といっても、韓たちには日本での政治的な権利はない。主な活動は、国民党の不正に対する反対闘争である。

韓に、日本共産党の極秘的な活動をどこまで知っているか聞いてみた。例えば徳田球一のことである。しかし期待したような回答は、韓からは得られなかった。レッドパージの時、「中国へ渡ったということは薄々感づいていたが本当のことは知らない。僕なんか下っ端だよ。北京で客死したというのも、後で知ったことだ。伊藤律のことも知る由もない。何も知らされていない」と韓は語る。実際、韓の言う通りだったろう。

「いろいろ闇の密航ルートは当然ながらあったろうが、そんなことは聞かない方がいいということにしていた。自分の身の安全もそうだが、もし捕まって拷問されたら、喋って人に迷惑をかける恐れがある。党の先輩からも、自分たちの活動以外のことは知らない方がいい、と言われていた」。そう韓は言った。「党のマニュアルにもそう書いてある」と韓は語るのだった。

すでに前回、中国共産党と日本共産党の両党合意の下で、在日華僑は日本共産党から離脱するよう指令があったことは書いた。事実、１９５３年１１月１日から５日まで、北京懐仁堂で、新中国になって最大規模の僑務拡大会議が開催され、その会議が終了後、日本

華僑団一行２５名に向かって、廖承志は、大要次のように語っている。
「日本の華僑は団結して自分たちの力で華僑の問題を解決しなければいけない。留日華僑の大同団結には例外はただ一つだけだ。例外とは董顕光（蒋介石政府の駐日大使）のような漢奸、特務のことである。これを除いたすべての人たちは皆団結の対象となるべきである。４万人の華僑の中、３９、９９９人が皆祖国を愛護し、団結するならば、蒋一味は命からがら逃げ出さねばならないだろう。また、祖国では皆さんは主人であるが、日本に帰ったら客人である。祖国のやり方をそのまま日本で行うことは客人の身分で主人に干渉することになりかねない」（P301、華僑運動史）

華僑の帰国は１９５９年まで、６年間で４千数百人になっただろう。新中国の建設という崇高な気持ちをもって帰国した華僑だったが、少なからぬ華僑は、中国人の猜疑心も手伝って被害を蒙った。日本から帰国した華僑の中には、一流の建築士だった人など、多くはインテリだった。しかし、中国共産党には農民出身者が多く、インテリに対する不信感が強かった。とりわけ外国に留学した華僑には不信の念をもっていた。毛沢東自身、インテリに対する不信が強かった。

確かに貧乏学生もいたが、帰国に当たって、経営していた料理屋や薬局をたたみ、日本での一切の生活を捨てて帰国した人も多かった。そうして帰国した華僑の中には、「どうして豊かな日本から帰国したのか」と言われた人もいる。特に台湾出身者には厳しかった。中には「スパイ」とみなされた人もいた。とりわけ文化大革命の時代はひどかった。

１９７９年以降の「開放経済体制」以降は、逆に台湾出身者が重視されるという皮肉な状況も生まれた。しかし、帰国した人たちが冷遇されているとは韓も当初はわからなかったという。１９７８年までは、中国もいわば外に対しては堅く外部の人たちには閉ざされていたのだ。

27　進展する日中関係　「李徳全旋風」起る

日中関係は徐々に進展していった。1952年、高良とみ、帆足計、宮腰喜助の３人の国会議員が訪中した。モスクワでの国際経済会議に高良ら３人が出席した際、会議に参加していた中国国際貿易促進委員会主席の南漢宸と会談、中国側の招待を受け、戦後初の日本人として中国入りを果たしたのだ。朝鮮戦争で中断していたなか、第一次日中民間貿易協定に調印して日中貿易再開の先駆けになった訪中だった。

帆足、宮腰、高良の３人は、７月空路帰国し、いずれも凱旋将軍のように迎えられ、歓迎報告会が各地で開催された。名古屋の大須球場での歓迎報告会には４万人の人々が詰め掛けた。人々は、初めて聞く新中国の話にすこぶる関心を寄せた。

その前年、日中貿易促進会が結成されていた。戦争中、三菱商事のインドネシア所長だった鈴木一雄が専務理事を務め、中心的な役割を担っていた。韓は紹介者もあって鈴木の中国語関係の秘書のようなことをするようになった。鈴木の中国への手紙は全部、韓が翻訳していた。翻訳料というアルバイト代が入り、大地報社から給料をもらわなくてもやっていけるようになった。高良たちの中国への連絡の中心人物が鈴木だった。その後国貿促

は54年に成立。村田省蔵が会長に就任した。

その54年、新中国になって最初の代表団、中国紅十字会代表団が来日した。国務院衛生部長（厚生大臣）、中国紅十字会会長である李徳全が団長、廖承志が副団長とする10人の代表団である。

10月30日から二週間にわたって、東京、名古屋、京都、大阪、神戸などの各都市を訪問した。韓は大地報の記者として随行することになった。当時この訪中団は、「李徳全旋風」とか「李徳全ブーム」と呼ばれるほど、各地で熱狂的に歓迎された。

韓は今でも、京都から大阪までの1時間、50キロに及ぶ国道を通るその両側から、絶え間なく赤十字の旗が振られた光景を忘れなることができないでいる。「本当に感動的だった。中国の代表団も感動しただろう。その時、日中関係は深い人間関係で結ばれていると実感した。反中国政策の中で、やっと解き放たれたエネルギーが爆発したという感じだった」と、今でも感激を新たにするのだった。実際、国道の両側を埋め尽くした人々の姿は、今でも当時を知る人にとって語り草になっているほどである。

28　廖承志との再会

廖はその時、華僑たちの歓迎会で、華僑の愛国団結運動は、華僑だけでやり、外国の風俗、習慣になじみ、その国の法律をよく守ることなどを話した。それは「日本の政治、内政には関わるな」ということである。

各地の華僑たちは、李徳全や廖承志らの長時間にわたる挨拶を、耳をそばだてて聞き入った。李徳全を代表とするその団には、後に駐日大使館の参事官になり中日友好協会副会長になる肖向前や王効賢、駐日記者として日中関係の発展に尽くした呉学文、駐日大使になった楊振亜など、後の対日関係業務を背負うそうそうたるメンバーが含まれていた。

廖は57年にも来日した。大阪では新大阪ホテルに泊まった。その時、こんなことがあった。当時、中国からの代表団については、右翼や台湾の特務たちの活動もあり、日本の警察の警戒も厳しく、不穏な動きを心配して、ホテルの外に出て自由に歩けるような時代ではなかった。そのホテルの一室で、韓は廖に「何をしたいか」と尋ねたことがあった。するとその時、東京生まれの廖は「俺は寿司を食いてぇ」とべらんめえ口調で言った。大阪は知らない場所ではない。韓はすばやくホテルを抜け出し、一走りして寿司を買ってきたことがあった。このエピソードを韓は「廖さんはとても人間的だよ」と述懐するのだった。

韓は廖に大地報のことは詳しく語らず、廖もあえて聞かなかった。それというのも、電報や代表団が来るたびに、廖の指示が韓には伝わっており、改めて大地報について話し合うこともないほど、大地報のことを、廖は十分に知り尽くしていたのだった。また韓に対する信頼感も篤かった。後述するが、中国共産党と日本共産党が決裂する最後の日本での会談の時、駐在事務所に優れた日本語巧者がいたにも関わらず、韓は廖から「何をおいてもこの会談の通訳をしろ」といわれるほど信頼されていたのだった。

29　京劇の名優、梅蘭芳来日

1955年以降、中国から日本を訪れる初の貿易代表団に、韓は常に通訳として随行することになった。人民日報や新華社、北京放送の記者たちと随行を共にして親交も深めていった。

市川猿之助が訪中して中国公演をしたのも1955年である。日中友好協会が中国人民対外文化協会と協議し、1955年10月、日本の伝統芸術を代表して送り出したのが、猿之助一座だった。猿之助たちは1ヶ月にわたって、北京、天津、広東を訪問し公演した。韓はこの時はほとんど関わりをもたなかった。

しかしその翌年、お返しに来日した梅蘭芳を団長とする中国京劇団の時は大忙しだった。日中友好協会と朝日新聞が共同して招いた梅蘭芳一行は、43名の俳優のほか、楽隊15名、舞台工作員10名、随員、通訳、カメラマンなど13名、総勢80人を越える万全の態勢を整えた大所帯の来日だった。北京第2外国語学院の蘇琦・副学長が梅蘭芳の専属通訳として来ていたが韓は、東京、大阪、京都、名古屋、福岡での団の全公演にずっと通訳として随行した。

梅蘭芳は、京劇俳優として日本人にもその名は親しまれていた。名女形として日本の歌舞伎俳優からも人気があった名優だった。日本人にもその名声は轟いているといっても、時代が時代である。東西冷戦が真っ盛りの中、「共産中国」に対する右翼のアレルギーは想像以上に強かった。その上、一般公演をするというので、警戒は十分にする必要があった。日本の右翼はもとより、台湾に巣くう国民党の特務たちの妨害も警戒しなければいけない。

開演前に会場に入って、不審物がないか調べることも仕事のうちだった。東京のサンケイホールでは、中国を誹謗するようなビラがまかれた。また国民党は飛行機をチャーターして空から、「梅蘭芳は共産党の手先だ」といったビラをまいた。華僑たちは、「愛国華僑」という腕章を巻いて防衛した。日中友好協会の日本人の会員たちも韓たちを応援し、梅蘭芳一行の公演が成功裡に終わるのに一役買った。

当時、60歳を超えたばかりの梅蘭芳だが、女型で『覇王別姫』や『楊貴妃』を演じ、20歳位の役を見事にこなし、華僑だけでなく日本のファンをも唸らせた。韓も梅蘭芳が演じる美人役を目の当たりに見て、さすが名優だと思った。

長年、歌舞伎座で舞台工作を務める道具係りも、歌舞伎の立ち回りとは問題にならない京劇の立ち回りに目を見張った。チケットは開幕前から飛ぶように売れ、東京華僑総会で扱った千五百枚の切符はたちまち無くなり、華僑たちも、プレイガイドで買い求める始末だった。香港、マカオはもとより、人目を避けて台湾関係者も見にきていた。あまり知られていない事実だが、この時アメリカやハワイの華僑たちも梅蘭芳の舞台を一目見ようと来日していた。

（次回続く）

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの
――「方正友好交流の会」へのお誘い――

中国ハルピン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されているのをご存知でしょうか。1945年の敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が、この方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見たある残留婦人が骨を拾い集めました。そして力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体ともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されたのです。多くの日本人開拓団員たちが犠牲となった旧満洲で建立されている公墓は、この方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の進撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も１９８４年に建立され、この方正公墓の隣にあります）

この公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。「方正友好交流の会」は、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、そして維持管理の面でも日本が協力して活動していこうと設立しました。この日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てることができればと活動を続けています。

個人会員　一口　１,０００円　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　（社）日中科学技術文化センター内

電話　03－3295－0411　FAX 03－3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会

ホームページ・アドレス　http://www.houmasa.com/

ありがとうございました

今年、会報４号発行（07 年５月 25 日）後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意に代えます。ありがとうございました。（敬称略、受付けた順に記載しました。０７年１２月７日現在です）

水井榮　久保和男　是洞三栄子　石原政子　吉川雄作　清水えい子　寺沢秀文　萩原武太郎　魚崎宏　石田和久　阿部恵一　栗原貞子　新田徃六　菅原三太郎　中謙吾　大崎やま子　穂苅甲子男　樗沢仁　竹田絢子　鈴木敏夫　栗原彬　中島紀子　渡辺亮介　稲川清　大草正一　山内良子　今村隆一　杉田春恵　森田恒雄　遠藤勇　菅原康子　松岡寿代　樟康　平方明男　長谷部照夫　高橋健男　野田尚道　木村孝　斉藤正　岩噌弘三　瀧亀久男　村杉正洋　富永定左栄門　柴田ケイ子　新谷陽子　竹中一雄　木村直美　小畑正子　四街道市日中友好協会　佐藤ヒデ　永原今朝男　福島県拓友連絡協議会　西沢昭裕　山田陽子　栗林稔　小林忠作　生田和美　飯白栄助　NPO 法人二つの観音様を考える会　阿久津国秀　石井敏夫　飯島尚　丸野公平　山本勇造　天野博之

≪書籍のご案内≫

方正友好交流の会が編集した２冊の本と会員の関係著書をご紹介します。

＊　『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』　定価 1500 円

この本には、日本人公墓の建立の苅軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されています。

＊　『天を恨み　地を呪いました　－中国方正の日本人公墓を守った人々－』

奥村正雄　編著　定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っています。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話　043－272－9995　FAX　043－272－0214

＊　『二つの祖国　ある中国残留孤児の証言』　　北澤博史　著　定価 1500 円（税別）

著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様子や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を醸し出しています。直接下記の北澤さんに申し込んでください。

〒250－0001　神奈川県小田原市扇町１－21－10　電話 0465－35－2531

＊　『赤い夕陽の満州にて　「昭和」への旅』　　高橋健男　著　定価 3400 円（税別）

著者は 1946 年、新潟県見附市生まれ。長年中学の教員として過ごし、校長を経て定年退職。近年アジアに目を向け、歴史や文化を研究。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識の下、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著です。本書をご希望の方は直接、刊行先の新風社販売部に申し込んでください。電話 03-3746-4648 FAX 03-5414-3494 です。

≪編集後記≫

「三号雑誌」という言葉がある。同人雑誌などを創刊したはいいが長続きせず、３号くらいで廃刊するという意味である。それだけは避けたい。なんとしても３号で終わりにはしない、というのが編集子の意気込み！であった。当初の予定より発行は１ヶ月ほど遅れたが、今号は５号目であり、最長の頁数になった。

我々のささやかな活動が、羽田澄子映画監督や南野知恵子、伊藤忠彦両議員の方正訪問につながり、また各マスメディアの報道も活動の大きな励ましになった。とりわけ、その報道記事によって生まれた新たな人々との出会いは大きな感激であり喜びである。その一人である齋藤實さんについては 10 頁でも少し触れたが、方正で孤児になりながら、辛うじて帰国された方である。故郷を出て進学のため上京され、その後の職場では敢えて方正のことも触れずに来られた。今職を退かれ、方正での体験を綴られている。

残留孤児だった井上征男さんの創作を今回収録したのも、戦争体験や引揚げ体験者が本当に少なくなりつつある現在、少しでも貴重な体験を伝えていきたいという思いからである。

残留孤児・婦人の２世、３世の表現活動は、口幅ったい言い方をするなら、日本の文化を豊かにすることは間違いないだろう。新人作家の登竜門である「文学界」の今年度下半期の新人賞は、在日の中国人女性が受賞した。多くの著名作家を生み出した「文学界」で日本人以外の初の受賞者である。

多くは言葉の問題で、残留孤児・婦人の２世、３世が辛い思いをする。だからこそ、どうしても自己表現を通して新しい世界を切り開いていきたいという思いがあるはずだ。そういう表現の場として、ぜひこの会報を活用していただければと思う。

会員はもちろん、会員以外の方々もぜひ会報に原稿をお寄せいただき、更に充実させていきたいと思っている。なお HP も開設した。http://www.houmasa.com/ ご笑覧いただきご意見をいただきたい。　　（大類）

《表紙写真撮影・大類善啓》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第５号）　　2007 年 12 月 20 日発行
発行：方正友好交流の会　　編集人：大類善啓　　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　　加入者名　方正友好交流の会
HP アドレス：http:/www.houmasa.com/